子ども会を通してみる教育の地域差に関する研究

The study of regional diversity of social education from the view point of children association "Kodomo-kai".

広島大学大学院教育学研究科
科学文化教育学専攻　社会認識教育学専修

秋元　美輝

キーワード
子ども会，社会教育，コミュニティ，広島市

章構成

●第Ⅰ章　序論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１節　研究の意義と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

第２節　先行研究の整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第３節　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

●第Ⅱ章　全国子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第１節　全国子ども会連合会設立過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第２節　全国の活動比較・分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第３節　各自治体子ども会日常生活活動の分析・・・・・・・・・・・・・・・50

●第Ⅲ章　広島市子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

第１節　調査地域広島市の特徴概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

第２節　広島市子ども会育成指導員制度について・・・・・・・・・・・・・・93

第３節　調査地域子ども会の地域分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

第４節　中区基町学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

第５節　中区袋町学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・100

第６節　中区舟入学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

第７節　南区大州学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

第８節　安佐北区高陽ニュータウン学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・105

ⅰ．安佐北区落合東学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・105

ⅱ．安佐北区真亀学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・107

ⅲ．安佐北区亀崎学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・109

ⅳ．安佐北区倉掛学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・110

第９節　安佐北区口田東学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・112

第１０節　安佐北区三入東学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・113

第１１節　安佐北区狩小川学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・115

第１２節　安佐北区可部学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・115

第１３節　安佐北区可部南学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・118

第１４節　安佐北区井原学区子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・120

第１５節　各調査地域の比較・分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121

●第Ⅳ章　東広島市子ども会の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第１節　東広島市の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第２節　東広島市子ども会連合会の役割・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第３節　東広島市各調査地域の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
第４節　東広島市各単位子ども会の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
ｉ．三升原若葉子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
ⅱ．テクノタウン子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
ⅲ．松風ハイツ子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
ⅳ．七ツ池レインボー子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
ｖ．下組東子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
ⅵ．円城寺北子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・150
ⅶ．日興苑子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
ⅷ．上戸子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・156
ⅸ．才ヶ迫子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
ｘ．下西わかば子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
ｘｉ．檜山子ども会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
第５節　東広島市子ども会比較・分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161

●第Ⅴ章　結論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・173
第１節　子ども会の課題と展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・174
第２節　本研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・180
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・184

第 I 章　序論

第１節　研究の意義と目的

子どもの教育環境には，学校・家庭・地域という三つの場があげられる。この三つの場のうち,「地域」を場とした子どもへの教育環境は，住民属性や住民組織が形成するコミュニティなどの地域の社会的環境や地域の伝統などの文化的状況,あるいは建造物や各種施設･土地利用など，総体的な地域的特性を反映したものとなり，地理学的研究課題として重要である。子どもへの教育の場としての地域には，子ども会・町内会などの住民が構成するコミュニティをあげることができる。学校教育の場としての小・中学校のほかに，これらの地域を舞台とした教育の中で，本研究は子ども会について，その活動内容や活動主体，参加者などについて詳細に調査した。

中央審議会は 1996（平成 8）年に学校五日制に関する答申を出した以降も，1998（平成 10）年 7 月「今後の地方教育行政の在り方」について，2004 年 4 月「少子化と教育について」（報告）を出し，地域全体で子育てをささえ，子どもの成長をささえる取組みを展開していくために，地方分権を提案している。また，家族を対象とした自然の中であそぶセミナーの開催，家庭教育学級への参加の促進，親の悩みに対応出来る相談体制の整備,企業への出前講座など家庭教育の環境整備を提案している。

また，1996（平成 8）年以降のおもな文部省の思索に，家庭・学校・地域社会の新たな連携を推進するための調査研究「学社融合推進プロジェクト」，1997（平成 9）年度より「家庭教育子育て支援推進事業」などがある。

学校において 2002（平成 14）年度から，週五日制が取り入れられたことで，子どものたちの生活全体を見直し，ゆとりのある生活の中で，子

どもたちが個性を生かしながら豊かな自己実現を図ることが求められ，休日や放課後に地域が子どもへの教育を行う役割がより期待されることとなった。その教育を担う組織の一つが子ども会である。その子ども会を通し，地域を場とした子どもへの教育環境の現状・課題を把握することで，これからの子どもへの教育を地域でどう行っていくべきか，よりよく子どもを育てるためには何が必要なのかを明らかにすることを本研究の目的とする。

第２節　先行研究の整理

先行研究は，子ども会の地域での活動内容を紹介したもの，子ども会の意義などを論じたものが数多くある。

例えば，　子ども会研究として，野垣義行（1978）は論文「子ども会研究（1）―全子連の役割を中心に―」にて子ども会活動の事故・指導者の責任範囲について,全国子ども会連合会の役割や機能についてまとめ，子ども会連合会がどういう組織なのかを明らかにしている。また，野垣義行（1980）は「子ども会研究（2）―ジュニア・リーダーの意識と実態―」にて，全国子ども会リーダー研究集会，全国８つのブロック（北海道，東北，関東甲信越静，東京，東海・北陸，近畿，中国・四国，九州）と他指定都市で行っている地域子ども会ジュニア・リーダー大会の参加者へのアンケートをもとに，1979（昭和 54）年７月 26 日から９月 24 日にわたって集めたデータの分析が行われている。ここでは，子ども会との関係，時間，悩みなどをアンケートから分析し，ジュニア・リーダーの活動内容を具体的に明らかにしている。野垣義行（1983）は「子ども

会研究（3）―子ども会活動診断の試み―」で，子ども会の意義，子ども会の現状について述べている。そして，役員の人たちが自分たちの子ども会活動はどんな問題をもっているか判断できる診断票を提案している。しかし，これは理想の子ども会像がひとつでないと診断できないものなのではないだろうか。

このように，子ども会の意義，全国的な活動やアンケート・データ分析を行って子ども会の現状を明らかにしている論文は存在するが，なぜ地域差が現れるのかという空間的な視点，住民属性などに着目した論文は少ない。

研究対象とする広島市の子ども会についての先行研究は,牧美与子「広島市における子ども会活動の地域性」がある。牧（2005）は広島市の校区の変遷を通し，校区の特色や属性を明確にし，その校区の子ども会活動にどのように影響しているのか，について研究を行っている。この研究では，校区と子ども会加入率のデータ分析が主であり，インタビューは口田東と袋町のみ行っている。　本研究では，牧（2005）の先行研究よりもアンケート・インタビュー地域を広げ，東広島市と広島市の比較を踏まえ，より広範囲の比較を行う。

第３節　研究の方法

研究方法は，最初に全国子ども会の活動状況の把握では，社団法人全国子ども会連合会「2008 年度版子ども会白書」に掲載されているデータを分析資料として用いた。

広島市の子ども会の活動状況の把握については，広島市子ども会連合

会「平成 20 年度第 53 回総会資料」に掲載されているデータを分析し，その分析をもとに，子ども会会長，育成指導委員に対して，活動状況の詳細を分析するためにアンケート・インタビューを行った。また，安全会に各単位子ども会が「活動報告書」を出しており，そこから活動内容を参考とした。

広島市を事例として取り上げるのは，①全国でも加入率が平均に近いこと，②原爆や平和関係の行事が行われるなど地域に特徴があること，③育成指導員という珍しい制度があること④広域中心都市であり，市街地が発展していること，また，1980 年代にベッドタウンとして多くの新興団地がつくられていること，古くからの伝統的集落が残っており，各地域に特徴があるため，子ども会の活動内容を比較・分析する対象として最適であること，という四つの理由からである。

東広島市の子ども会の活動状況の把握については，東広島市子ども会連合会の会長へのインタビューと，東広島市子ども会連合会に所属している 21 単位子ども会へアンケートを送付し，うち 11 単位子ども会からの返信があった。それに加えて，電話による聞き取り調査を行った。

東広島市を事例として取り上げるのは，第一に広島市のベッドタウンとして今でも宅地開発されており，工業誘致・大学誘致によって人口を増やしてきた地域として，広島市と比較しやすいと予想したこと，第二に広島市は子ども会が組織化されているのに対し，東広島市は比較的組織化されていない地域だからである。

第Ⅱ章　全国子ども会の現状

第１節　全国子ども会連合会設立過程

全国子ども会連合会（2008）によると，1963（昭和 38）年 11 月，文部省主催の「少年生活指導研究集会」が国立中央青年の家において開催時に，かねてから子ども会指導者の間に譲成されつつあった全国組織結成の機運が一挙に高まり，この研究集会参加者の有志をメンバーとして「全国少年団体指導者連絡協議会」が結成された。翌 1964（昭和 39）年 4 月にこの「協議会」が指導育成する少年団体は，その生成過程においては種々の形をとってはいるが，地域を基盤として組織され子どもの心身ともに健全育成を図ることを目的とする「子ども会」を目指すものであった。「子ども会」とは，子どもを構成員とする集団であり，そこに指導者と育成者が加わり成立することが確認された。さらに「協議会」を発展解消して「全国子ども会連合会」を改称し，単位子ども会，指導者および連合組織を会員とする任意団体として子ども会は発足した。1965（昭和 40）年 6 月，子どもたちの健全育成を指向するためには基本に教育の柱を立てることが必要であるとして，文部省に社団法人の設立許可を申請し，同年 8 月 24 日許可された。子ども会の会員は，当時，都道府県・指定都市の子ども会連合組織を結成していることは数箇所に過ぎなかったため，単位子ども会の代表者を持って会員とした。全国各地で子どもの欲求，親の願い，社会の要請を受けて単位子ども会の結成が進められ，その結果，より充実した活動への指向，単位子ども会だけでは解決できない課題のために連携の必要性が認

識され，小学校区，市区町村の子ども会連合会組織へと発展し，都道府県・指定都市の連合組織の結成が急速に進められた。このような趨勢を受けて，全国子ども会連合会は，1967（昭和 42）年 8 月から翌年 1 月にかけて，全国組織のあり方を相談し，1968（昭和 43）年 2 月静岡県下田市において都道府県・指定都市の組織代表者（未組織のところは行政担当者）が一堂に会し，「地域子ども会発展のためには是非とも全県の総意を結集した組織が必要である。下田会議を出発点として進むこと」として参加者の意見の一致をみた。1968（昭和 43）年 9 月定款の改定をし，全国の子ども会関係者の総意に基づく組織として，都道府県・指定都市の子ども会連合組織の代表者を社員とする社団法人全国子ども会連合会として，再出発し現在にいたっている。[1]

このように，全国の子ども会指導者が，全国組織結成を求め，1964（昭和 39）年 4 月全国子ども会連合会を任意団体でつくったのち，1965（昭和 40）年 6 月社団法人として文部省に認可された。その当時は，都道府県・指定都市の子ども会連合会を結成していることは数箇所しかなかったが，全国各地で単位子ども会結成が求められ，都道府県・指定都市の子ども会連合会もしだいに結成された。

第 2 節　全国の活動比較・分析

まず，子ども会の活動状況の把握をするために，全国で子ども会の加入率が高い自治体はどこなのか，加入率が高い地域に共通性があるのか

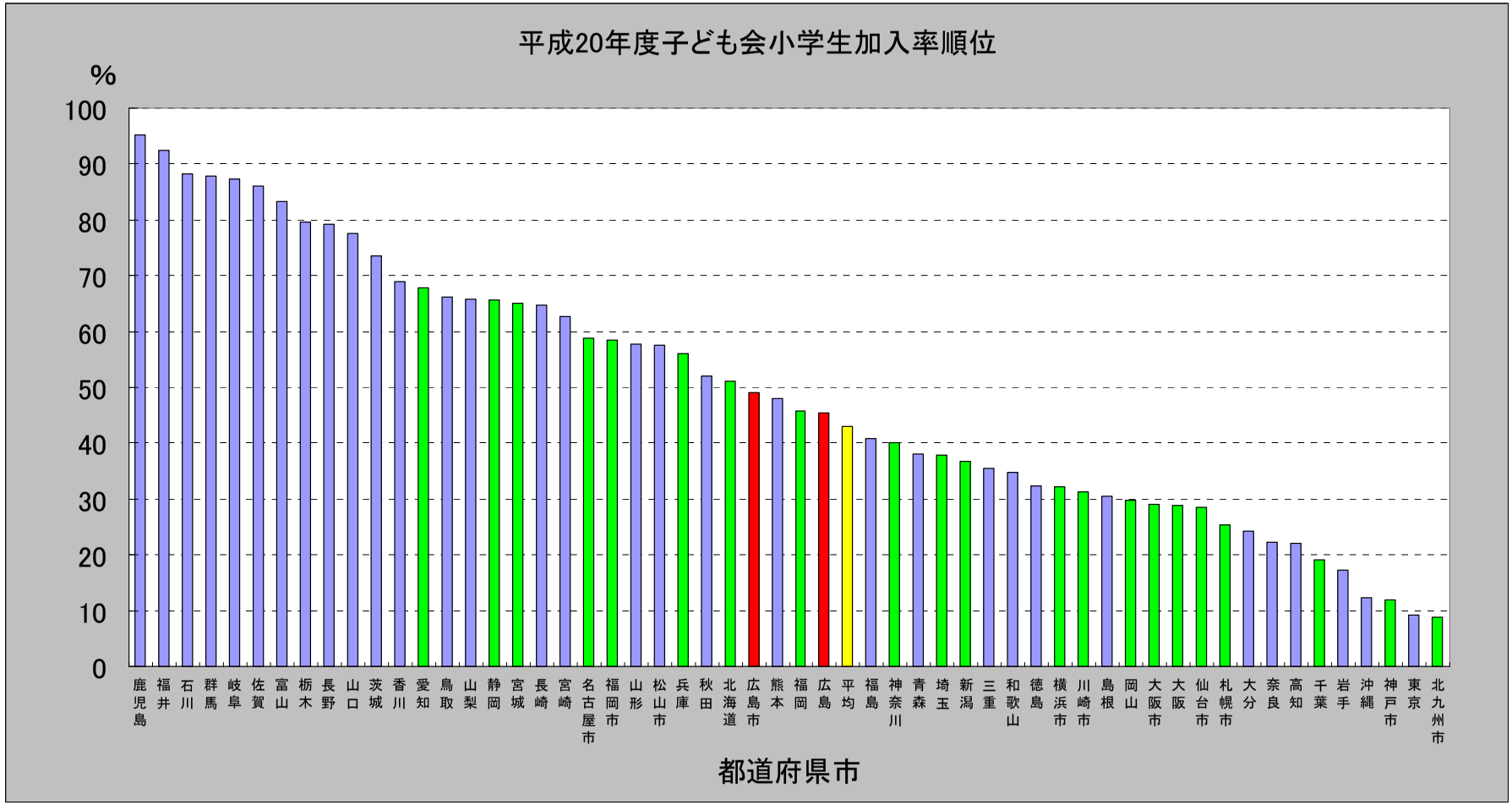
を見ていきたい。

表Ⅱ－1は，2008（平成 20）年度子ども会小学生加入率ランキングを示している。2008（平成 20）年度子ども会小学生加入者率の順位をみると，政令指定都市[2]がある県・市は上位 12 位以内には入っていない。このことから，例外もあるが政令都市でない都道府県の方が子ども会への加入率が比較的高いといえる。

都道府県市	平成20年度
鹿児島	95.3
福井	92.4
石川	88.3
群馬	87.8
岐阜	87.3
佐賀	86
富山	83.3
栃木	79.6
長野	79.2
山口	77.6
茨城	73.6
香川	69
愛知	67.9
鳥取	66.2
山梨	65.8
静岡	65.6
宮城	65
長崎	64.7
宮崎	62.7
名古屋市	58.9
福岡市	58.4
山形	57.7
松山市	57.6
兵庫	56.1
秋田	52
北海道	51.1
広島市	49.1
熊本	47.9
福岡	45.8
広島	45.4
平均	43
福島	40.9
神奈川	40
青森	38
埼玉	37.9
新潟	36.8
三重	35.5
和歌山	34.8
徳島	32.3
横浜市	32.2
川崎市	31.3
島根	30.5
岡山	29.7
大阪市	29
大阪	28.8
仙台市	28.5
札幌市	25.4
大分	24.2
奈良	22.3
高知	22.1
千葉	19.2
岩手	17.2
沖縄	12.4
神戸市	12
東京	9.2
北九州市	8.9

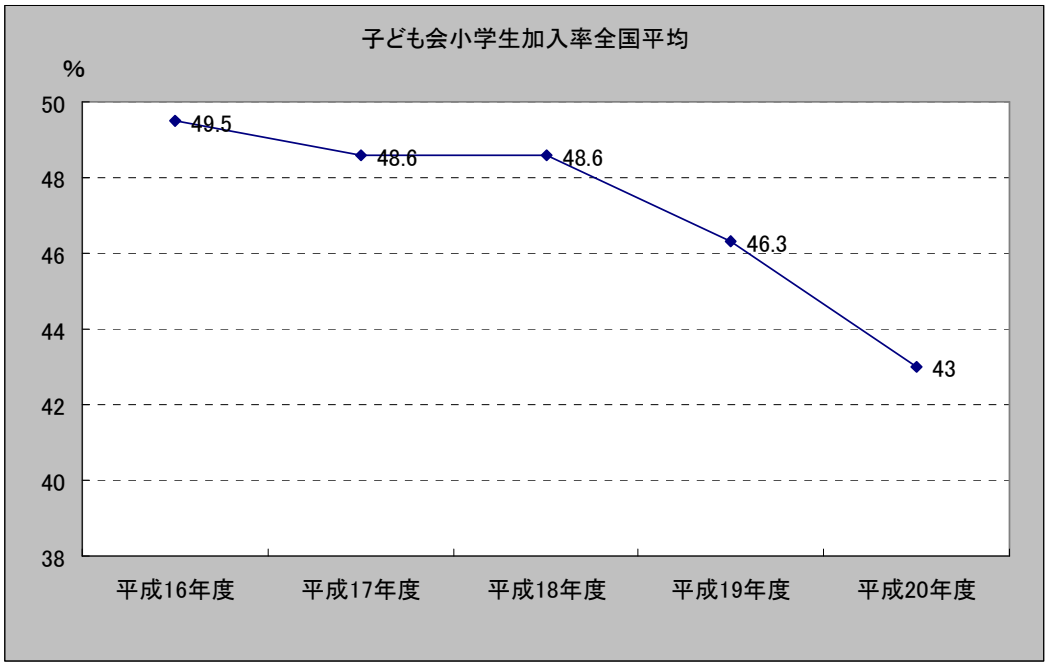
表Ⅱ－１　平成20年度小学生子ども会加入率順位表

（秋元作成）



図Ⅱ－1　平成 20 年度子ども会小学生加入率順位（赤：広島市・広島，黄：平均，緑：政令指定都市）（秋元作成）

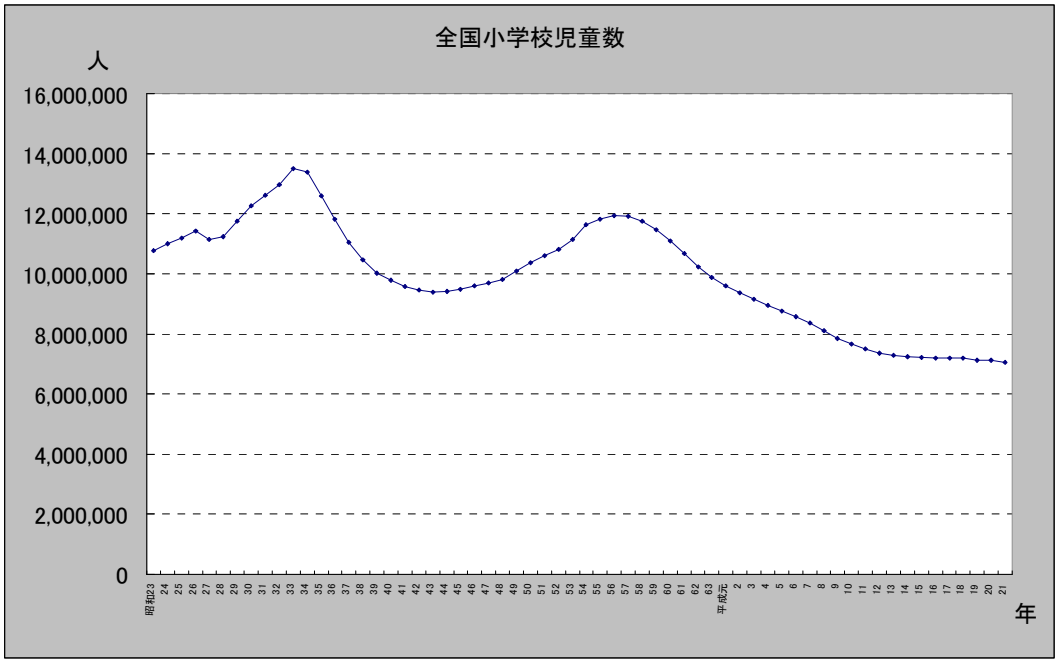
次に，全国の子ども会の動向を探るため，加入率の変化を分析する。子ども会小学生加入率全国平均の 2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度の推移は図Ⅱ－2 の通りである。



図Ⅱ－2　子ども会小学生加入率全国平均（秋元作成）

全国平均は，2004（平成 16）年度から 2006（平成 18）年度まではほぼ横ばいであるが，2006（平成 18）年度から 2008（平成 20）年度までは，減少し続けている。これは，少子化によって子どもの人数が減少していることもあるが，子どもの減少数以上に子供会の加入者数は減少している。

全国の小学生児童数の 1948（昭和 23）年から 2009（平成 21）年までの推移は図Ⅱ－3 の通りである。

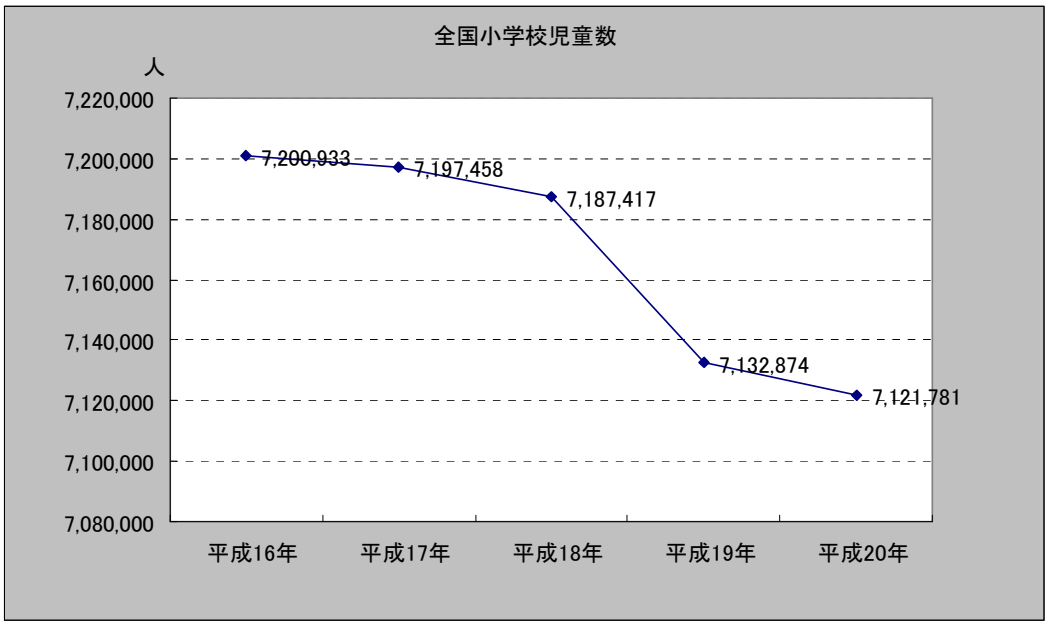


図Ⅱ－3　全国小学校児童数（秋元作成）

図Ⅱ－3を見てわかるように，全国の小学校児童数は第二次ベビーブーム期の 1981（昭和 56）年以降は少子化によって 11,924,653 人からなだらかに減少傾向である。

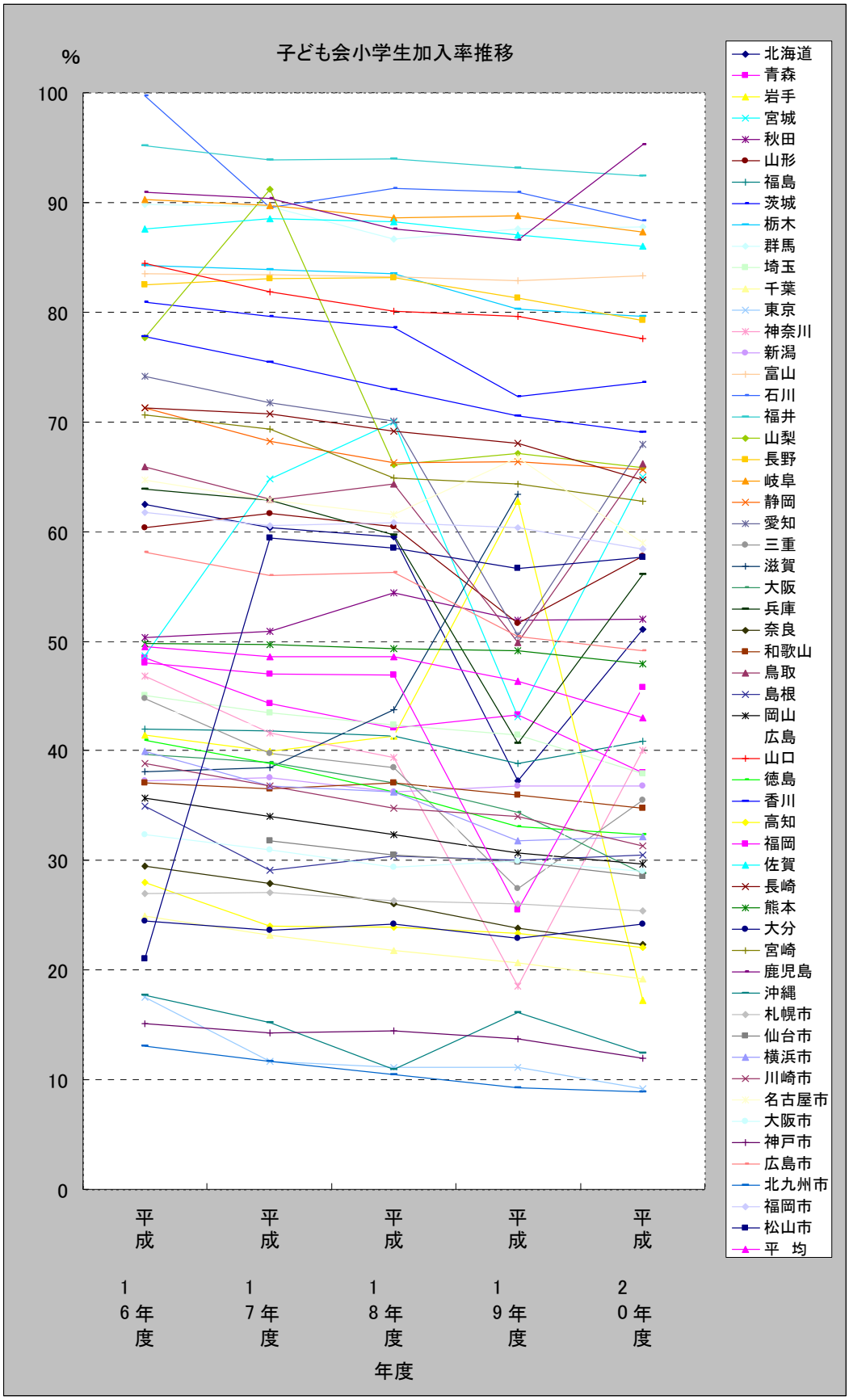
子ども会小学生加入率全国平均と比べるために，全国の小学生児童数の 2004（平成 16）年から 2008（平成 20）年の推移を図Ⅱ－4に示す。

図Ⅱ－4の 2004（平成 16）年から 2008（平成 20）年までの全国小学校児童数をみると，2004（平成 16）年から 2005（平成 17）年まで横ばい，2005（平成 17）年から 2008（平成 20）年にかけて緩やかに減少していることがわかる。全国の小学生児童数は緩やかに減少している。2004（平成 16）年から 2008（平成 20）年には，79,152 人減少している。



図Ⅱ－4　全国小学校児童数（秋元作成）

次に，各都道府県と各政令指定都市の 2004（平成 16）年から 2008（平成 20）年までの小学生の子ども会加入率の推移を見ていく。図Ⅱ－5 を見ると，多くの自治体が横ばいで，増減があまり見られないか，減少傾向にあることがわかる。大きな変化が見られるのは，2007（平成 19）年度である。2007（平成 19）年度は，全体の約三分の二の自治体が，減少傾向である。その中でも，約三分の一の自治体は 10％以上の減少がある（図Ⅱ－5）。これは，2006（平成 18）年から 2007（平成 19）年にかけ，54,543 人（図Ⅱ－4）全国の児童数が減少していることと関係あるだろう。2007（平成 19）年に加入率が 10％以上減少した 9 自治体のうち，2008（平成 20）年には，4 自治体が 2006（平成 17）年の加入率とほぼ同値に戻るか，または，3 都道府県は 2006（平成 17）年よりも増加傾向にある。

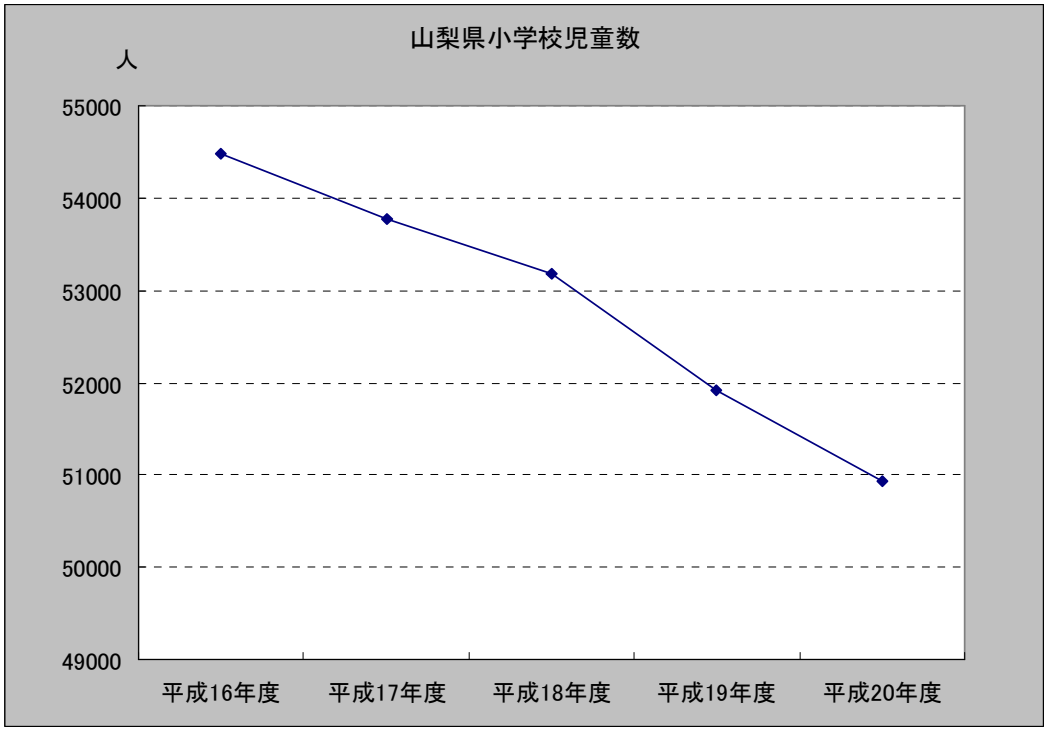


表Ⅱ－5　都道府県市子ども会小学生加入率（秋元作成）

次に，子ども会加入率の増減率に特徴がある都道府県をあげ，その内容について分析する。

松山市の小学生の子ども会加入率は，は 2004（平成 16）年度 21%だったのに対し，2005（平成 17）年度には 59.4%となり，38.4%増加している。「松山市特定事業主行動計画～職員のための子育て応援プラン～」（2005）によると，子ども・子育てに関する地域貢献活動として，子ども会活動等や地域の伝統文化，芸術の保存継承活動等への職員の積極的な参加を支援する。実施時期は 2005（平成 17）年からと記述してあることから，松山市が 2005（平成 17）年から子ども会活動に力をいれたことによって加入率が上昇したのだろう。

また，山梨県では 2005（平成 17）年度に増加し，2006（平成 18）年度には減少が見られる。2005（平成 17）年 2 月に，次世代育成支援地域行動計画やまなし子育て支援プラン[3]がつくられており，この中で少子化が与える影響として，「子ども会等の地域活動が困難になる」と報告されている。山梨県の小学校児童数は 2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度までは，減少傾向にある（表Ⅱ－6）。このことにより，子ども会の加入率の増減は児童数の増減以外の要因があると考えられる。



図Ⅱ－6　山梨県小学校児童数[4]（秋元作成）

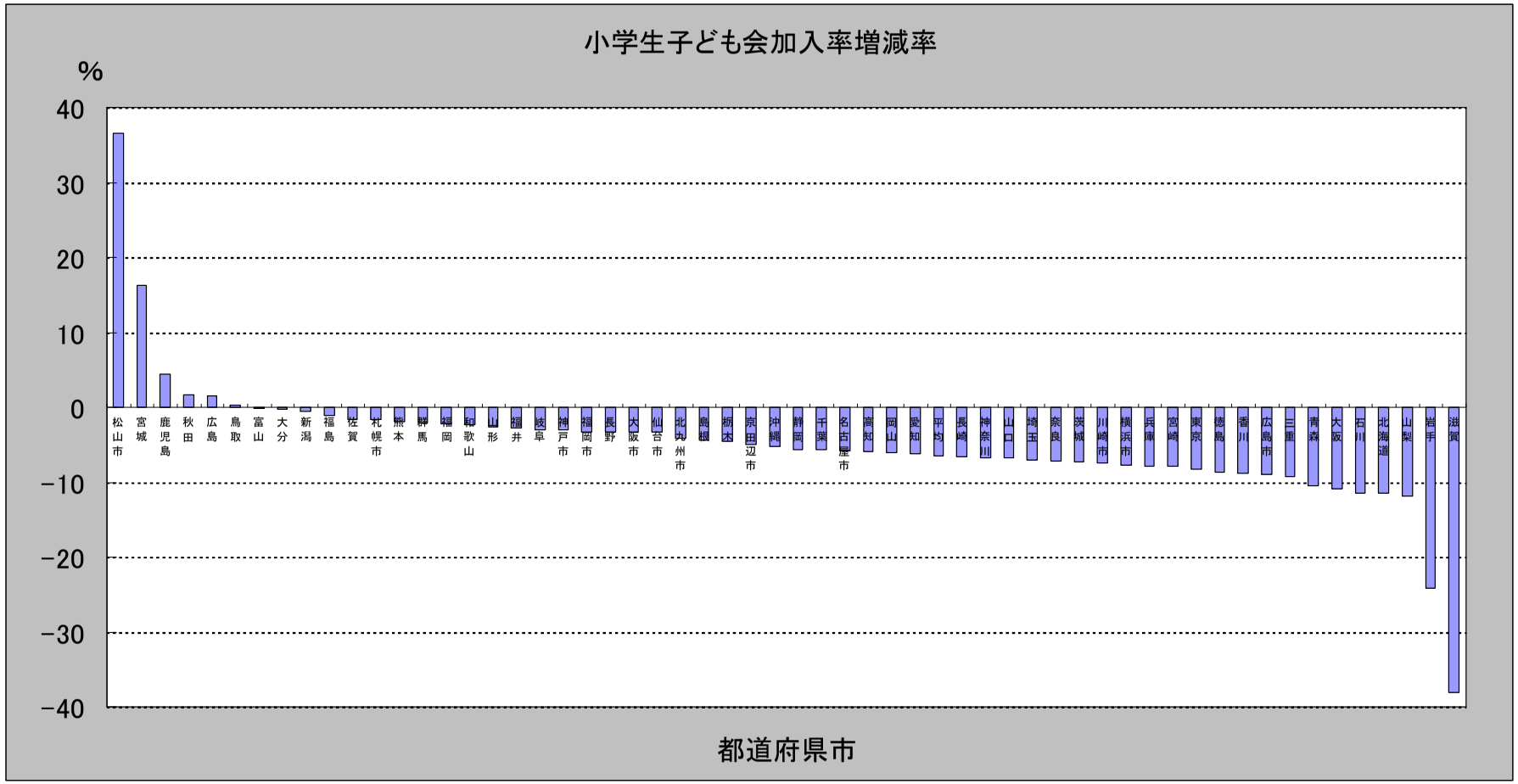
次に，2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度の子供会の加入者数の増減率を見る。10％以上変化している自治体について分析する。表Ⅱ－2は，2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度までの小学生子ども会加入率増減率を示し，図Ⅱ－7は 2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度までの小学生子ども会加入率の増減率を示している。

10％以上増加している自治体は，松山市，宮城県である。特に両地域に共通点は見られない。一方，10％以上減少している自治体は，青森，大阪，石川，北海道，山梨，岩手，滋賀である。

都道府県市	平成16年度～平成20年度の増減率
松山市	36.6
宮城	16.3
鹿児島	4.4
秋田	1.7
広島	1.5
鳥取	0.3
富山	−0.2
大分	−0.3
新潟	−0.5
福島	−1.1
佐賀	−1.6
札幌市	−1.6
熊本	−1.9
群馬	−2
福岡	−2.2
和歌山	−2.3
山形	−2.6
福井	−2.8
岐阜	−3
神戸市	−3.1
福岡市	−3.3
長野	−3.3
大阪市	−3.3
仙台市	−3.3
北九州市	−4.2
島根	−4.4
栃木	−4.6
京田辺市	−5
沖縄	−5.3
静岡	−5.7
千葉	−5.7
名古屋市	−5.8
高知	−5.9
岡山	−6
愛知	−6.2
平均	−6.5
長崎	−6.6
神奈川	−6.8
山口	−6.8
埼玉	−7.1
奈良	−7.2
茨城	−7.3
川崎市	−7.5
横浜市	−7.7
兵庫	−7.8
宮崎	−7.9
東京	−8.3
徳島	−8.7
香川	−8.8
広島市	−9
三重	−9.3
青森	−10.5
大阪	−10.9
石川	−11.4
北海道	−11.4
山梨	−11.9
岩手	−24.2
滋賀	−38.1

表Ⅱ－2　平成16年度から平成20年度までの

小学生子ども会加入率増減率（秋元作成）



図Ⅱ－7　平成 16 年度から平成 20 年度までの小学生子ども会加入率の増減率（秋元作成）

次に，年度ごとの細かい変化をとらえる。2005（平成 17）年度，2006（平成 18）年度，2007（平成 19）年度，2008（平成 20）年度の前年比増減率を見ていく。10%以上変化した自治体について分析する。

「表Ⅱ－3　平成 17 年度小学生子ども会加入率増減率」と「図Ⅱ－8　平成 17 年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）」からわかるように，2005（平成 17）年度に，前年度より 10%以上増加している自治体は，松山市，仙台市，宮城，山梨である。一方，前年度より 10%以上減少しているのは石川である。自治体別にみた子ども会加入者の増減率の平均は－0.9%である。このことから，2005（平成 17）年度は前年度に比べて，加入率は多くの自治体がほぼ横ばい，そして一部の自治体が増加したといえるだろう。

「表Ⅱ－4　平成 18 年度小学生子ども会加入率増減率」と「図Ⅱ－9　平成 18 年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）によると，2006（平成 18）年度に，前年度より子ども会加入率が 10%以上増加している自治体はない。一方，前年度より子ども会加入率が 10%以上減少しているのは山梨のみである。平均は，0%である。このことから，ほとんどの自治体が前年度に比べ加入率は横ばいであることがわかる。

（「表Ⅱ－5　平成 19 年度小学生子ども会加入率増減率」と「図Ⅱ－10　平成 19 年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）」に示されるように，2007（平成 19）年度に，子ども会加入率が前年度より 10%以上増加している自治体は，岩手，滋賀である。共通点は特にみられない。一方，前年度より子

ども会加入率が10%以上減少している自治体は，三重，鳥取，広島，兵庫，愛知，神奈川，福岡，北海道，宮城である。三重，鳥取以外は，広域中心都市の所在する自治体である。子ども会加入率前年度比平均は，－2.3%である。このことから，多くの自治体は横ばいであるが，約4分の1の都道府県は減少傾向にある。平均が減少傾向にあるので，全体的に前年比より減少傾向にあることがわかる。

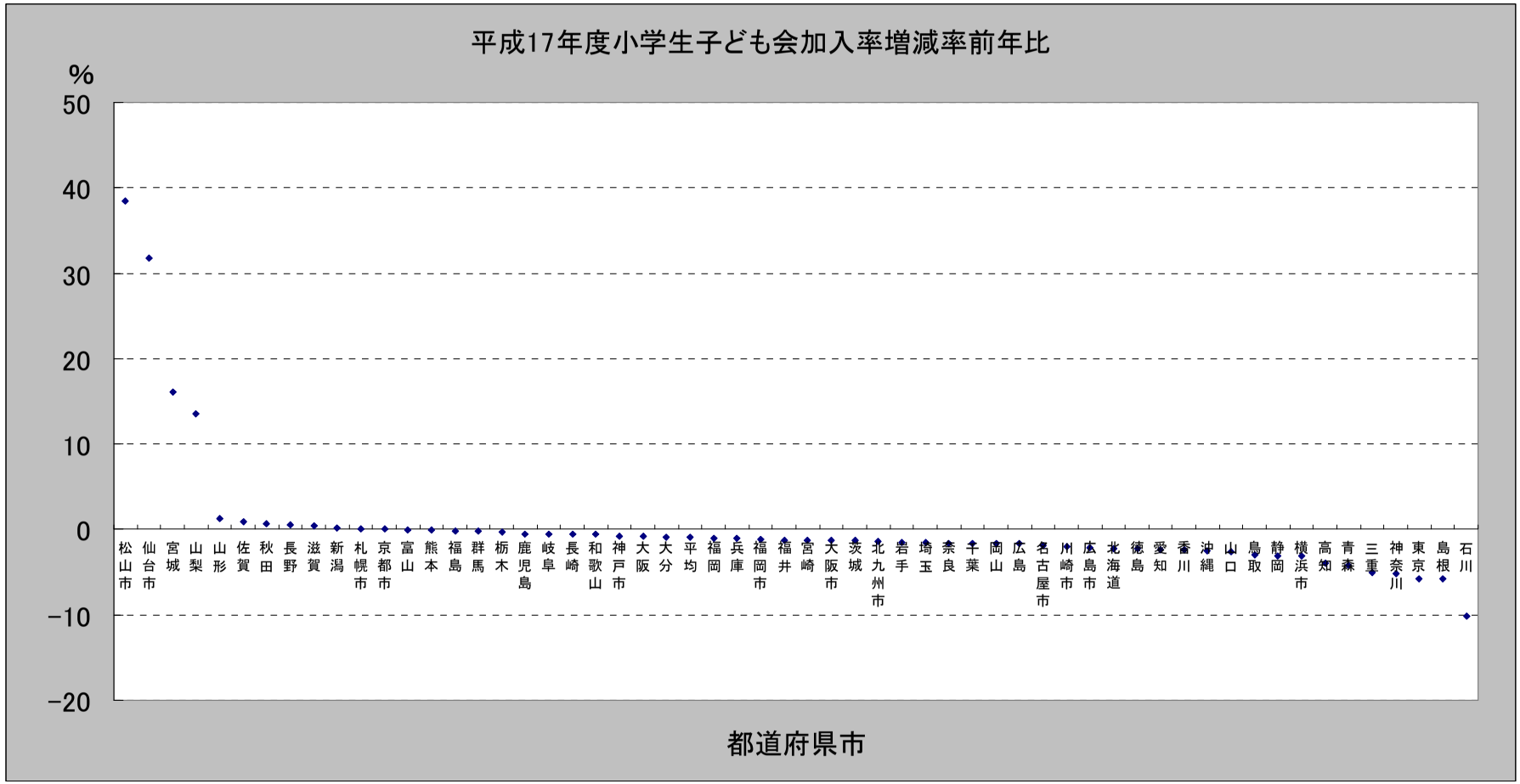
（「表Ⅱ－6　平成20年度小学生子ども会加入率増減率」と「図Ⅱ－11　平成20年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）」に示されるように，2008（平成20）年度に前年度から子ども会加入率が10%以上増加している自治体は，北海道，兵庫，鳥取，愛知，福岡，広島，神奈川，宮城である。鳥取，広島，兵庫，愛知，神奈川，福岡，北海道，宮城は，前年度10%減少し，2008年度10%以上増加している。これらの共通点として鳥取以外は，政令指定都市がある都道府県である。一方，前年度より10%以上減少している自治体は，岩手である。平均は，－3.3%であることから，全体的に前年度より加入率が減少していることがわかる。

このように，多少増減が大きい自治体はあるものの，多くの自治体が横ばい，またはなだらかに減少傾向にあることがわかる。

都道府県市	平成17年度
松山市	38.4
仙台市	31.8
宮城	16.1
山梨	13.5
山形	1.3
佐賀	0.9
秋田	0.6
長野	0.5
滋賀	0.4
新潟	0.2
札幌市	0.1
京都市	0
富山	-0.1
熊本	-0.1
福島	-0.2
群馬	-0.2
栃木	-0.3
鹿児島	-0.5
岐阜	-0.6
長崎	-0.6
和歌山	-0.6
神戸市	-0.8
大阪	-0.8
大分	-0.9
平均	-0.9
福岡	-1
兵庫	-1.1
福岡市	-1.2
福井	-1.3
宮崎	-1.3
大阪市	-1.3
茨城	-1.3
北九州市	-1.4
岩手	-1.5
埼玉	-1.5
奈良	-1.6
千葉	-1.7
岡山	-1.7
広島	-1.7
名古屋市	-1.9
川崎市	-2
広島市	-2.1
北海道	-2.2
徳島	-2.2
愛知	-2.4
香川	-2.4
沖縄	-2.5
山口	-2.6
鳥取	-3
静岡	-3.1
横浜市	-3.1
高知	-4
青森	-4.2
三重	-5
神奈川	-5.2
東京	-5.8
島根	-5.8
石川	-10.2

表Ⅱ－3　平成17年度小学生子ども会加入率増減率

（秋元作成）



図Ⅱ－8　平成 17 年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）（秋元作成）

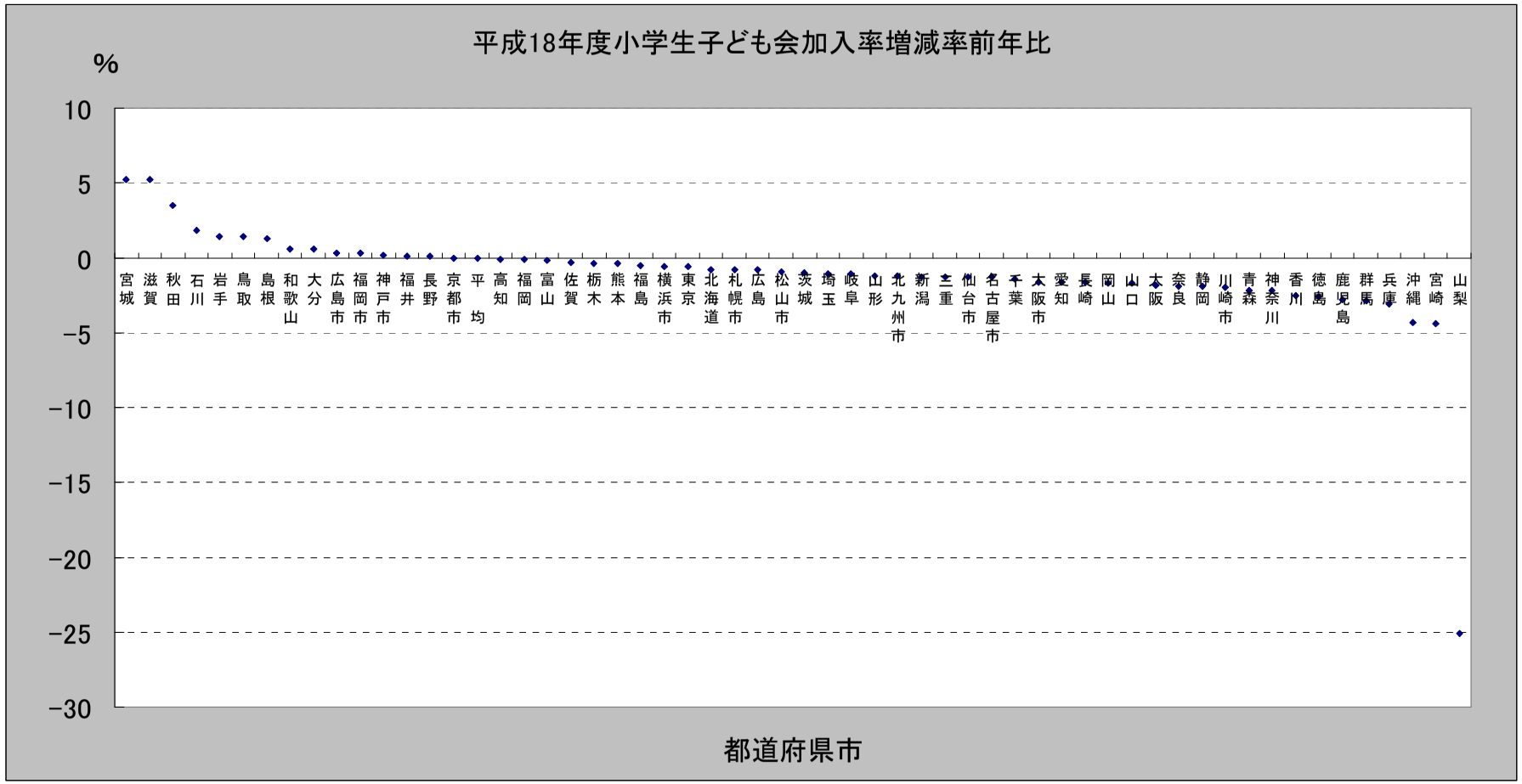
都道府県市	平成18年度
宮城	5.2
滋賀	5.2
秋田	3.5
石川	1.8
岩手	1.4
鳥取	1.4
島根	1.3
和歌山	0.6
大分	0.6
広島市	0.3
福岡市	0.3
神戸市	0.2
福井	0.1
長野	0.1
京都市	0
平均	0
高知	−0.1
福岡	−0.1

富山	−0.2
佐賀	−0.3
栃木	−0.4
熊本	−0.4
福島	−0.5
横浜市	−0.6
東京	−0.6
北海道	−0.8
札幌市	−0.8
広島	−0.8
松山市	−0.9
茨城	−1
埼玉	−1.1
岐阜	−1.1
山形	−1.2
北九州市	−1.2
新潟	−1.3
三重	−1.3
仙台市	−1.3
名古屋市	−1.3
千葉	−1.4

大阪市	−1.6
愛知	−1.6
長崎	−1.6
岡山	−1.7
山口	−1.7
大阪	−1.8
奈良	−1.9
静岡	−1.9
川崎市	−2
青森	−2.2
神奈川	−2.2
香川	−2.5
徳島	−2.6
鹿児島	−2.8
群馬	−2.9
兵庫	−3.1
沖縄	−4.3
宮崎	−4.4
山梨	−25

表Ⅱ－４　平成18年度小学生子ども会加入率増減率

（秋元作成）

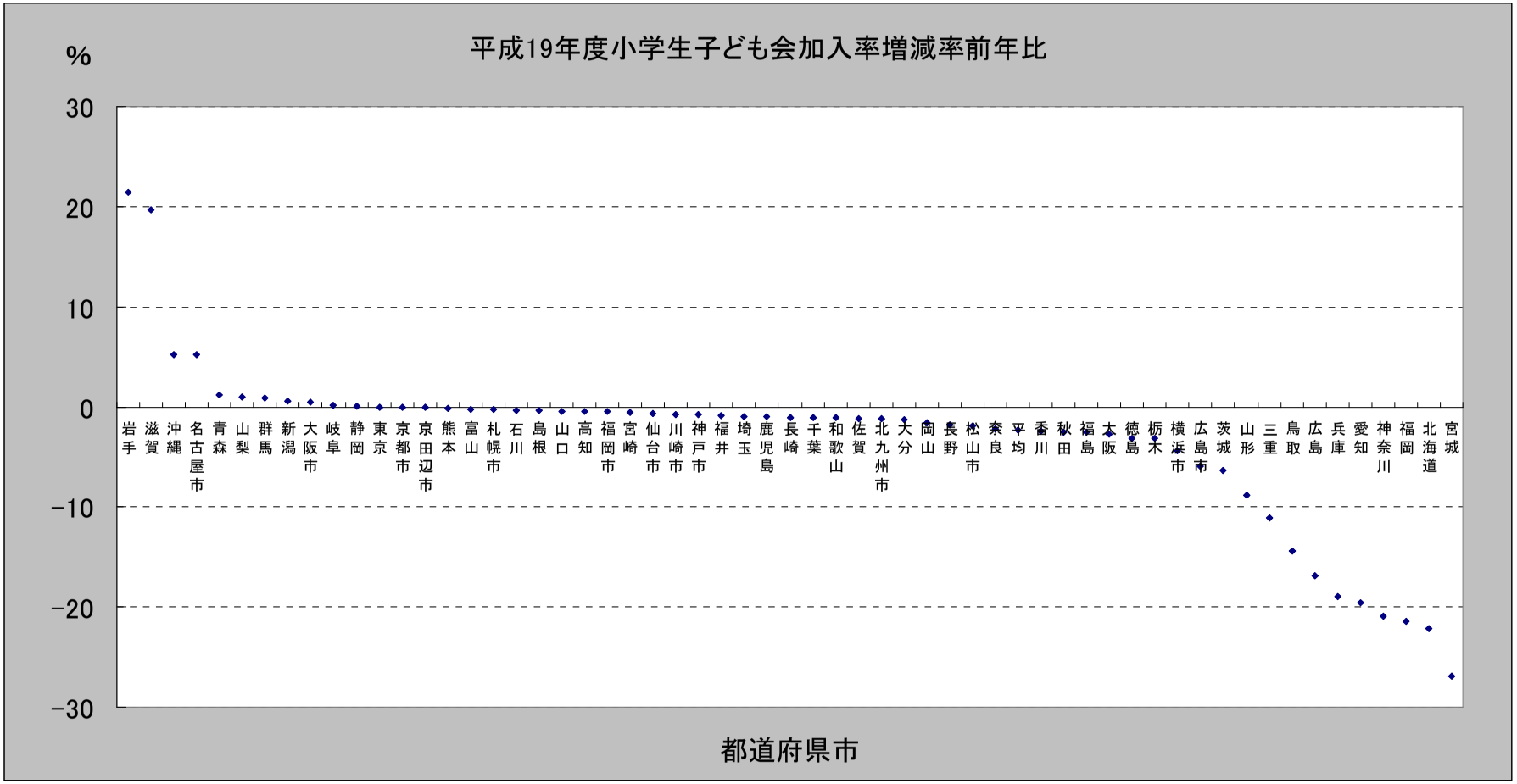


図Ⅱ－9　平成 18 年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）（秋元作成）

都道府県市	平成19年度
岩手	21.4
滋賀	19.7
沖縄	5.2
名古屋市	5.2
青森	1.2
山梨	1
群馬	0.9
新潟	0.6
大阪市	0.5
岐阜	0.2
静岡	0.1
東京	0
京都市	0
京田辺市	0
熊本	−0.2
富山	−0.3
札幌市	−0.3
石川	−0.4
島根	−0.4
山口	−0.5
高知	−0.5
福岡市	−0.5
宮崎	−0.6
仙台市	−0.7
川崎市	−0.8
神戸市	−0.8
福井	−0.9
埼玉	−1
鹿児島	−1
長崎	−1.1
千葉	−1.1
和歌山	−1.1
佐賀	−1.2
北九州市	−1.2
大分	−1.3
岡山	−1.6
長野	−1.8
松山市	−1.9
奈良	−2.2
平均	−2.3
香川	−2.4
秋田	−2.5
福島	−2.5
大阪	−2.7
徳島	−3.1
栃木	−3.2
横浜市	−4.4
広島市	−5.9
茨城	−6.3
山形	−8.8
三重	−11
鳥取	−14
広島	−17
兵庫	−19
愛知	−20
神奈川	−21
福岡	−21
北海道	−22
宮城	−27

表Ⅱ－5　平成19年度小学生子ども会加入率増減率

（秋元作成）



図Ⅱ－10　平成 19 年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）（秋元作成）

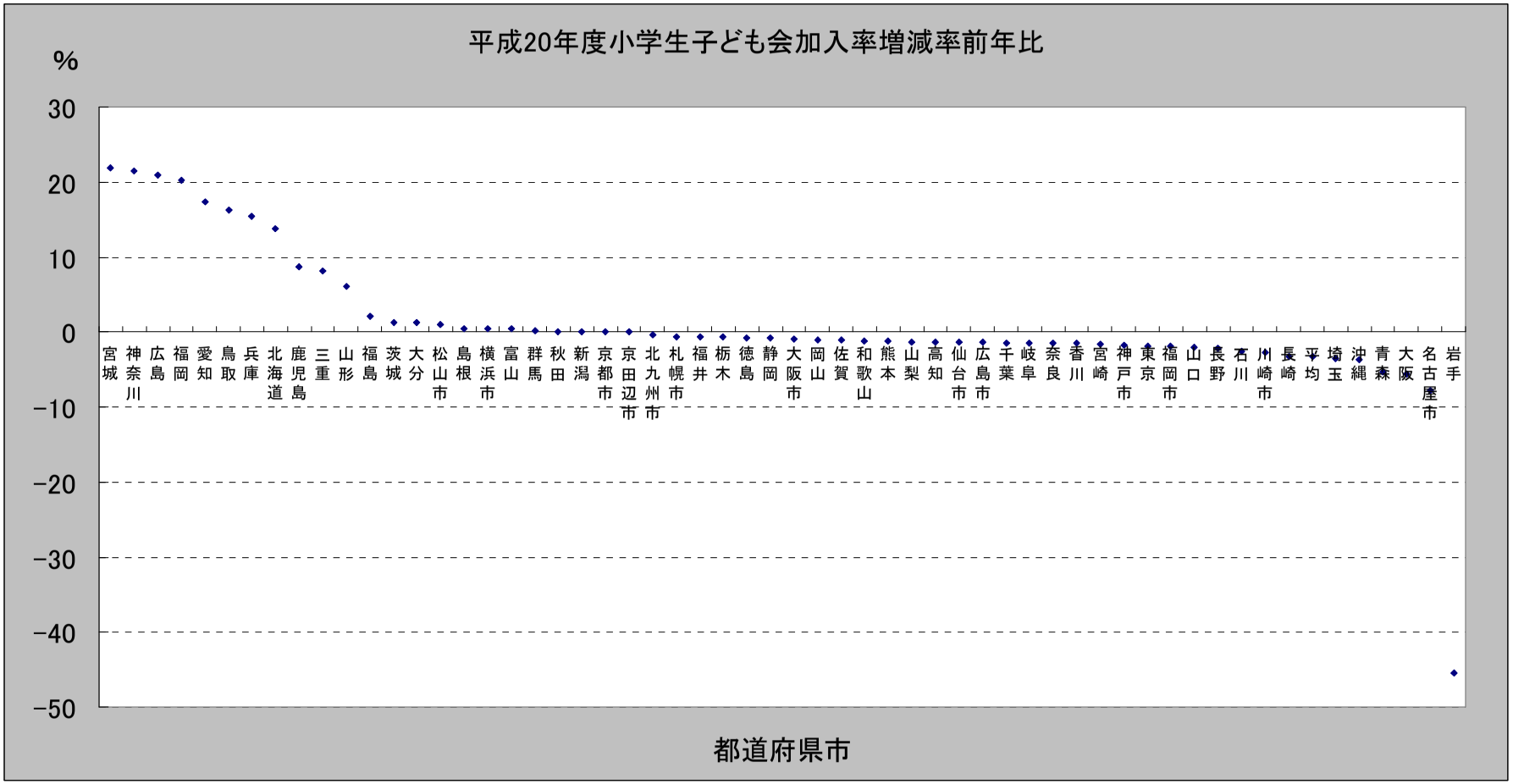
都道府県市	平成20年度
宮城	21.9
神奈川	21.5
広島	20.9
福岡	20.3
愛知	17.4
鳥取	16.3
兵庫	15.4
北海道	13.8
鹿児島	8.7
三重	8.1
山形	6.1
福島	2.1
茨城	1.3
大分	1.3
松山市	1
島根	0.5
横浜市	0.4
富山	0.4

群馬	0.2
秋田	0.1
新潟	0
京都市	0
京田辺市	0
北九州市	−0.4
札幌市	−0.6
福井	−0.7
栃木	−0.7
徳島	−0.8
静岡	−0.8
大阪市	−0.9
岡山	−1
佐賀	−1
和歌山	−1.2
熊本	−1.2
山梨	−1.3
高知	−1.3
仙台市	−1.3
広島市	−1.3
千葉	−1.5

岐阜	−1.5
奈良	−1.5
香川	−1.5
宮崎	−1.6
神戸市	−1.7
東京	−1.9
福岡市	−1.9
山口	−2
長野	−2.1
石川	−2.6
川崎市	−2.7
長崎	−3.3
平均	−3.3
埼玉	−3.5
沖縄	−3.7
青森	−5.3
大阪	−5.6
名古屋市	−7.8
岩手	−46

表Ⅱ－６　平成20年度小学生子ども会加入率増減率

（秋元作成）



図Ⅱ－11　平成 20 年度小学生子ども会加入率の増減率（前年比）（秋元作成）

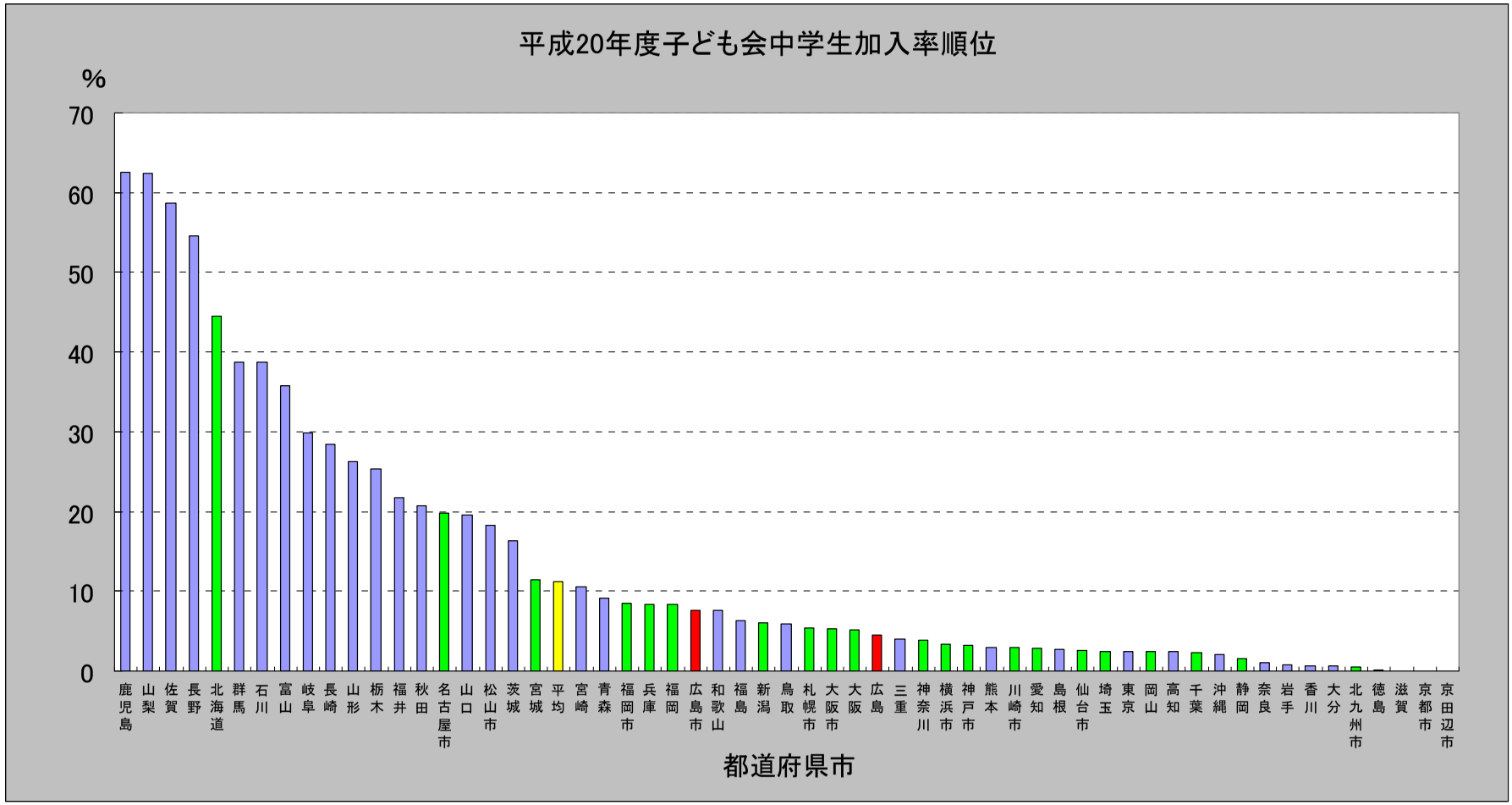
次に，全国で中学生の加入率が高い自治体の地域的特徴について検討する。

表Ⅱ－7は，2008（平成20）年度子ども会中学生加入率順位表を示している。2008（平成20）年度子ども会中学生加入率の順位を見ると，上位14位以内には，北海道以外の政令指定都市[5]がある県・市は入っていない。このことから，例外もあるが政令都市でない都道府県の方が子ども会への加入率が比較的良いといえるだろう。50％以上の加入率がある県は，鹿児島，山梨，佐賀，長野である。平均が，11.2％だということからも，中学生の加入率は全体的に低いことがいえる。

都道府県市	平成20年度
鹿児島	62.6
山梨	62.4
佐賀	58.7
長野	54.6
北海道	44.5
群馬	38.7
石川	38.7
富山	35.8
岐阜	29.9
長崎	28.4
山形	26.3
栃木	25.4
福井	21.8
秋田	20.7
名古屋市	19.8
山口	19.6
松山市	18.3
茨城	16.3
宮城	11.4
平均	11.2
宮崎	10.5
青森	9.1
福岡市	8.5
兵庫	8.3
福岡	8.3
広島市	7.6
和歌山	7.6
福島	6.3
新潟	6.1
鳥取	5.9
札幌市	5.4
大阪市	5.3
大阪	5.2
広島	4.5
三重	4
神奈川	3.8
横浜市	3.4
神戸市	3.2
熊本	3
川崎市	2.9
愛知	2.8
島根	2.7
仙台市	2.6
埼玉	2.5
東京	2.4
岡山	2.4
高知	2.4
千葉	2.3
沖縄	2.1
静岡	1.6
奈良	1
岩手	0.8
香川	0.7
大分	0.7
北九州市	0.5
徳島	0.1
滋賀	0
京都市	0
京田辺市	0

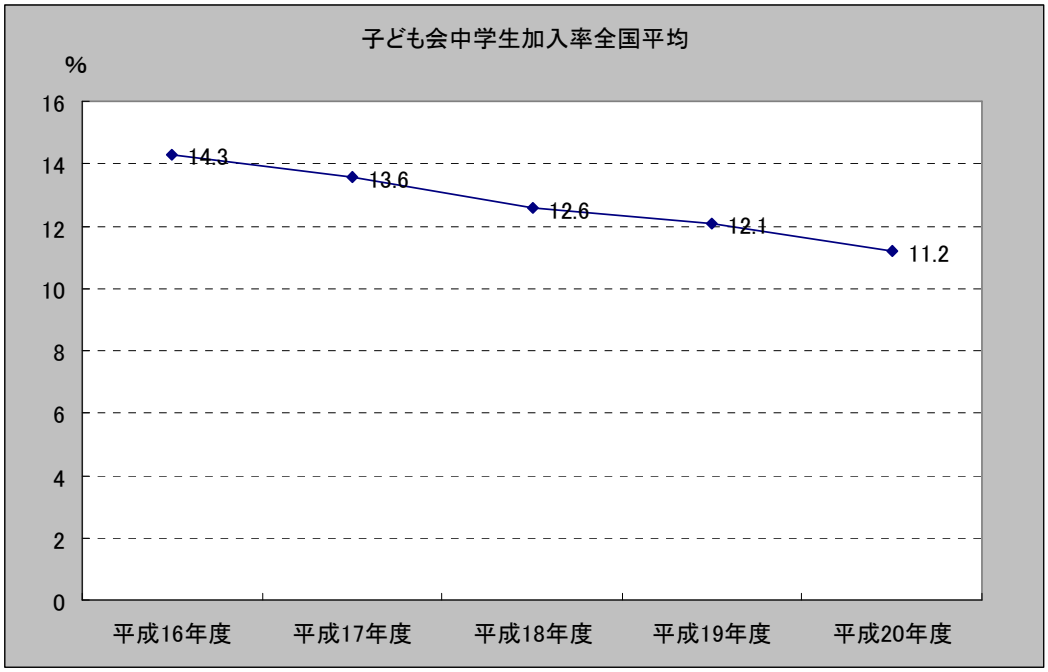
表Ⅱ－7　平成20年度子ども会中学生加入率順位表

（秋元作成）



図Ⅱ－12　平成 20 年度子ども会中学生加入率順位（赤：広島市・広島，黄：平均，緑：政令指定都市）（秋元作成）

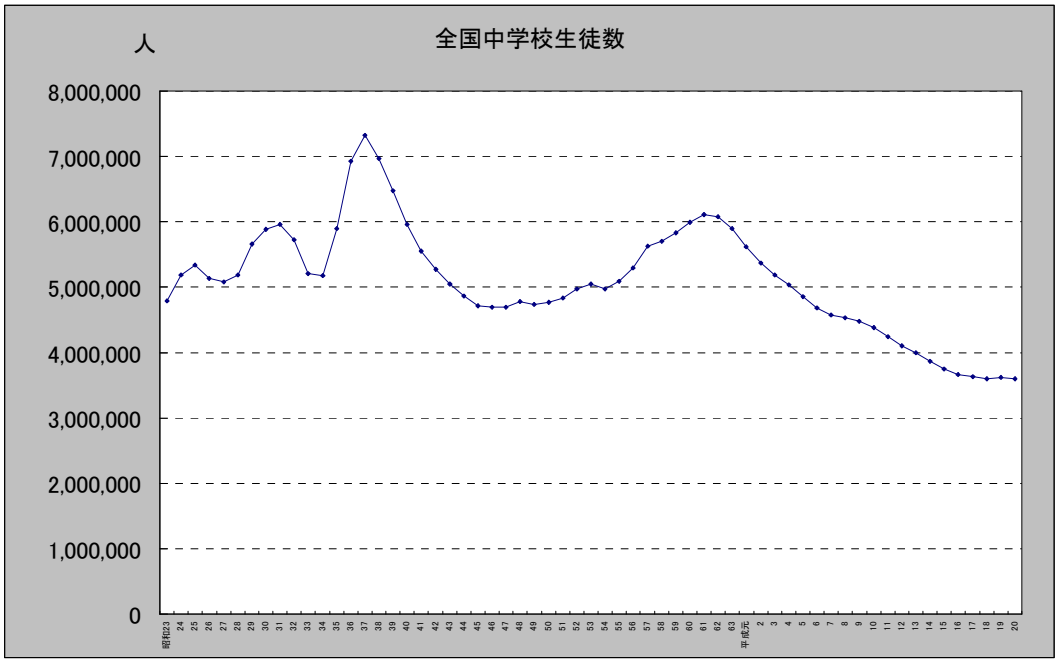
次に,全国の中学生の子ども会への参加の動向を探るため,中学生の加入率の推移を分析する。中学生子ども会加入率全国平均の 2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度の推移は図Ⅱ－13 の通りである。



図Ⅱ－13　子ども会中学生加入率全国平均（秋元作成）

全国平均では，子ども会中学生亜加入率は 2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度までほぼ変わらない。2004（平成 16）年度と 2008（平成 20）年度は約 3%しか減少していない。このことから，多くの自治体は子ども会が現状維持の状態にあることが予測される。そして，中学生は小学生に比べて加入率が極端に低いことがわかる。

全国の中学校生徒数の 1948（昭和 23）年から 2009（平成 21）年までの推移は図Ⅱ－14 の通りである。

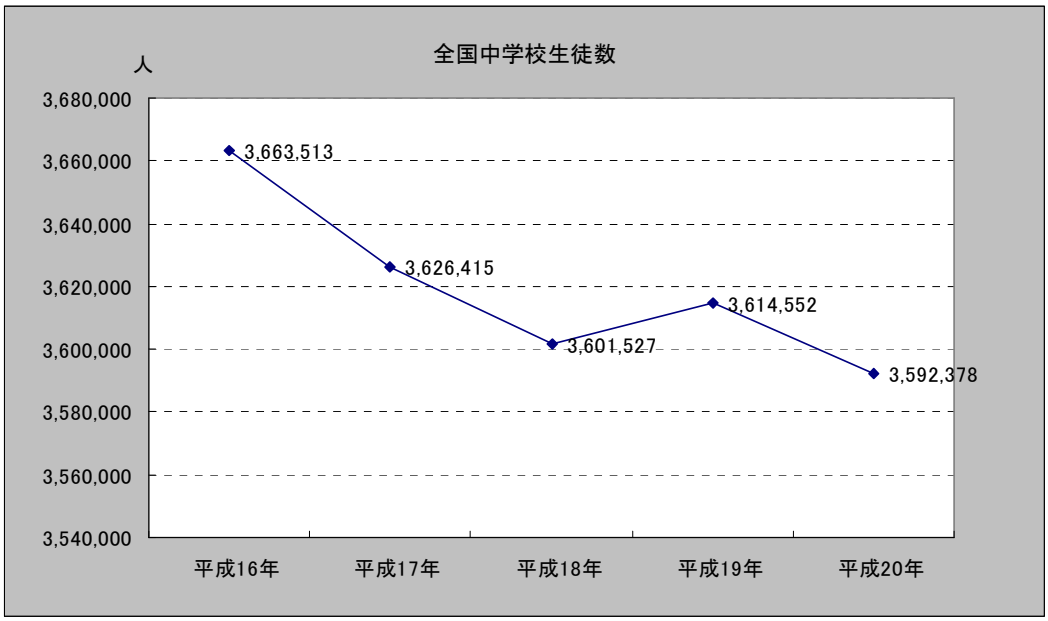


図Ⅱ－14　全国中学校生徒数（秋元作成）

図Ⅱ－14を見てわかるように，全国の中学校生徒数は第二のピーク1986（昭和61）年以降は6,105,749人からなだらかに減少傾向である。

子ども会中学生加入率全国平均と比べるために，全国の中学校生徒数の2004（平成16）年から2008（平成20）年の推移を図Ⅱ－15に示す。

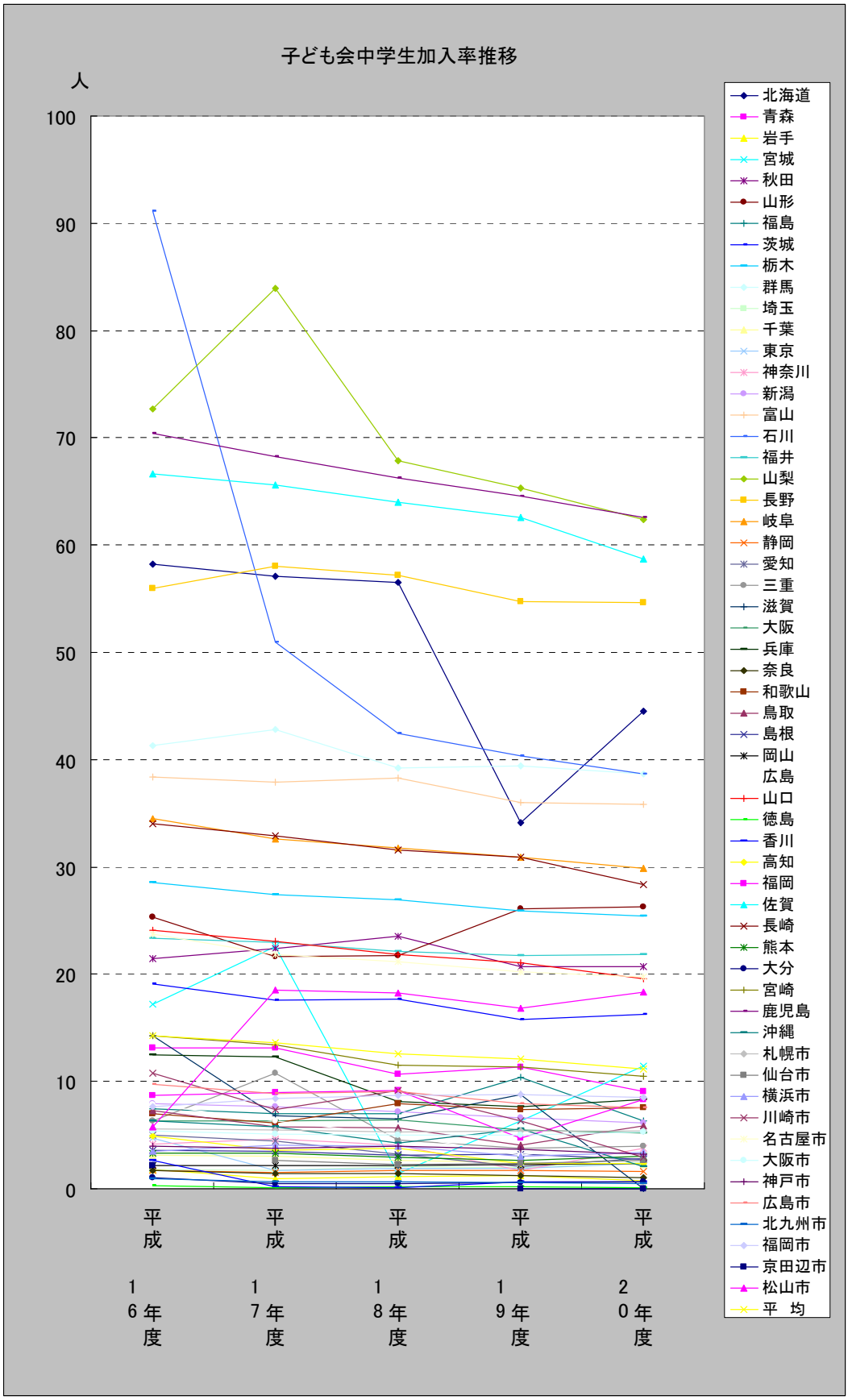
図Ⅱ－15の2004（平成16）年から2008（平成20）年までの全国中学校生徒数を見ると，2004（平成16）年から2006（平成18）年まで緩やかに減少，2007（平成19）年に増加し，2008（平成20）年にはまた減少している。2004（平成16）年から2008（平成20）年には，71,135人減少している。これは，小学生の減少人数とほぼ同じである。



図Ⅱ－15　全国中学校生徒数（秋元作成）

次に，各自治体の2004（平成16）年から2008（平成20）年までの小学生の子ども会加入率の推移を見ていく。図Ⅱ－16を見ると，多くの自治体が横ばいで，増減があまり見られない。それぞれの自治体は，異なったパターンの増減の様相を示しており，共通性は見られない。半数以上の自治体が0%から15%の間に位置している。これは小学生の加入率と比べると，中学生は子ども会への加入率がかなり低いことがわかる。これは，小学校を卒業するのと同時に子ども会をやめる子どもが多いことや，小学生高学年になると学習塾へ通うようになって子ども会をやめる子どももが多くなることと関係しているだろう。石川，山梨，北海道，宮城，松山市は増減の変化がある自治体である。

増減の時期に共通性がないことから，各自治体の個別事情が影響して増減しているのではないかと考えられる。



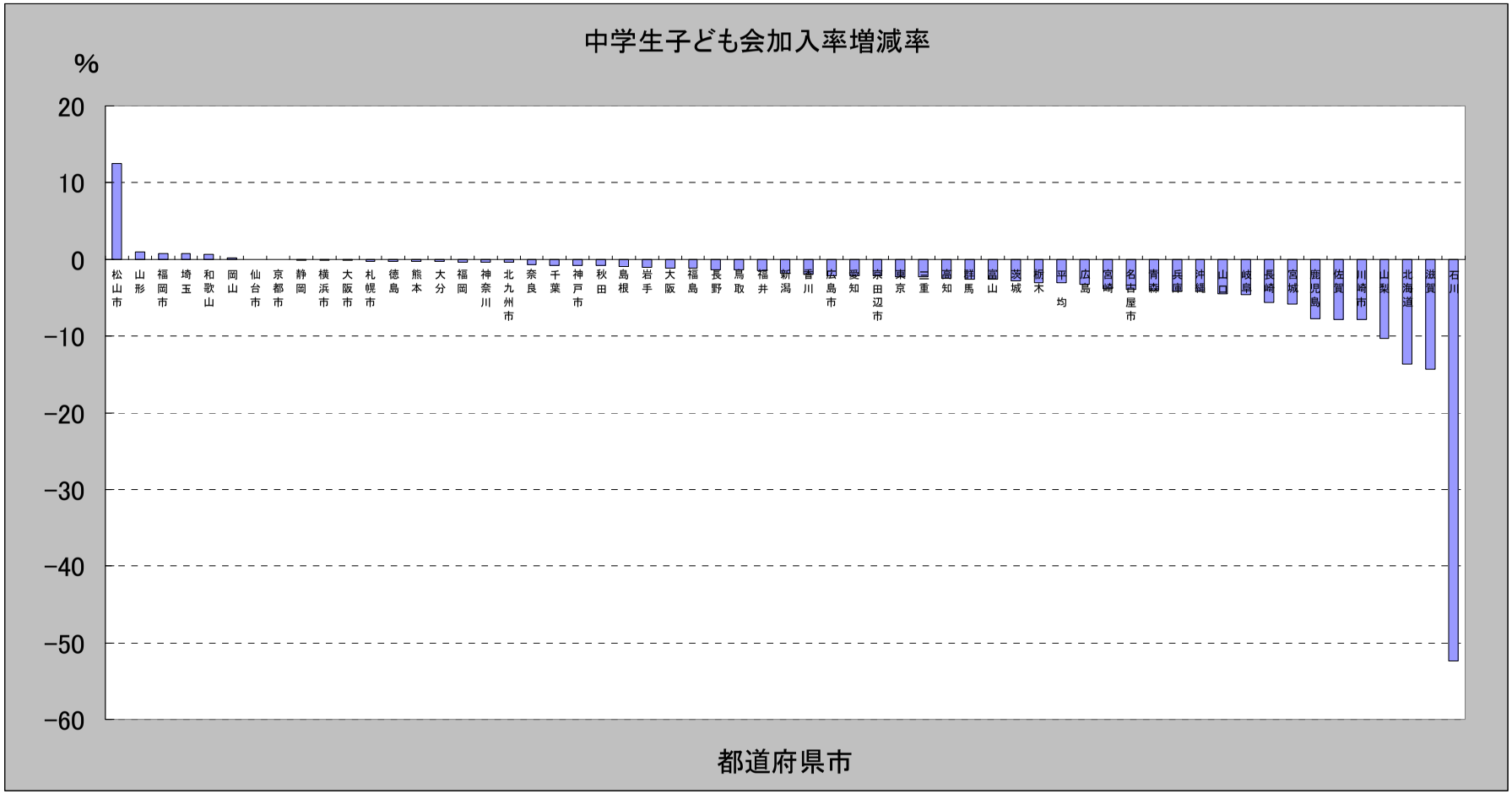
図Ⅱ－16　子ども会中学生加入率推移（秋元作成）

次に，2004（平成 16）年度から 2008（平成 20）年度の子ども会中学生加入率の増減率を見ていく。子ども会中学生加入率が 10％以上変化している自治体について分析していくこととする。10％以上増加している自治体は，松山市がみられる。10％以上減少しているのは，山梨，北海道，滋賀，石川である。山梨，北海道，石川は加入率が元々多い地域でそこから大きく減少している。滋賀は 2008（平成 20）年度加入率のデータが 0 と記入されていたため，子ども会中学生加入率が 10％減少している地域となるが，このデータが正しいのかは不明確なため，ここで分析対象にはいれないこととする。このことから，加入率が多い地域の中でも，現状維持の地域と，山梨，北海道，石川のように高かった加入率が減少していく地域に分類できた。

都道府県市	平成16年度～平成20年度の増減
松山市	12.5
仙台市	2.6
山形	1
福岡市	0.8
埼玉	0.7
和歌山	0.6
岡山	0.2
京都市	0
静岡	−0.1
横浜市	−0.1
大阪市	−0.1
札幌市	−0.2
徳島	−0.2
熊本	−0.3
大分	−0.3
福岡	−0.4
神奈川	−0.4
北九州市	−0.4
奈良	−0.7
千葉	−0.8
神戸市	−0.8
秋田	−0.8
島根	−0.9
岩手	−1
大阪	−1.1
福島	−1.2
長野	−1.4
鳥取	−1.4
福井	−1.5
新潟	−1.8
香川	−1.9
広島市	−2.1
愛知	−2.2
京田辺市	−2.2
東京	−2.3
三重	−2.3
高知	−2.5
群馬	−2.6
富山	−2.6
茨城	−2.8
栃木	−3.1
平均	−3.1
広島	−3.3
宮崎	−3.8
名古屋市	−3.9
青森	−4
兵庫	−4.2
沖縄	−4.2
山口	−4.5
岐阜	−4.6
長崎	−5.6
宮城	−5.8
鹿児島	−7.8
佐賀	−7.9
川崎市	−7.9
山梨	−10.3
北海道	−13.7
滋賀	−14.3
石川	−52.4

表Ⅱ－8　平成16年度～平成20年度中学生子ども会加入率増減率

（秋元作成）



図Ⅱ－17　全国中学生子ども会加入率増減率（秋元作成）

次に，子ども会中学生加入率の年度ごとの細かい変化をとらえる。2005（平成 17）年度から 2008（平成 20）年度までの毎年の変化について，前年比増減率の比較考察を行う。中学生の子ども会加入率 10％以上変化している自治体について分析していくこととする。

2005（平成 17）年度に，前年度より 10％以上増加している自治体は，山梨，松山市である。一方，前年度より 10％以上減少している自治体は，石川である。平均は，－0.7 である。平均は前年度より現状維持である。

2006（平成 18）年度に，前年度より 10％以上増加している自治体はない。前年度より 10％以上減少している自治体は，山梨と宮城である。山梨は前年度 11.2％増加していたが，2006（平成 18）年度は-16％減少している。平均は，-1％で，前年度からほぼ現状維持の状態にあるといえる。

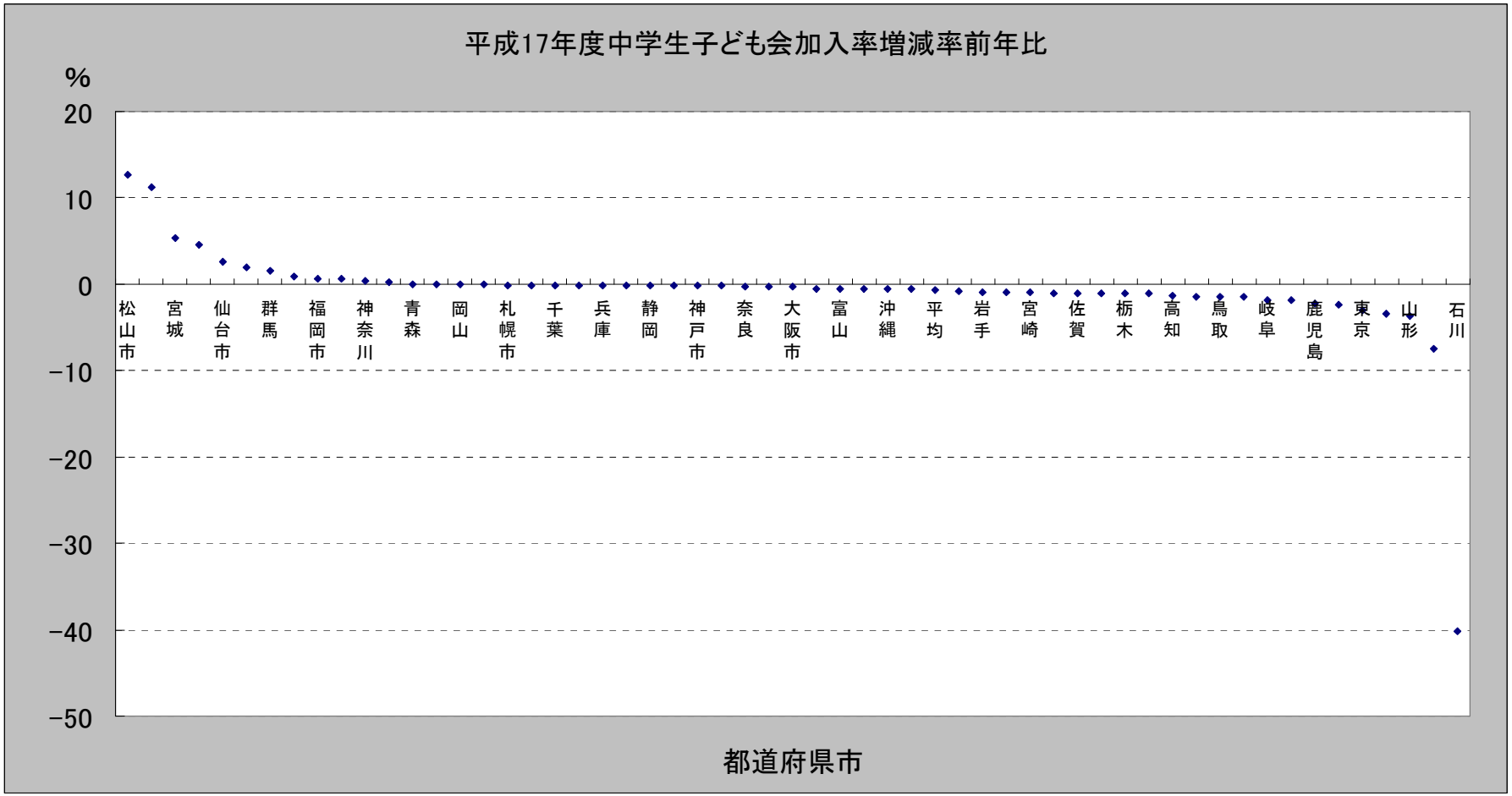
2007（平成 19）年度に，前年度より中学生の子ども会加入率が 10％以上増加している自治体は，北海道のみである。前年度より中学生の子ども会加入率が 10％以上減少している自治体はない。平均は，-0.9％で，前年度からほぼ現状維持の状態にあるといえる。

以上のことから，中学生の子ども会加入率はほぼ横ばいになっている。増加したところも次の年度にはまた減少しており，平均的にはあまり大きな変化がないということがわかった。

都道府県市	平成17年度
松山市	12.7
山梨	11.2
宮城	5.4
三重	4.5
仙台市	2.6
長野	2
群馬	1.5
秋田	0.9
福岡市	0.7
横浜市	0.6
神奈川	0.4
福岡	0.3
青森	0
大阪	0
岡山	0
熊本	0
札幌市	−0.1
埼玉	−0.1
千葉	−0.1
島根	−0.1
兵庫	−0.2
新潟	−0.2
静岡	−0.2
徳島	−0.2
神戸市	−0.2
北九州市	−0.2
奈良	−0.3
福井	−0.3
大阪市	−0.3
福島	−0.5
富山	−0.5
大分	−0.5
沖縄	−0.5
愛知	−0.6
平均	−0.7
広島市	−0.8
岩手	−0.9
和歌山	−0.9
宮崎	−0.9
山口	−1
佐賀	−1
北海道	−1.1
栃木	−1.1
長崎	−1.1
高知	−1.3
茨城	−1.5
鳥取	−1.5
広島	−1.5
岐阜	−1.9
名古屋市	−1.9
鹿児島	−2.2
香川	−2.4
東京	−3
川崎市	−3.4
山形	−3.7
滋賀	−7.5
石川	−40.2

表Ⅱ－9　平成17年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）

（秋元作成）

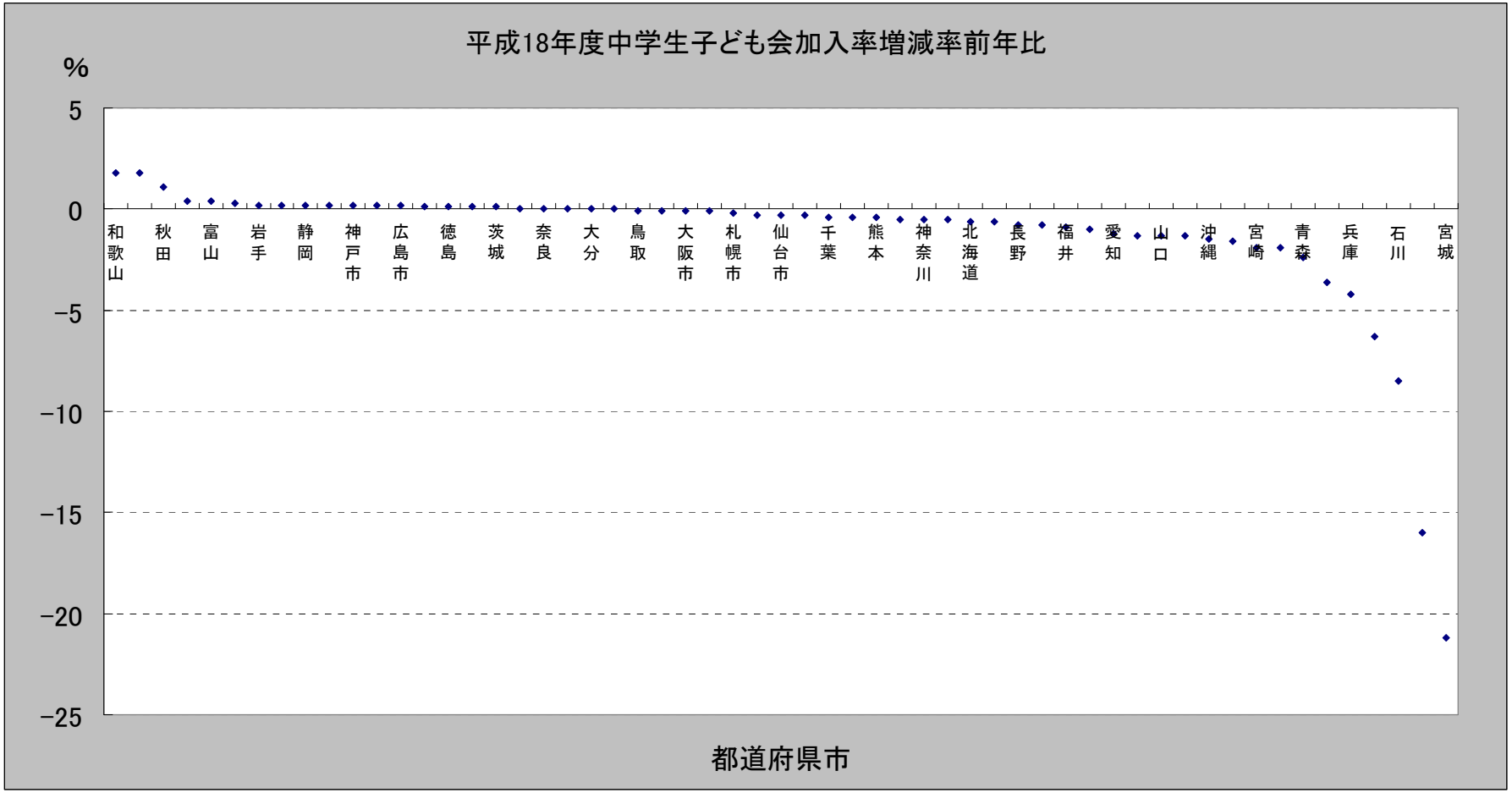


図Ⅱ－18　平成 17 年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）（秋元作成）

都道府県市	平成18年度
和歌山	1.8
川崎市	1.8
秋田	1.1
埼玉	0.4
富山	0.4
福岡市	0.3
岩手	0.2
東京	0.2
静岡	0.2
高知	0.2
神戸市	0.2
福岡	0.2
広島市	0.2
大阪	0.1
徳島	0.1
山形	0.1
茨城	0.1
福島	0
奈良	0
岡山	0
大分	0
北九州市	0
鳥取	−0.1
横浜市	−0.1
大阪市	−0.1
香川	−0.1
札幌市	−0.2
滋賀	−0.3
仙台市	−0.3
松山市	−0.3
千葉	−0.4
島根	−0.4
熊本	−0.4
栃木	−0.5
神奈川	−0.5
新潟	−0.5
北海道	−0.6
名古屋市	−0.6
長野	−0.8
岐阜	−0.8
福井	−0.9
平均	−1
愛知	−1.2
広島	−1.3
山口	−1.3
長崎	−1.3
沖縄	−1.5
佐賀	−1.6
宮崎	−1.9
鹿児島	−1.9
青森	−2.4
群馬	−3.6
兵庫	−4.2
三重	−6.3
石川	−8.5
山梨	−16
宮城	−21.2

表Ⅱ－10　平成18年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）

（秋元作成）

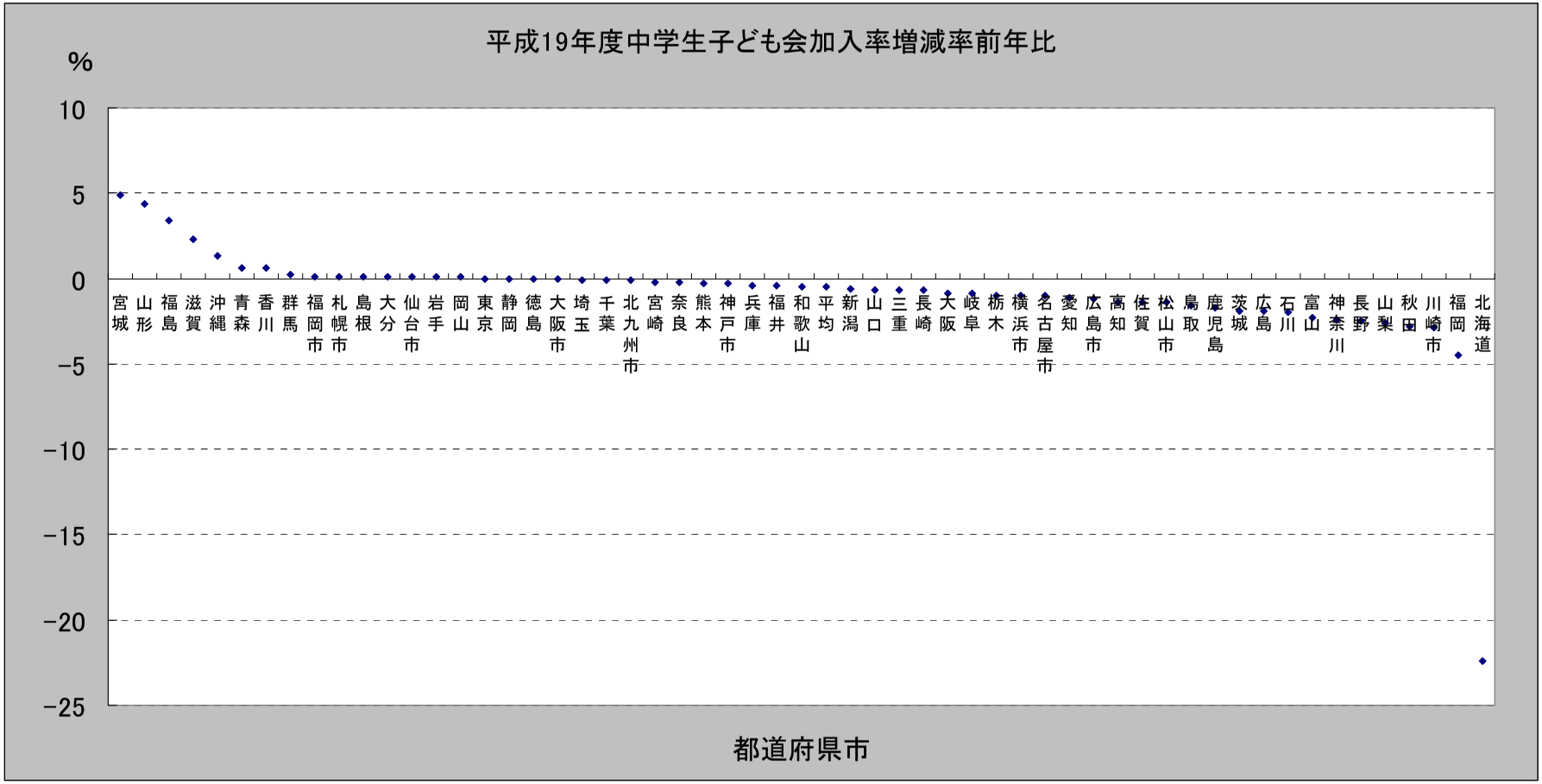


図Ⅱ－19　平成 18 年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）（秋元作成）

都道府県市	平成19年度
宮城	4.9
山形	4.4
福島	3.4
滋賀	2.3
沖縄	1.3
青森	0.6
香川	0.6
群馬	0.2
福岡市	0.1
札幌市	0.1
島根	0.1
大分	0.1
仙台市	0.1
岩手	0.1
岡山	0.1
東京	0
静岡	0
徳島	0
大阪市	0
埼玉	−0.1
千葉	−0.1
北九州市	−0.1
宮崎	−0.2
奈良	−0.2
熊本	−0.3
神戸市	−0.3
兵庫	−0.4
福井	−0.4
和歌山	−0.5
平均	−0.5
新潟	−0.6
山口	−0.7
三重	−0.7
長崎	−0.7
大阪	−0.9
岐阜	−0.9
栃木	−1
横浜市	−1
名古屋市	−1
愛知	−1.1
広島市	−1.2
高知	−1.4
佐賀	−1.4
松山市	−1.4
鳥取	−1.6
鹿児島	−1.7
茨城	−1.9
広島	−1.9
石川	−2
富山	−2.3
神奈川	−2.4
長野	−2.5
山梨	−2.6
秋田	−2.8
川崎市	−2.9
福岡	−4.5
北海道	−22.4

表Ⅱ－11　平成19年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）

（秋元作成）

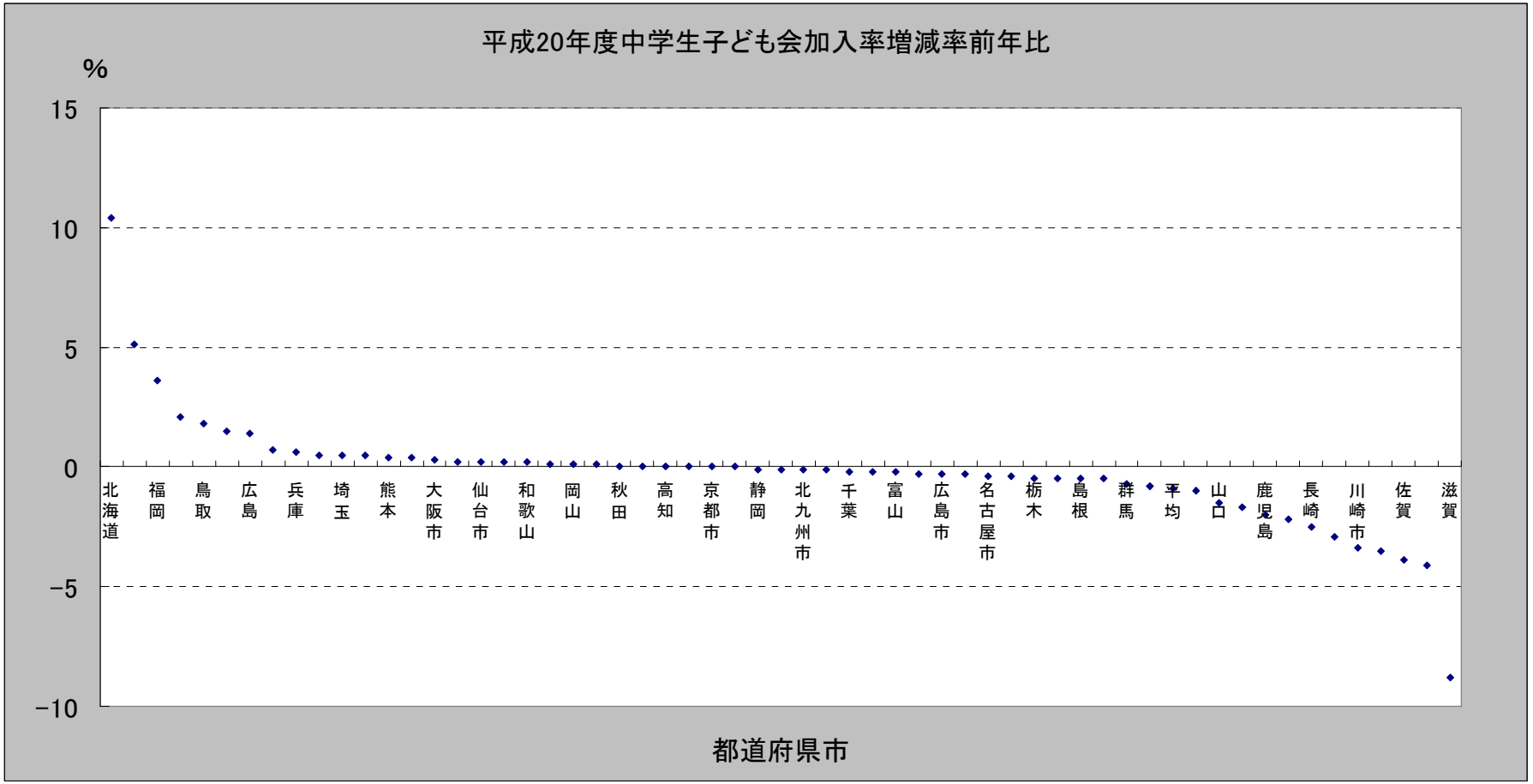


図Ⅱ－20　平成 19 年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）（秋元作成）

都道府県市	平成20年度
北海道	10.4
宮城	5.1
福岡	3.6
神奈川	2.1
鳥取	1.8
松山市	1.5
広島	1.4
愛知	0.7
兵庫	0.6
茨城	0.5
埼玉	0.5
東京	0.5
熊本	0.4
横浜市	0.4
大阪市	0.3
三重	0.2
仙台市	0.2
山形	0.2
和歌山	0.2
福井	0.1
岡山	0.1
大分	0.1
秋田	0
香川	0
高知	0
札幌市	0
京都市	0
京田辺市	0
静岡	−0.1
徳島	−0.1
北九州市	−0.1
長野	−0.1
千葉	−0.2
奈良	−0.2
富山	−0.2
大阪	−0.3
広島市	−0.3
福岡市	−0.3
名古屋市	−0.4
岩手	−0.4
栃木	−0.5
新潟	−0.5
島根	−0.5
神戸市	−0.5
群馬	−0.7
宮崎	−0.8
平均	−0.9
岐阜	−1
山口	−1.5
石川	−1.7
鹿児島	−2
青森	−2.2
長崎	−2.5
山梨	−2.9
川崎市	−3.4
沖縄	−3.5
佐賀	−3.9
福島	−4.1
滋賀	−8.8

表Ⅱ－12　平成20年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）

（秋元作成）



図Ⅱ－21　平成20年度中学生子ども会加入率増減率（前年比）（秋元作成）

以上，小学生と中学生の子ども会加入率をそれぞれ見てきた。その結果，小学生と中学生を比べると，子ども会活動の加入率は小学生が多く，中学生の加入率は少ない。

平成 20 年度の 40％以上加入率がある自治体は，小学生では，32 自治体であるのに対し，中学生では，の 4 自治体のみが 40％以上加入率がある。

10％以下の加入率の自治体は，小学生では北九州市と東京の 2 地域である。一方，10％以下の加入率の自治体は中学生では，35 自治体ある。（0％と記入してある地域，または記入がない地域は除く）つまり，半分以上が中学生の子ども会加入率が 10％以下となる。

このように小学生と中学生の加入率は極端に違うことがわかる。これは，小学生を卒業する時を機に子ども会をやめる子どもや小学生高学年で子ども会をやめる子どもが多いからだと思われる。

第３節　各自治体子ども会日常生活活動の分析

前節では，全国の小学生・中学生の子ども会加入率，加入率推移,全国の子ども会加入数の動向を分析した。本節では，各自治体子ども会の日常生活活動の内容や活動状況を分析する。子ども会の日常生活活動として，あいさつ活動，清掃活動，早起き体操，定例会，お年寄り訪問，読書活動，お手伝い活動，奉仕活動，生産活動，遊び場作り，家庭開放，地域調べ活動，保育体験活動，日常遊び場活動，火の用心，学習活動がある。それぞれの活動に関して,「ほとんどやっている」を４,「ある程度やっている」を３,「少しだがやっている」を２,「どちらともいえない」を１[6],「全くやっていない」を０，とすることにした。無回答の場合は記入なしで何もマークをつけていない。宮城，秋田，茨城，長野，滋賀，岡山，香川，福岡，札幌市，名古屋市，京都市，大阪市，松山市，京田辺市については，すべての項目においてデータがないため，この 14 自治体は分析に取り入れないこととする。

（図Ⅱ－22　都道府県市子ども会日常生活活動「あいさつ活動」調査結果から，あいさつ活動について分析する。回答した自治体は 44 自治体である。そのうち,「ほとんどやっている」が８自治体,「ある程度やっている」が 21 自治体,「少しだがやっている」が 11 自治体,「どちらともいえない」が 3 自治体,「全くやっていない」が１自治体あった。このことから，半分以上の自治体があいさつ活動を行っていることがわかる。川崎市以外の市は全て「少しだがやっている」を選択していることに特徴があり，市では活動が活発でないこと

がわかる。

次に，（図Ⅱ－23　都道府県市子ども会日常生活活動「清掃活動」調査によると，清掃活動に回答した自治体は 43 都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が 13 自治体，「ある程度やっている」が 25 自治体，「少しだがやっている」が 4 自治体，「どちらともいえない」が 1 自治体，「全くやっていない」が 0 自治体であった。清掃活動は，活動の頻繁さは違うものの，ほとんどの自治体で行っていることがわかる。

次に，図Ⅱ－24　都道府県市子ども会日常生活活動「早起き体操」調査から，早起き体操について分析する。回答した自治体は 43 都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が 13 自治体，「ある程度やっている」が 15 自治体，「少しだがやっている」が 9 自治体，「どちらともいえない」が 5 自治体，「全くやっていない」が 1 自治体あった。早起き体操は，ほとんどの自治体で行っていることがわかった。全くやっていないには唯一広島市が入っているが，広島市でも早起き体操を全くやってない自治体とやっている自治体と違いがあるので，このアンケートに答えた人の主観が少なからず入っていることがここからわかる。

次に，図Ⅱ－25　都道府県市子ども会日常生活活動「●？」調査によると，定例会回答した自治体は 44 都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が 20 自治体，「ある程度やっている」が 11 自治体，「少しだがやっている」が 11 自治体，「どちらともいえない」が 2 自治体，「全くやってい

ない」が0自治体あった。頻度は異なるが，ほとんどの自治体が定例会を開いていることがわかる。

次に，図Ⅱ－26　都道府県市子ども会日常生活活動「お年寄り訪問」調査によると，お年寄り訪問について回答した自治体は44都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が1自治体，「ある程度やっている」が3自治体，「少しだがやっている」が21自治体，「どちらともいえない」が11自治体，「全くやっていない」が8自治体あった。このことから，活発的にお年寄り訪問を行っている自治体は少ないことがわかる。しかし，全くやっていないというわけではなく，少しだが活動している自治体が多い。

次に，図Ⅱ－27　都道府県市子ども会日常生活活動「読書活動」調査によると，読書活動を回答した自治体は44都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が0自治体，「ある程度やっている」が2自治体，「少しだがやっている」が15自治体，「どちらともいえない」が14自治体，「全くやっていない」が13自治体あった。このことから，読書活動のような文化活動は，全体的に子ども会ではあまり活動されていないことがわかる。読書活動に関しては，学校が担っているのではないだろうか。

次に，図Ⅱ－28　都道府県市子ども会日常生活活動「お手伝い活動」調査によると，お手伝い活動を回答した自治体は43都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が1自治体，「ある程度やっている」が8自治体，「少しだがやっている」が19自治体，「どちらともいえない」が13自治

体,「全くやっていない」が 2 自治体あった。このことから,積極的に行っている自治体は少ないが,ある程度やっている,少しだがやっている自治体が約三分の二ある。お手伝い活動をどう定義するのが曖昧なためか,どちらともいえないという回答が約三分の一となっている。

次に,(図Ⅱ－29　都道府県市子ども会日常生活活動「奉仕活動」調査によると,奉仕活動を回答した自治体は 44 都道府県市である。そのうち,「ほとんどやっている」が 10 自治体,「ある程度やっている」が 21 自治体,「少しだがやっている」が 11 自治体,「どちらともいえない」が 1 自治体,「全くやっていない」が 1 自治体あった。このことから,活動の活発さは異なるが,ほとんどの自治体で奉仕活動がされていることがわかる。

次に,図Ⅱ－30　都道府県市子ども会日常生活活動「生産活動」調査によると,生産活動を回答した自治体は 43 都道府県市である。そのうち,「ほとんどやっている」が 0 自治体,「ある程度やっている」が 4 自治体,「少しだがやっている」が 22 自治体,「どちらともいえない」が 10 自治体,「全くやっていない」が 7 自治体あった。このことから,生産活動を積極的に行っている自治体は少なく,少しだがやっている自治体が半分を占めている。

図Ⅱ－31　都道府県市子ども会日常生活活動「遊び場作り」調査回答参照)によると,遊び場作りを回答した自治体は 43 都道府県市である。そのうち,「ほとんどやっている」が 0 自治体,「ある程度やっている」が 3 自治体,「少しだが

やっている」が 16 自治体,「どちらともいえない」が 12 自治体,「全くやっていない」が 12 自治体あった。このことから，遊び場作りを積極的に行っている自治体は少ないことがわかる。

（図Ⅱ－32　都道府県市子ども会日常生活活動「家庭開放」調査によると，家庭開放を回答した自治体は 42 都道府県市である。そのうち,「ほとんどやっている」が 0 自治体,「ある程度やっている」が 1 自治体,「少しだがやっている」が 8 自治体,「どちらともいえない」が 13 自治体,「全くやっていない」が 20 自治体あった。このことから，全く家庭開放をしていない自治体が約半数を占めており，四分の三の自治体はほぼ家庭開放を行っていないことがわかる。ご近所同士でお互いの家を行き来し合う時代もあったが，近年はそういった行動は少なくなってきており，近所同士が干渉し合わない自治体もあるということが関係しているだろう。

（図Ⅱ－33　都道府県市子ども会日常生活活動「地域調べ活動」調査によると，地域調べ活動を回答した自治体は 43 都道府県市である。そのうち,「ほとんどやっている」が 0 自治体,「ある程度やっている」が 5 自治体,「少しだがやっている」が 19 自治体,「どちらともいえない」が 7 自治体,「全くやっていない」が 12 自治体あった。このことから，地域調べ活動を少しまたはある程度やっている自治体とどちらともいえないまたは全くやっていない自治体と，半々にわかれているということがわかる。

（図Ⅱ－34　都道府県市子ども会日常生活活動「保健体育

活動」調査によると，保育体験活動を回答した自治体は 42 都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が 0 自治体，「ある程度やっている」が 1 自治体，「少しだがやっている」が 16 自治体，「どちらともいえない」が 7 自治体，「全くやっていない」が 18 自治体あった。このことから，保育体験活動を積極的に行っている自治体はほぼないことがわかる。少しだがやっている自治体と全くやっていない地域にわかれることもわかる。

図Ⅱ－35　都道府県市子ども会日常生活活動「日常遊び場活動」調査によると，日常遊び場活動を回答した自治体は 42 都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が 6 自治体，「ある程度やっている」が 8 自治体，「少しだがやっている」が 16 自治体，「どちらともいえない」が 10 自治体，「全くやっていない」が 2 自治体あった。このことから，活動の頻繁さは分散していることがわかる。少しだがやっている自治体が約三分の一を占めている。

図Ⅱ－36　都道府県市子ども会日常生活活動「火の用心」調査によると，火の用心を回答した自治体は 42 都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が 0 自治体，「ある程度やっている」が 5 自治体，「少しだがやっている」が 26 自治体，「どちらともいえない」が 4 自治体，「全くやっていない」が 7 自治体あった。このことから，ほとんどやっている自治体は全くないが，活動を少しだがやっている自治体が半数弱占めていることがわかる。これは，活動を行っている自治体は，町内会や自治会が主催で活動しているところに

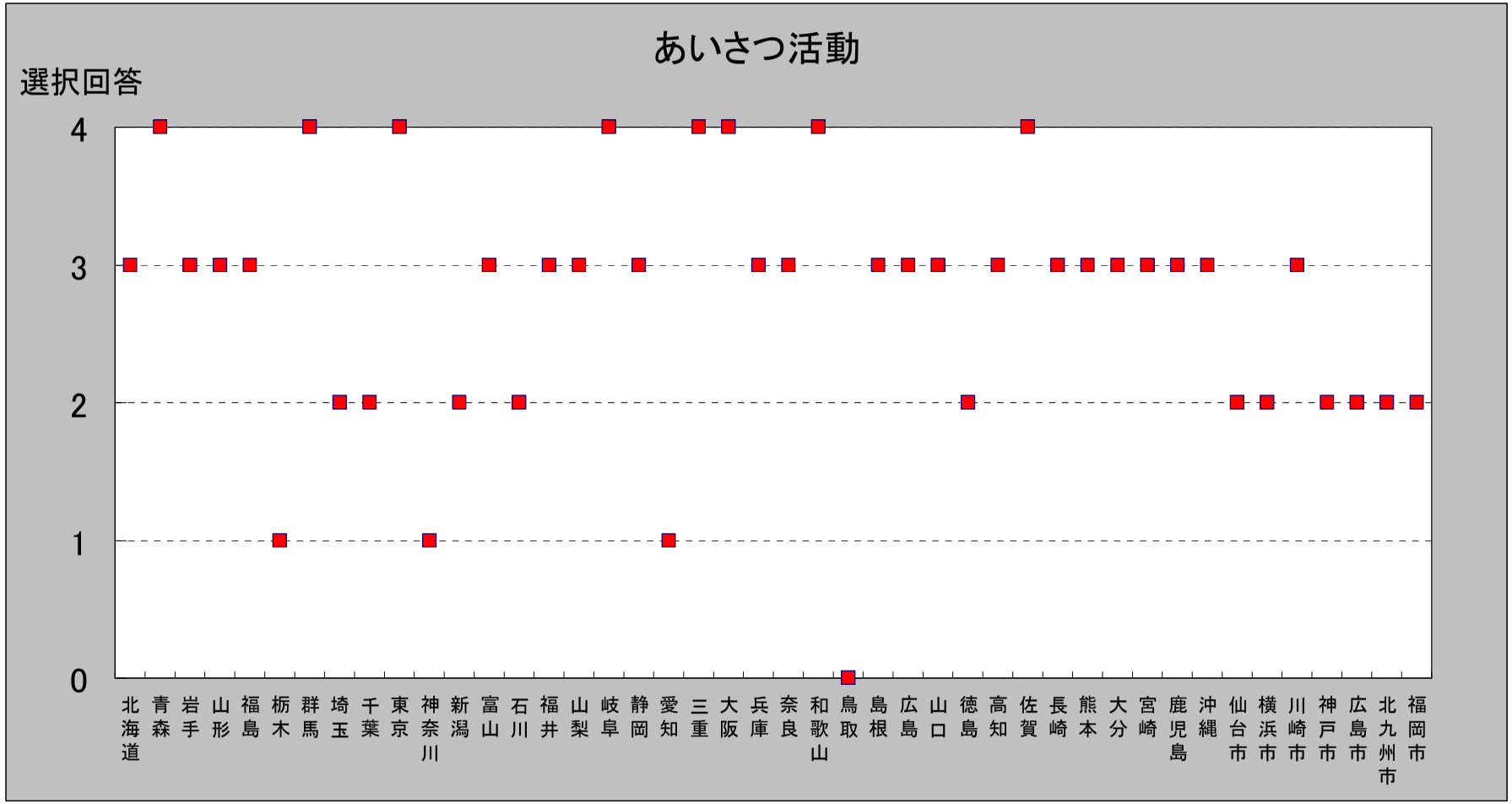
参加しているという形をとっている自治体が多いのではないかと考えられる。

最後に，図Ⅱ－37　都道府県市子ども会日常生活活動「学習活動」調査によると，学習活動を回答した自治体は 42 都道府県市である。そのうち，「ほとんどやっている」が 1 自治体，「ある程度やっている」が 2 自治体，「少しだがやっている」が 14 自治体，「どちらともいえない」が 7 自治体，「全くやっていない」が 18 自治体あった。このことから，積極的に活動している自治体は少ないことがわかる。少しだがやっている自治体は三分の一，全くやっていない自治体は七分の三と，この二つに大きくわかれている。全くやっていない地域の学習活動は，学校や塾に任せているというのが実情であろう。

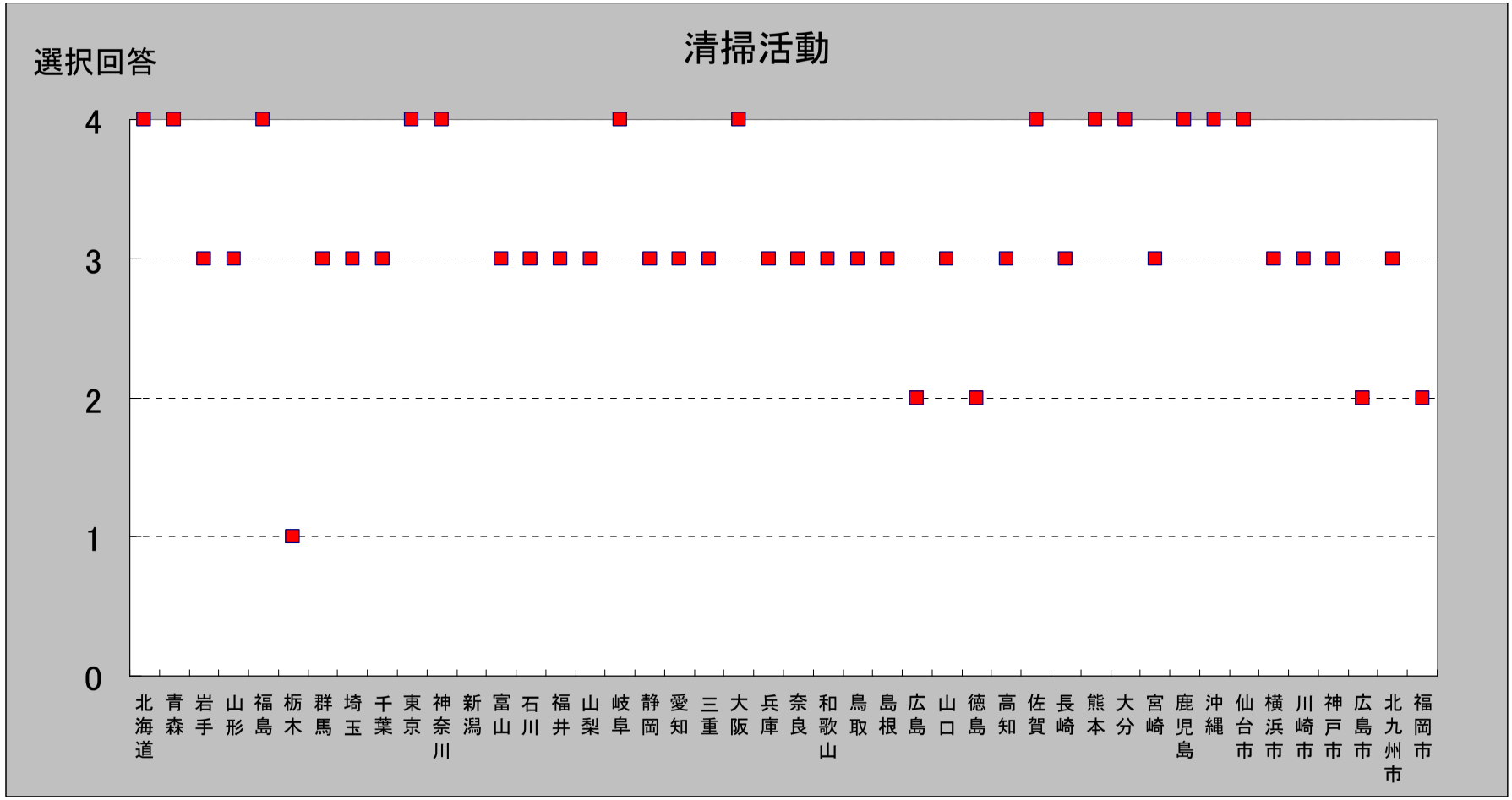
各都道府県市子ども会日常生活活動の分析をまとめる。分析すると，①比較的多くの自治体で積極的に行っている活動，②積極的にやっている自治体は少ないが少しだがやっている自治体が多い活動，③少しだがやっている自治体と全くやってない自治体と二分化している活動，④積極性は自治体によるつまり均等に分散している活動，⑤全国であまり行われていない活動の 5 分類することができることがわかった。

①比較的多くの自治体で積極的に行われている活動は，あいさつ活動，清掃活動，早起き体操，定例会，奉仕活動である。②積極的にやっている自治体は少ないが，少しだがやっている自治体が多い活動は，お手伝い活動，生産活動，火の用心である。③少しだがやっている自治体と全くやってない

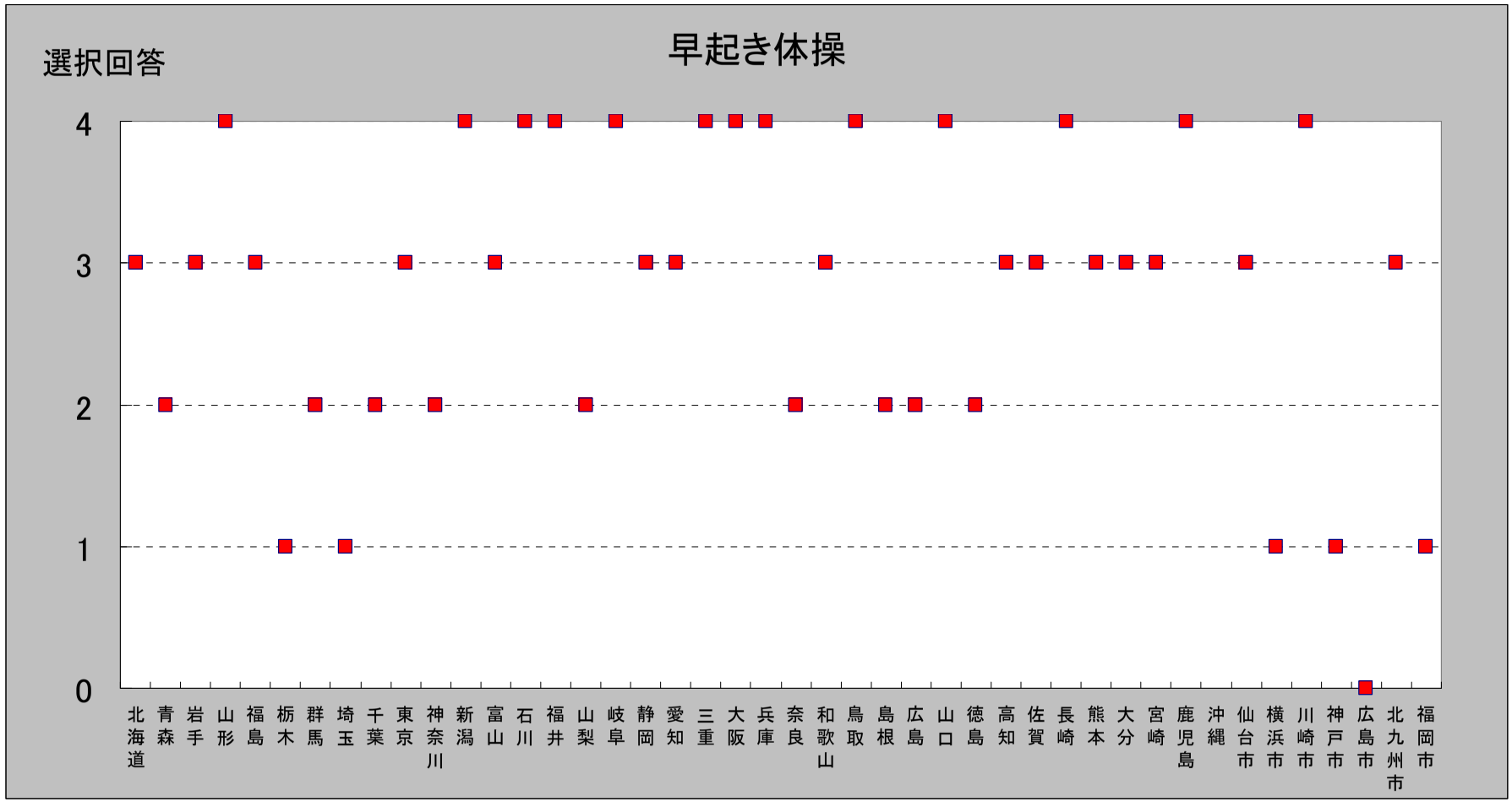
自治体と二分化している活動は,遊び場作り,地域調べ活動,保育体験活動,学習活動である。④積極性は自治体によるつまり均等に分散している活動は,日常遊び場活動である。⑤全国であまり行われていない活動は,お年寄り訪問,読書活動,家庭開放である。



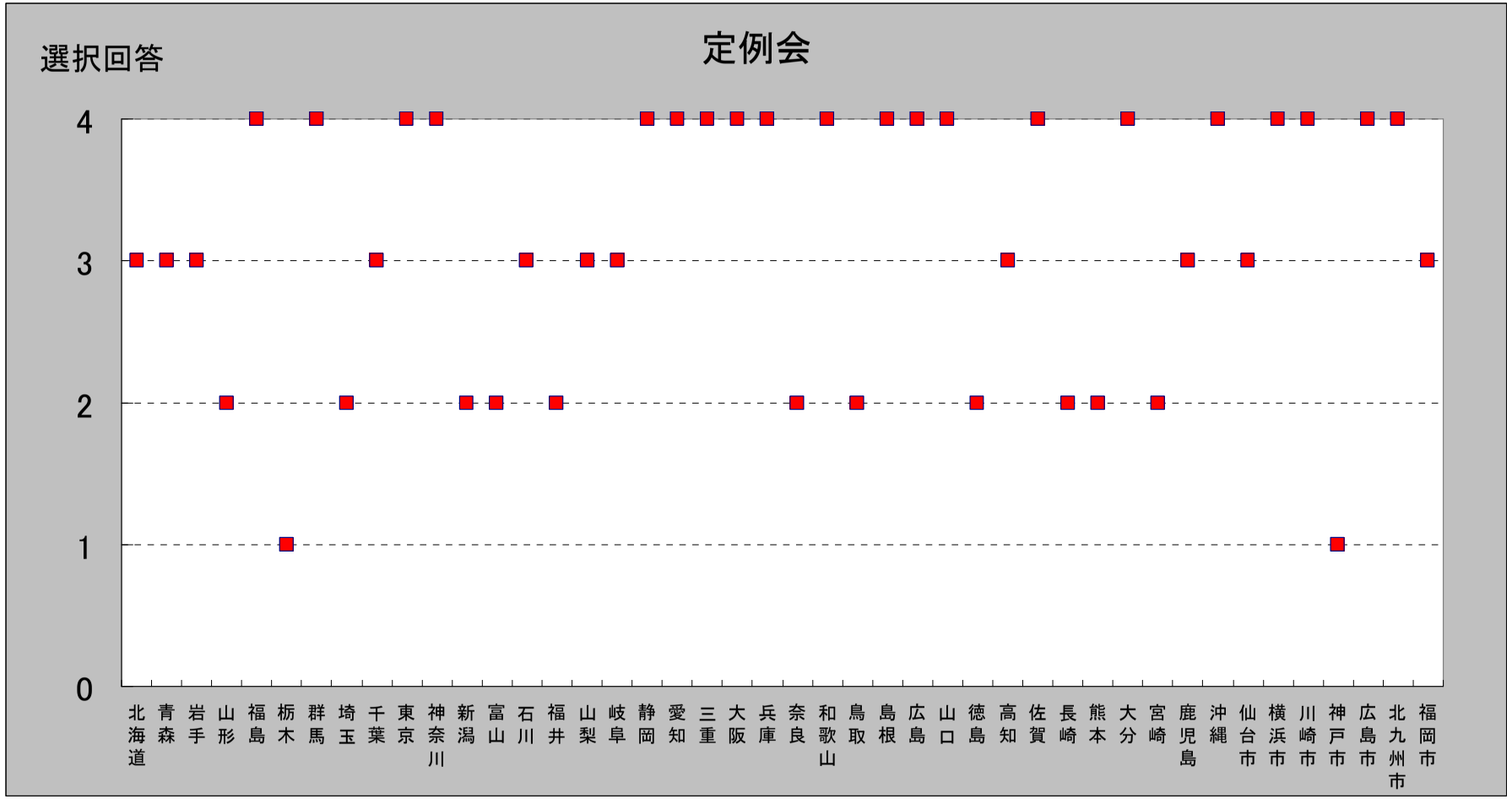
図Ⅱ－22　都道府県市子ども会日常生活活動「あいさつ活動」調査回答（秋元作成）



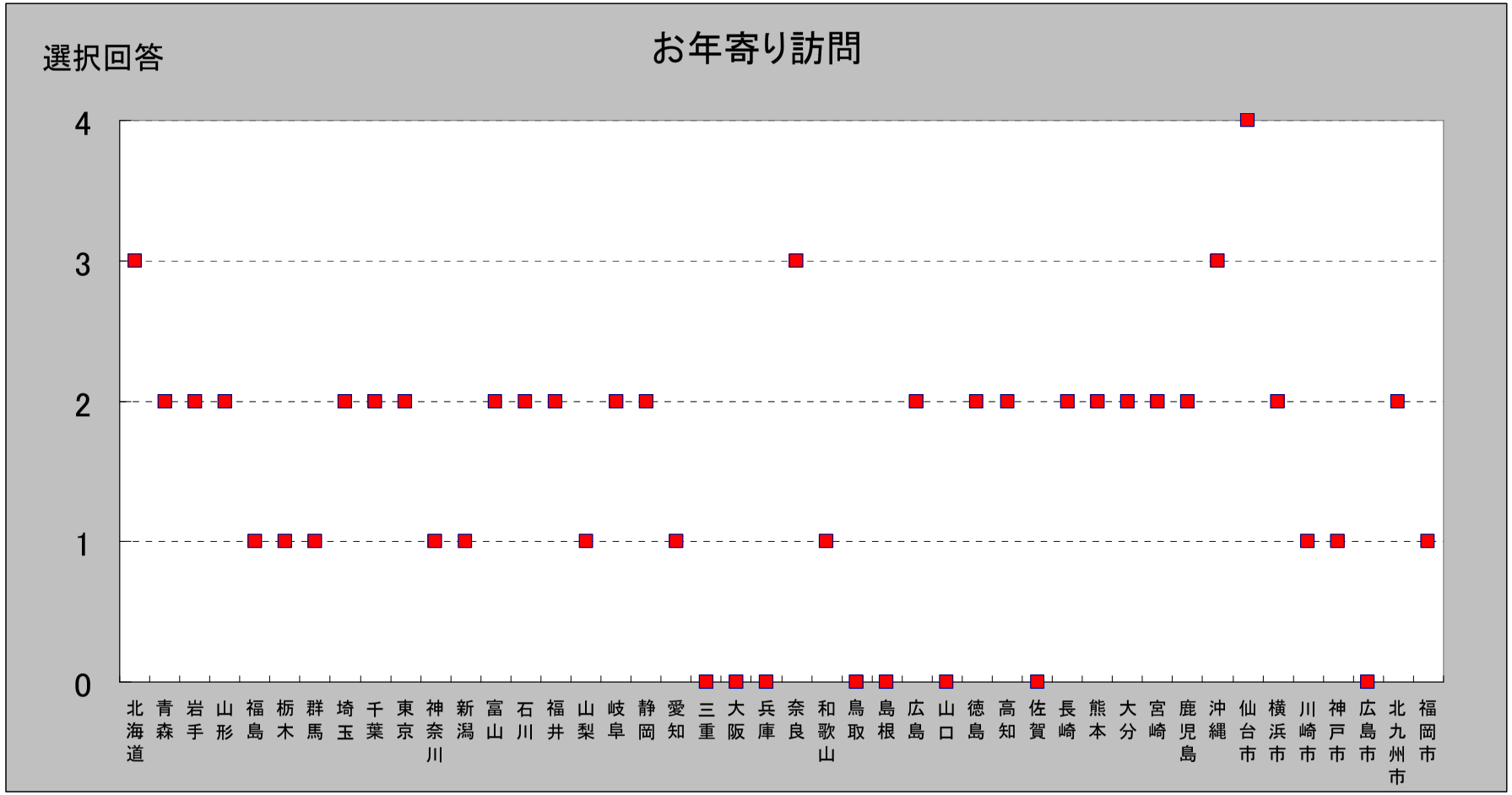
図Ⅱ－23　都道府県市子ども会日常生活活動「清掃活動」調査回答（秋元作成）



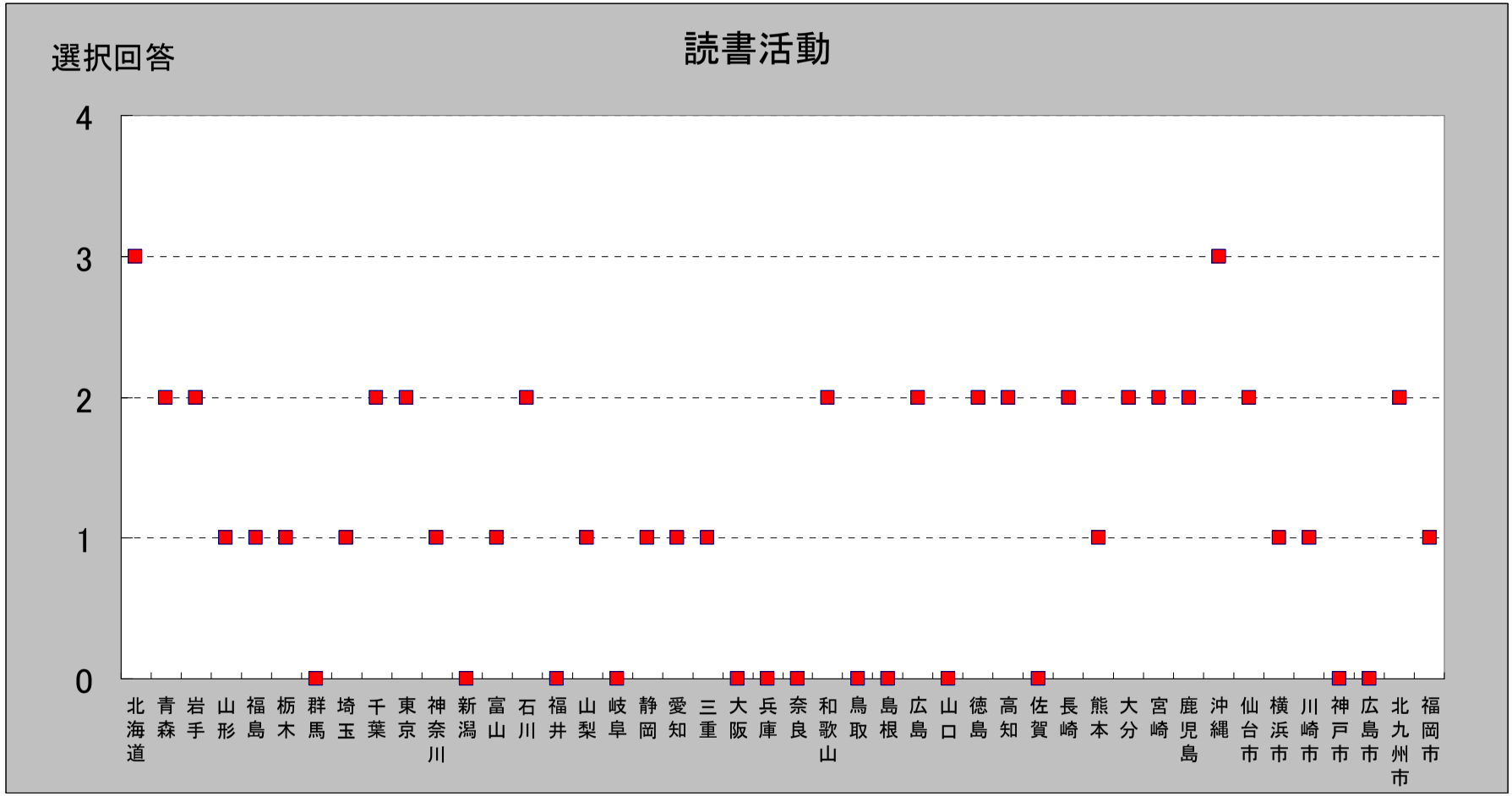
図Ⅱ－24　都道府県市子ども会日常生活活動「早起き体操」調査回答（秋元作成）



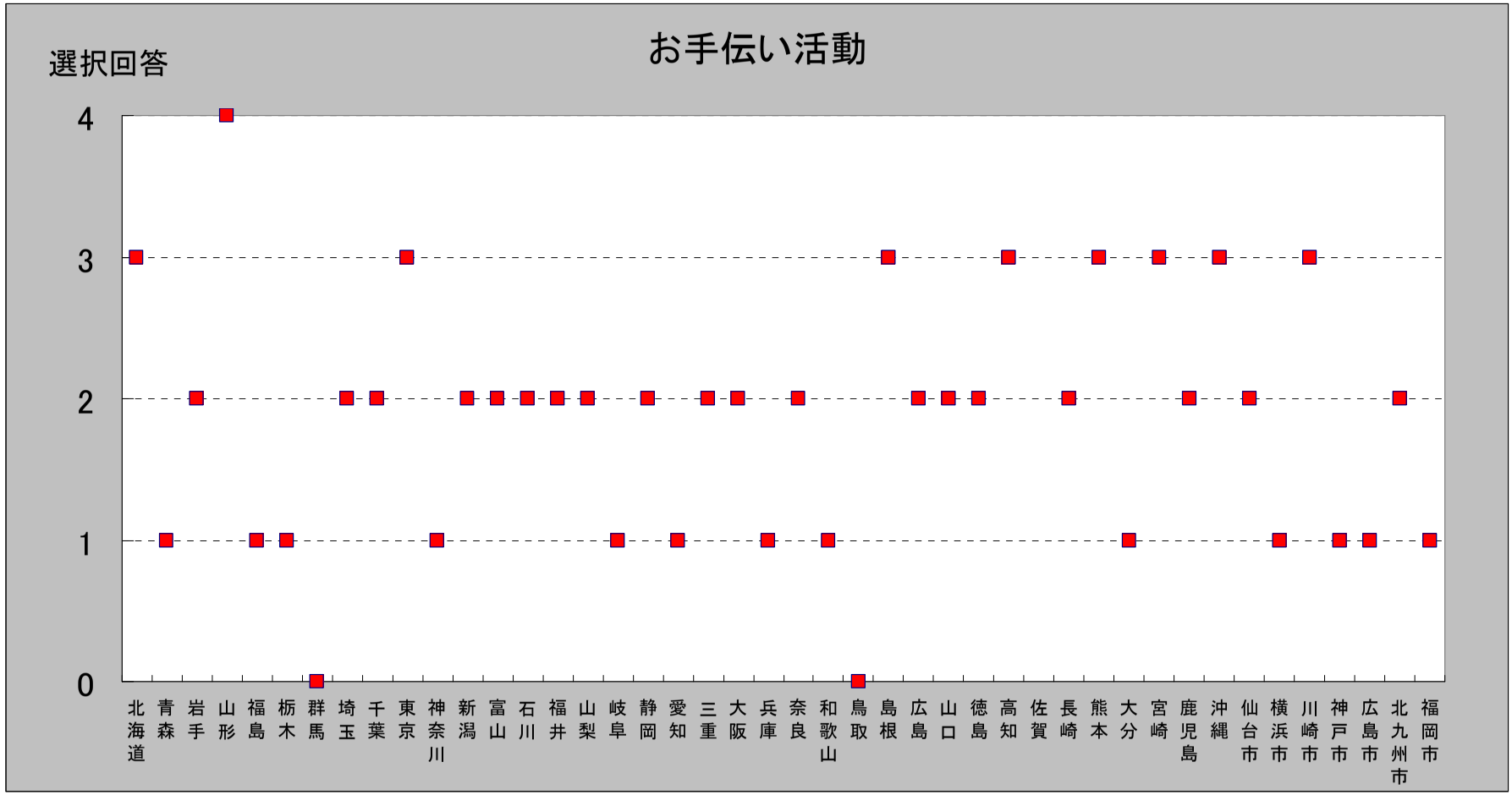
図Ⅱ－25　都道府県市子ども会日常生活活動「定例会」調査回答（秋元作成）



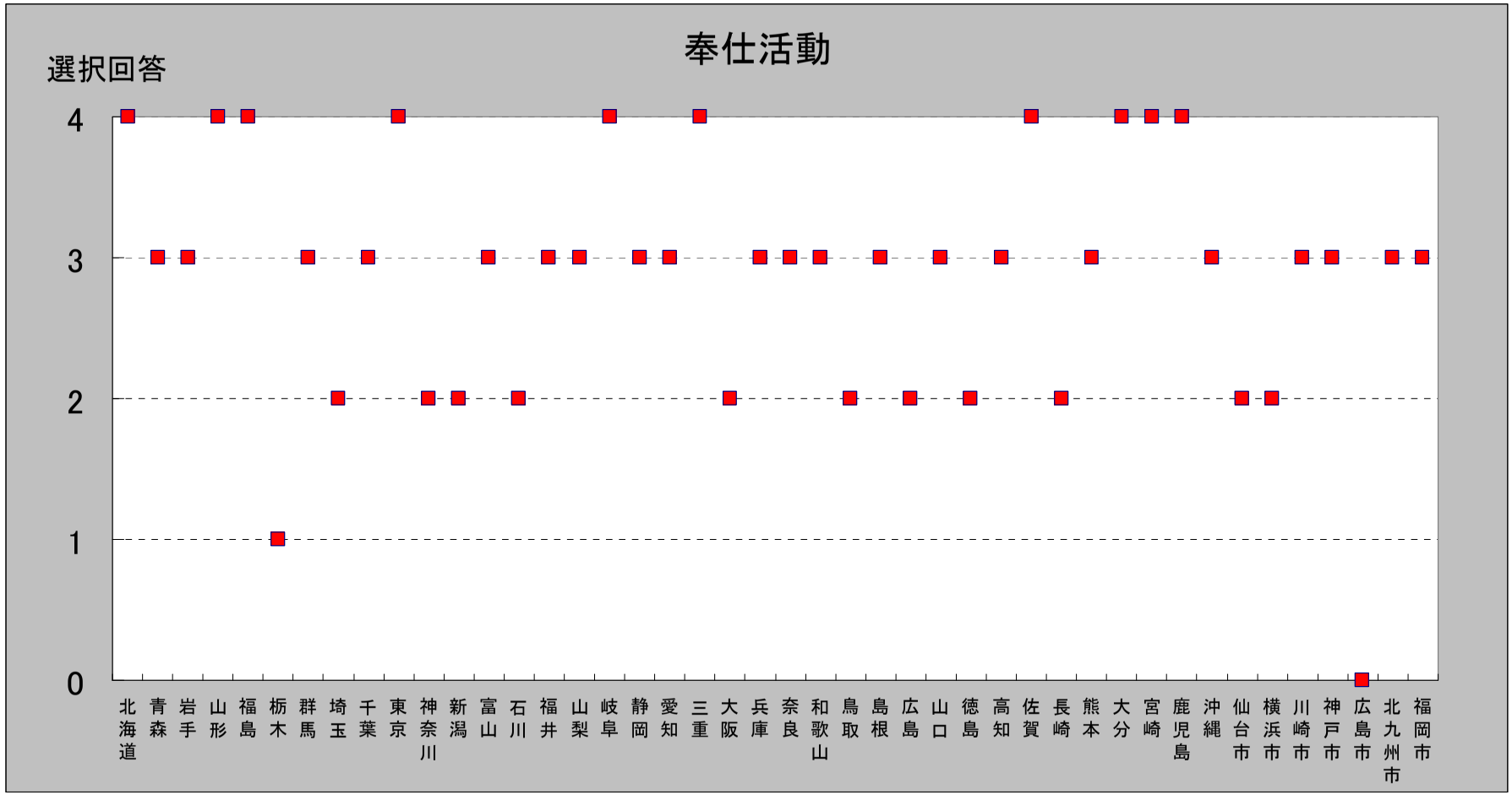
図Ⅱ－26　都道府県市子ども会日常生活活動「お年寄り訪問」調査回答（秋元作成）



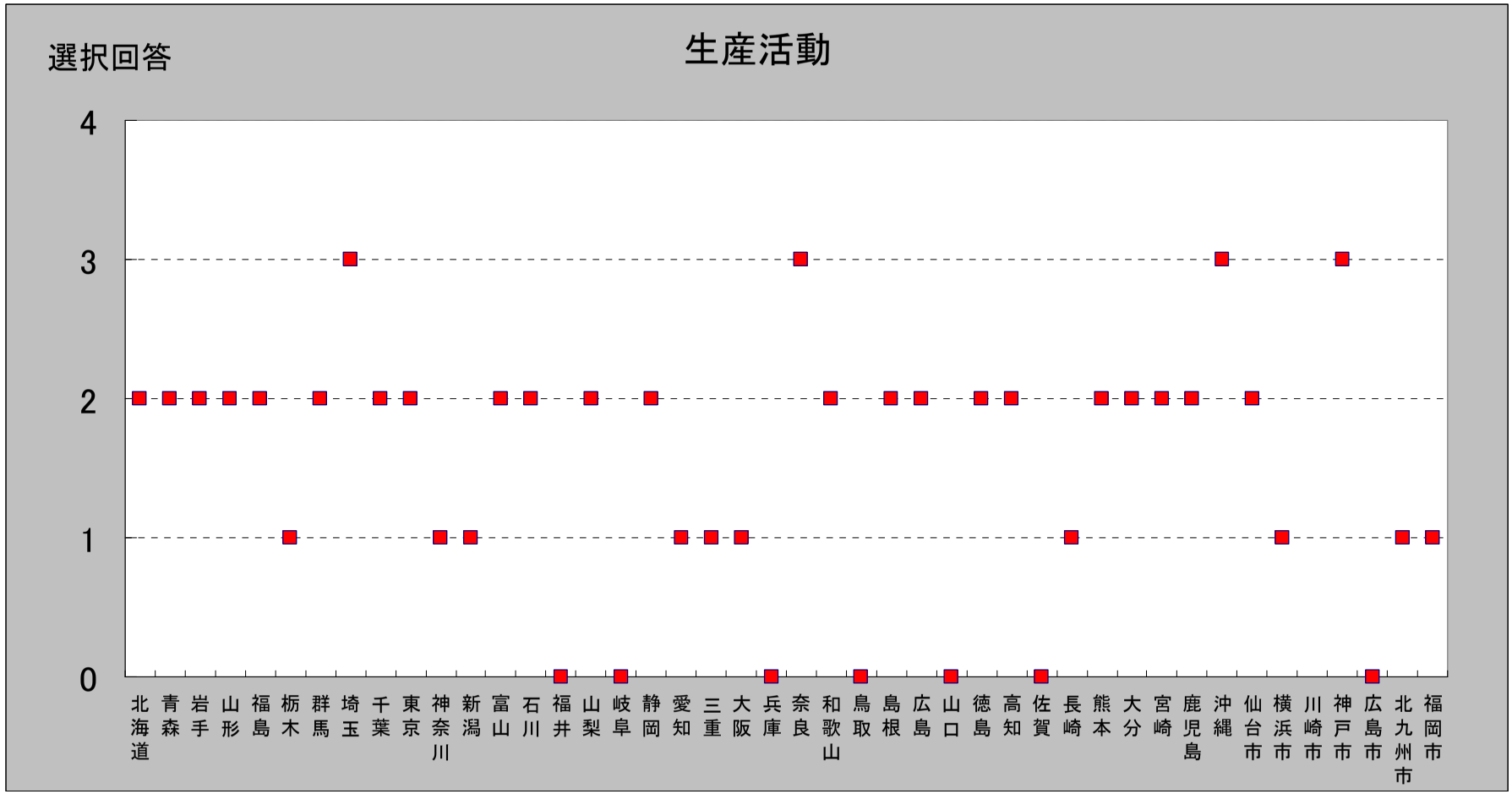
図Ⅱ－27　都道府県市子ども会日常生活活動「読書活動」調査回答（秋元作成）



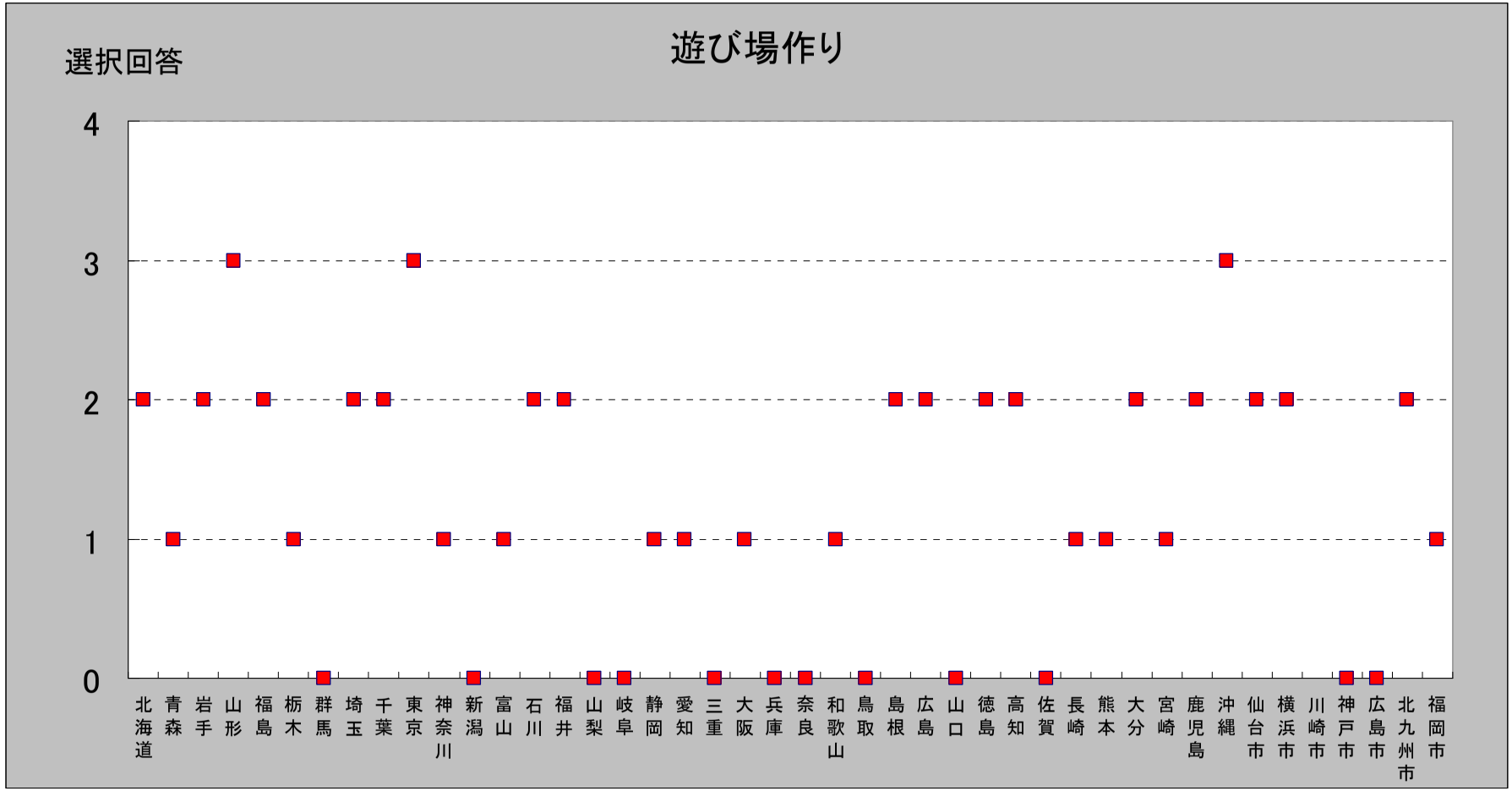
図Ⅱ－28　都道府県市子ども会日常生活活動「お手伝い活動」調査回答（秋元作成）



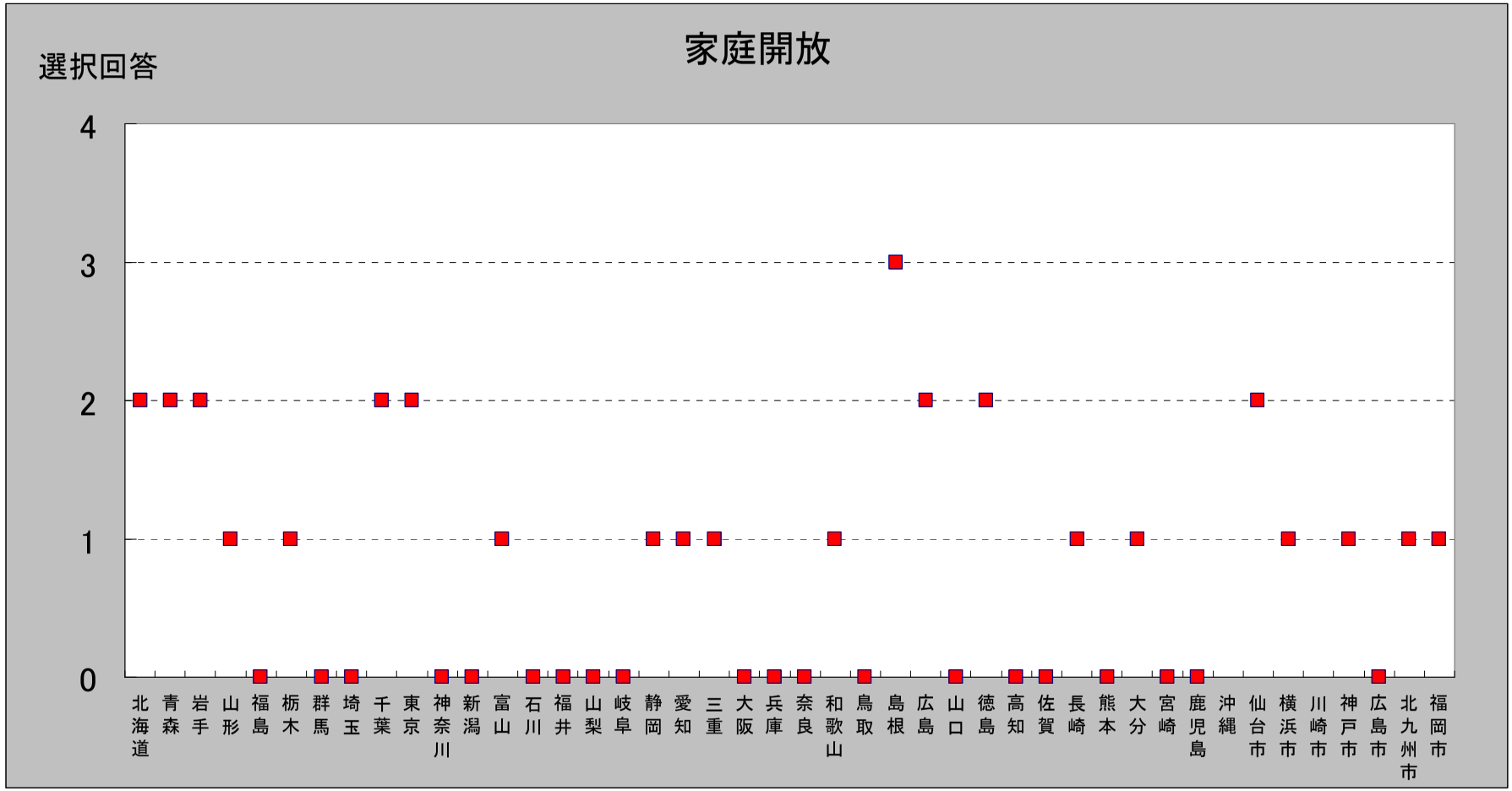
図Ⅱ－29　都道府県市子ども会日常生活活動「奉仕活動」調査回答（秋元作成）



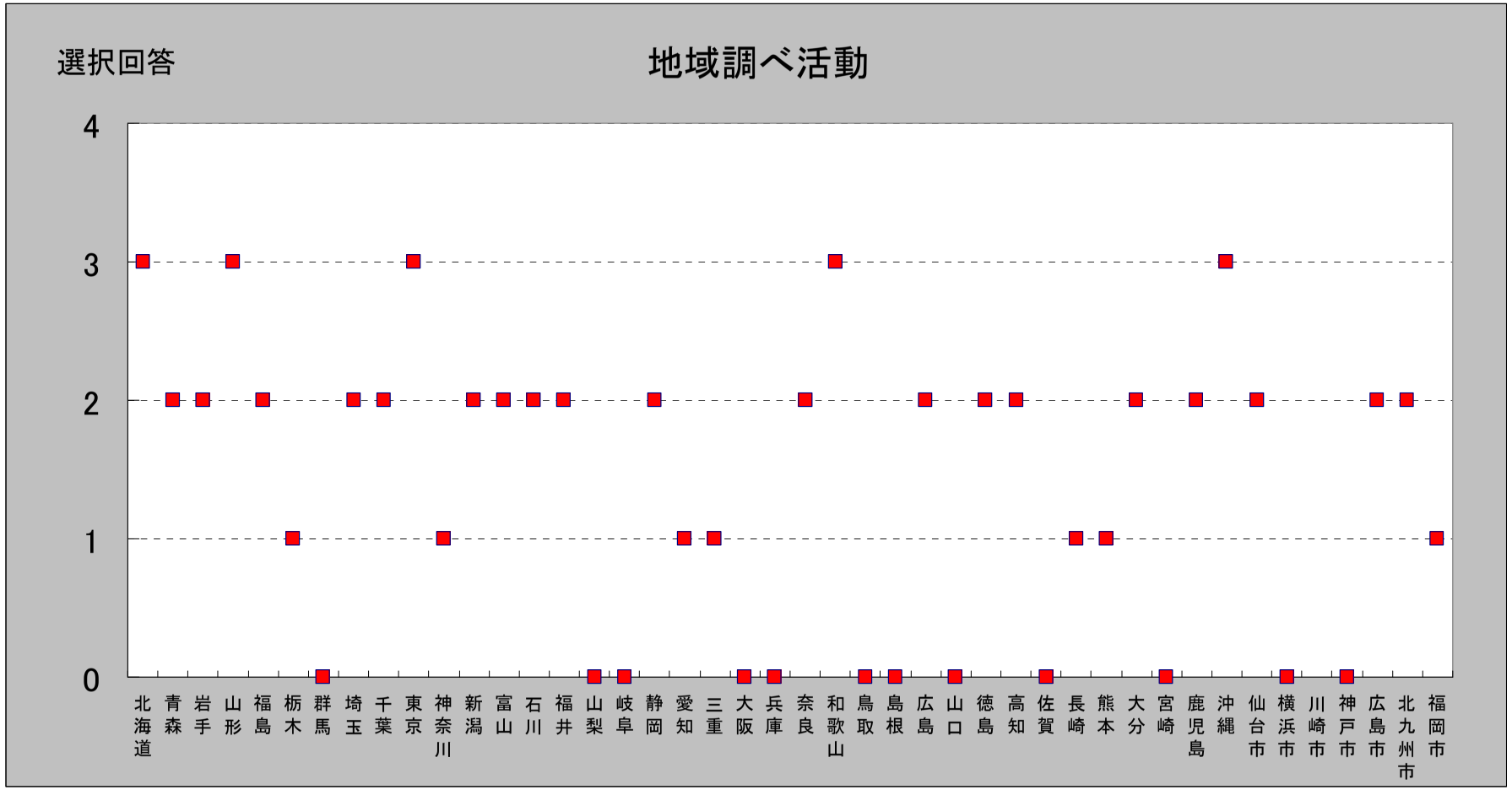
図Ⅱ－30　都道府県市子ども会日常生活活動「生産活動」調査回答（秋元作成）



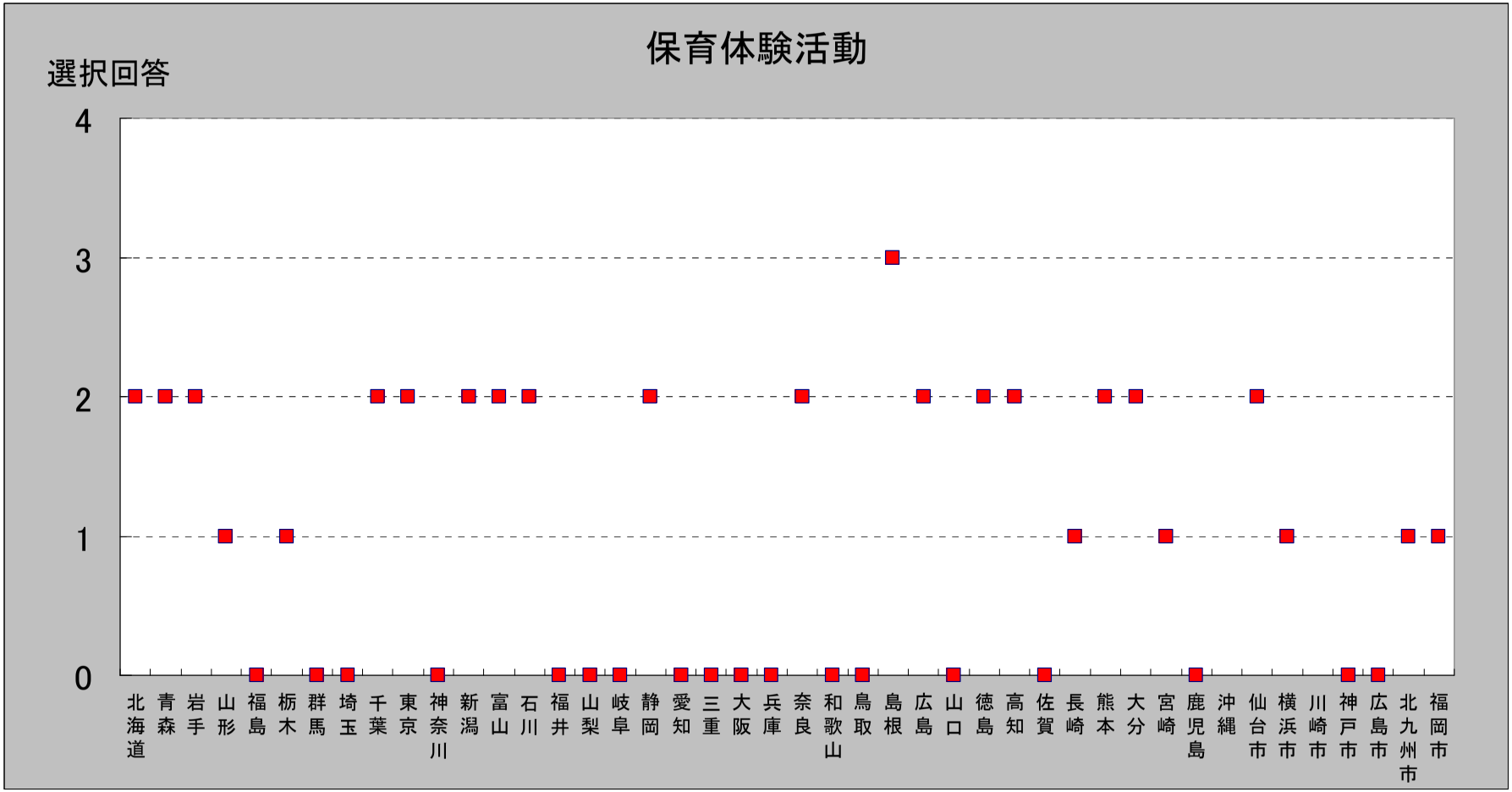
図Ⅱ－31　都道府県市子ども会日常生活活動「遊び場作り」調査回答（秋元作成）



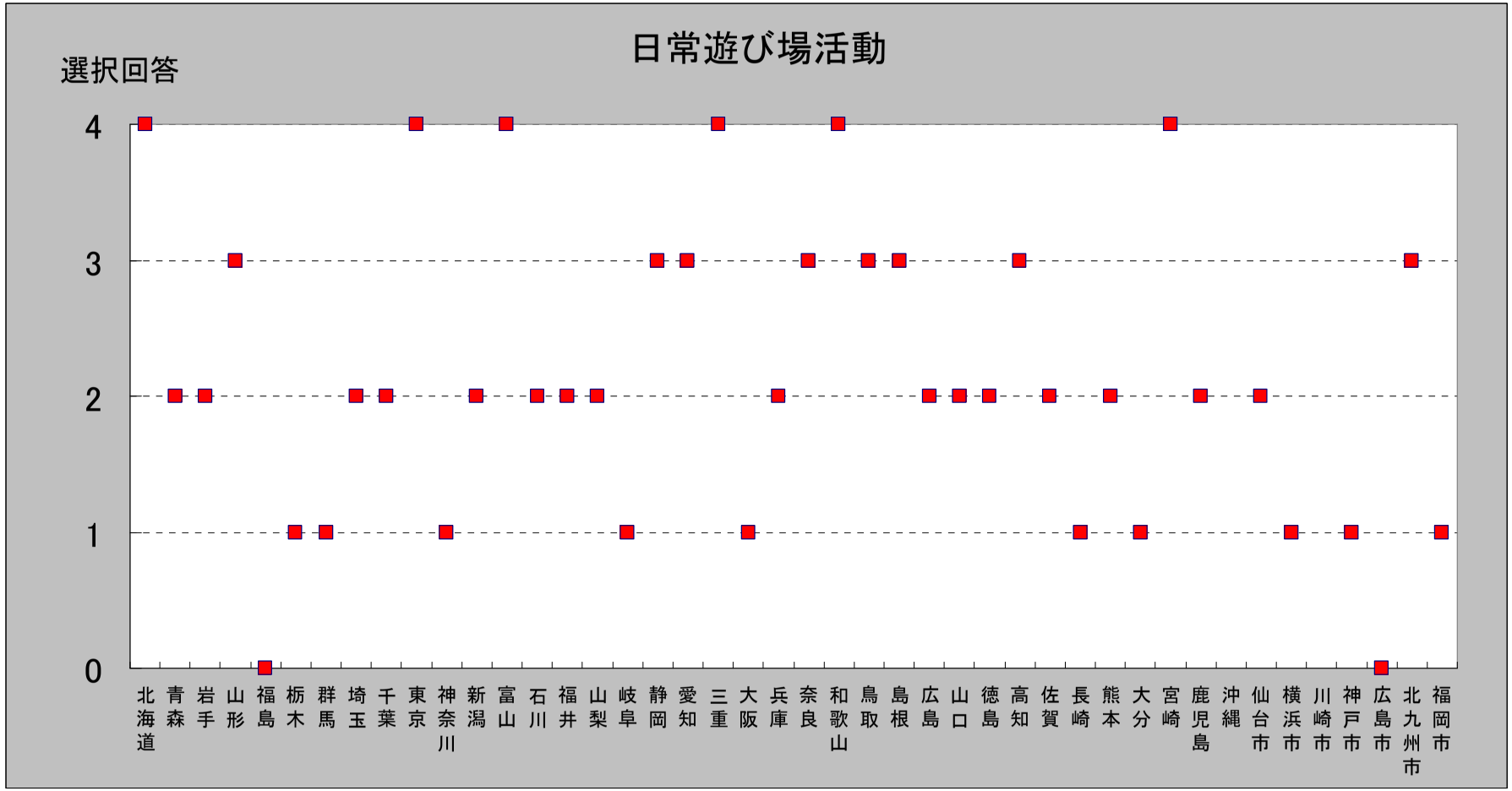
図Ⅱ－32　都道府県市子ども会日常生活活動「家庭開放」調査回答（秋元作成）



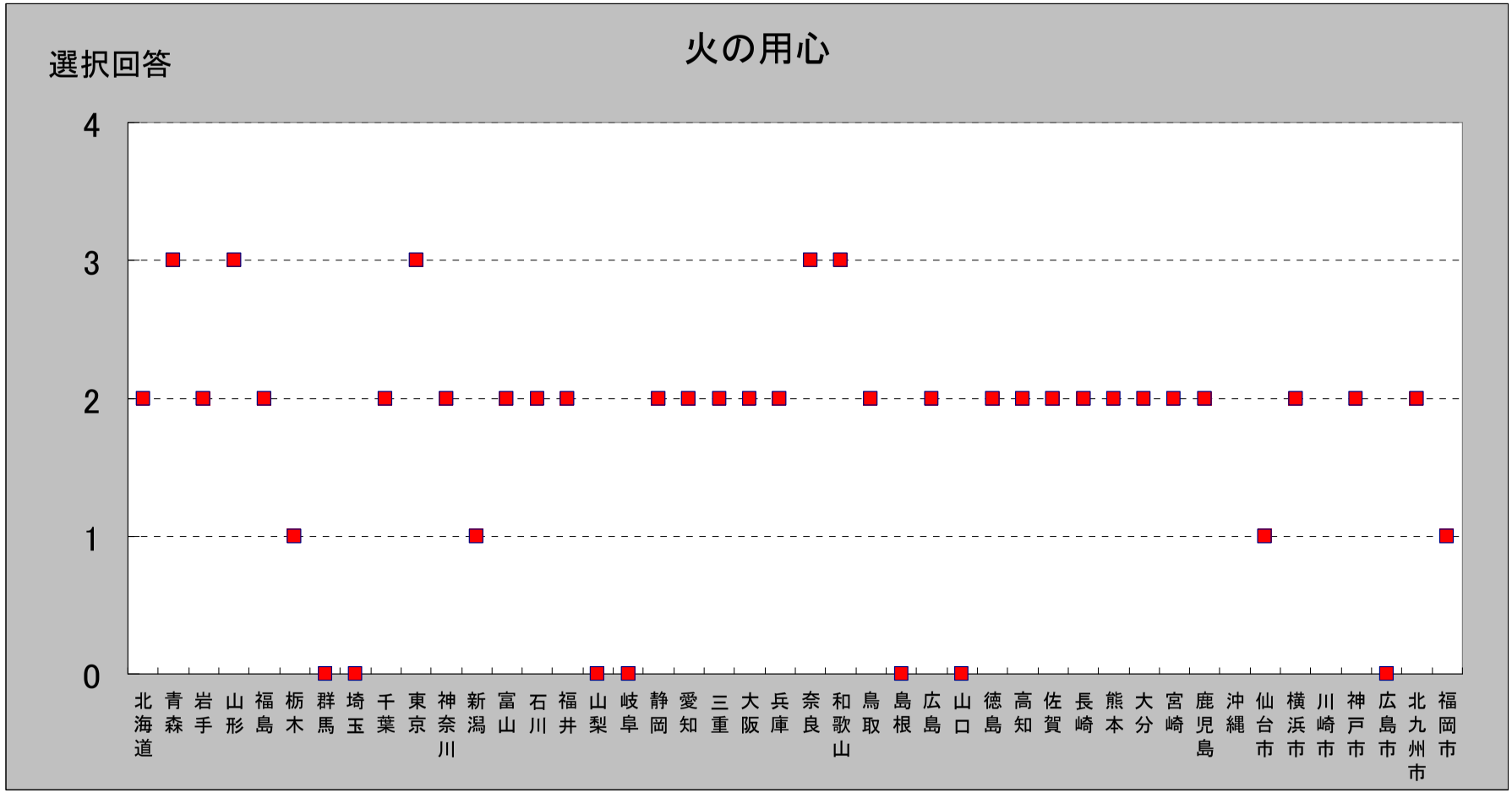
図Ⅱ－33　都道府県市子ども会日常生活活動「地域調べ活動」調査回答（秋元作成）



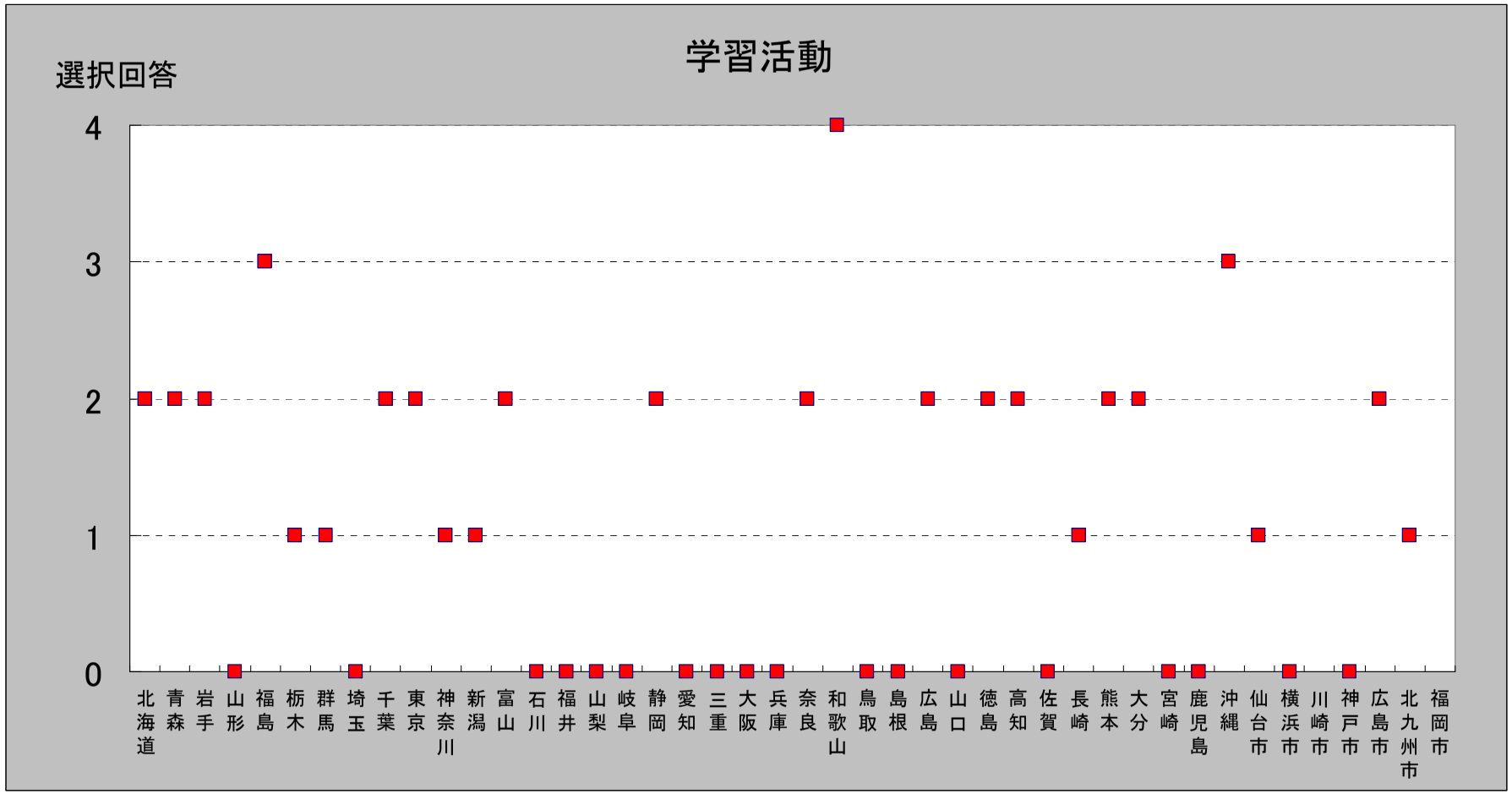
図Ⅱ－34　都道府県市子ども会日常生活活動「保健体育活動」調査回答（秋元作成）



図Ⅱ－35　都道府県市子ども会日常生活活動「日常遊び場活動」調査回答（秋元作成）



図Ⅱ－36　都道府県市子ども会日常生活活動「火の用心」調査回答（秋元作成）



図Ⅱ－37　都道府県市子ども会日常生活活動「学習活動」調査回答（秋元作成）

第４節　特徴ある自治体の考察

第３節で，大まかに積極的に活動されている子ども会の活動の動向を分析した。第４節では，全国で行われている子ども会の活動内容について詳細に分析する。全国で多くの都道府県市が行っている活動としては，リーダー研修会や広報誌発行がある。研修会は，59 自治体中（そのうち２自治体は無回答）43 都道府県市で行っている。広報誌発行は 35 都道府県市が行っている。

特色ある自治体の活動として,伝統芸能の継承,スポーツ，ボランティア活動，異文化交流，野外活動，学習，地域の文化，三世代交流などがある。

特徴ある自治体としては，以下の地域がある。

自治体	活動内容
山形	子どもカヌー教室
群馬	上毛かるた実技講習会，郷土芸能伝承子ども会発表会
埼玉	安全対策部会，さいたま郷土かるた大会
富山	ふるさと再発見事業，富山県児童福祉キャンプ
福井	先進地視察研修会
山梨	夏休みふるさと子どもランドカーニバル，親睦球技大会
三重	体験学習

滋賀	遊びの出前
大阪	スポーツ大会
和歌山	親睦交流ドッジボール大会，世界遺産清掃ウォーク
山口	文化財愛護
高知	森と緑の全国大会
福岡	県子どものつどい
佐賀	訪韓少年の翼
長崎	「しま」巡り交流事業，伝承芸能大会
熊本	球技大会，海洋体験サマースクール
大分	ジュニアサマーコミュニケーション，球技大会，芸能文化祭
鹿児島	青少年ふるさと美化大会
札幌市	チャレンジキッズ
横浜市	新春のつどい，ＪＬ球技大会
川崎市	野球大会，作品展，羽根つき大会
大阪市	アドベンチャークルーズ，「こどもとはじめる10gC02削減プロジェクト」発行
神戸市	ドッジボール大会，写生大会
広島市	広島・長崎子ども会親善交歓会，平和公園清掃，夏季球技中央大会
京田辺市	チャレンジランキング大会，京田辺市子どもまつり
松山市	子ども会の日

表Ⅱ－13　自治会の特徴ある子ども会活動（秋元作成）

地域的特徴がある活動の中から，以下では群馬の上毛かるたを取り上げる。上毛かるたは郷土かるたである。財団法人群馬文化協会（2009）によると，上毛かるたが誕生したのは第二次世界大戦後である。1945年夏の敗戦後の日本国土は荒廃し，国民は物資は欠乏し精神的にも困窮を極めていた頃。このような世相の中で，育つ子どもたちに夢と希望を与え，郷土愛と日本国民としての誇りをもってもらいたいと願って「上毛かるた」は作られた。特徴は，読み札の裏に歴史研究家丸山清康による解説文があり，絵札は画家の小見辰男が描いていることである。また，このかるたは，児童福祉法制定に添った努力であり，児童福祉法推薦文化財に指定されている。このかるた遊びを通して，歴史地理道徳を学んで欲しいと願われた。[7] この事例から，世相と自治体の要望を反映させた活動が，各地域で特徴的な活動となることがわかる。

上記の事例以外で地域的特徴のある子供会活動についてみると，広島市子ども会連合会（2009）によると，広島市では，広島・長崎子ども会親善交歓会，平和公園清掃など，原爆や平和関係の行事が行われている。これも，地域の文化・歴史の特徴に沿ったものとなっている。

第Ⅱ章では全国子ども会の現状を加入率や具体的な活動事例をみてきた。地域の伝統文化や地域環境にあわせた活動がおこなわれていることが明らかになった。

全国小学生加入率資料

都道府県市	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
北海道	62.5	60.3	59.5	37.3	51.1
青森	48.5	44.3	42.1	43.3	38
岩手	41.4	39.9	41.3	62.7	17.2
宮城	48.7	64.8	70	43.1	65
秋田	50.3	50.9	54.4	51.9	52
山形	60.3	61.6	60.4	51.6	57.7
福島	42	41.8	41.3	38.8	40.9
茨城	80.9	79.6	78.6	72.3	73.6
栃木	84.2	83.9	83.5	80.3	79.6
群馬	89.8	89.6	86.7	87.6	87.8
埼玉	45	43.5	42.4	41.4	37.9
千葉	24.9	23.2	21.8	20.7	19.2
東京	17.5	11.7	11.1	11.1	9.2
神奈川	46.8	41.6	39.4	18.5	40
新潟	37.3	37.5	36.2	36.8	36.8
富山	83.5	83.4	83.2	82.9	83.3
石川	99.7	89.5	91.3	90.9	88.3
福井	95.2	93.9	94	93.1	92.4
山梨	77.7	91.2	66.1	67.1	65.8
長野	82.5	83	83.1	81.3	79.2
岐阜	90.3	89.7	88.6	88.8	87.3

静岡	71.3	68.2	66.3	66.4	65.6
愛知	74.1	71.7	70.1	50.5	67.9
三重	44.8	39.8	38.5	27.4	35.5
滋賀	38.1	38.5	43.7	63.4	
大阪	39.7	38.9	37.1	34.4	28.8
兵庫	63.9	62.8	59.7	40.7	56.1
奈良	29.5	27.9	26	23.8	22.3
和歌山	37.1	36.5	37.1	36	34.8
鳥取	65.9	62.9	64.3	49.9	66.2
島根	34.9	29.1	30.4	30	30.5
岡山	35.7	34	32.3	30.7	29.7
広島	43.9	42.2	41.4	24.5	45.4
山口	84.4	81.8	80.1	79.6	77.6
徳島	41	38.8	36.2	33.1	32.3
香川	77.8	75.4	72.9	70.5	69
高知	28	24	23.9	23.4	22.1
福岡	48	47	46.9	25.5	45.8
佐賀	87.6	88.5	88.2	87	86
長崎	71.3	70.7	69.1	68	64.7
熊本	49.8	49.7	49.3	49.1	47.9
大分	24.5	23.6	24.2	22.9	24.2
宮崎	70.6	69.3	64.9	64.3	62.7
鹿児島	90.9	90.4	87.6	86.6	95.3
沖縄	17.7	15.2	10.9	16.1	12.4

札幌市	27	27.1	26.3	26	25.4
仙台市		31.8	30.5	29.8	28.5
横浜市	39.9	36.8	36.2	31.8	32.2
川崎市	38.8	36.8	34.8	34	31.3
名古屋市	64.7	62.8	61.5	66.7	58.9
京都市		0		0	0
大阪市	32.3	31	29.4	29.9	29
神戸市	15.1	14.3	14.5	13.7	12
広島市	58.1	56	56.3	50.4	49.1
北九州市	13.1	11.7	10.5	9.3	8.9
福岡市	61.7	60.5	60.8	60.3	58.4
京田辺市	5			0	0
松山市	21	59.4	58.5	56.6	57.6
平均	49.5	48.6	48.6	46.3	43

全国中学生子ども会加入率資料

都道府県市	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
北海道	58.2	57.1	56.5	34.1	44.5
青森	13.1	13.1	10.7	11.3	9.1
岩手	1.8	0.9	1.1	1.2	0.8
宮城	17.2	22.6	1.4	6.3	11.4
秋田	21.5	22.4	23.5	20.7	20.7
山形	25.3	21.6	21.7	26.1	26.3
福島	7.5	7	7	10.4	6.3
茨城	19.1	17.6	17.7	15.8	16.3
栃木	28.5	27.4	26.9	25.9	25.4
群馬	41.3	42.8	39.2	39.4	38.7
埼玉	1.8	1.7	2.1	2	2.5
千葉	3.1	3	2.6	2.5	2.3
東京	4.7	1.7	1.9	1.9	2.4
神奈川	4.2	4.6	4.1	1.7	3.8
新潟	7.9	7.7	7.2	6.6	6.1
富山	38.4	37.9	38.3	36	35.8
石川	91.1	50.9	42.4	40.4	38.7
福井	23.3	23	22.1	21.7	21.8
山梨	72.7	83.9	67.9	65.3	62.4
長野	56	58	57.2	54.7	54.6
岐阜	34.5	32.6	31.8	30.9	29.9

静岡	1.7	1.5	1.7	1.7	1.6
愛知	5	4.4	3.2	2.1	2.8
三重	6.3	10.8	4.5	3.8	4
滋賀	14.3	6.8	6.5	8.8	0
大阪	6.3	6.3	6.4	5.5	5.2
兵庫	12.5	12.3	8.1	7.7	8.3
奈良	1.7	1.4	1.4	1.2	1
和歌山	7	6.1	7.9	7.4	7.6
鳥取	7.3	5.8	5.7	4.1	5.9
島根	3.6	3.5	3.1	3.2	2.7
岡山	2.2	2.2	2.2	2.3	2.4
広島	7.8	6.3	5	3.1	4.5
山口	24.1	23.1	21.8	21.1	19.6
徳島	0.3	0.1	0.2	0.2	0.1
香川	2.6	0.2	0.1	0.7	0.7
高知	4.9	3.6	3.8	2.4	2.4
福岡	8.7	9	9.2	4.7	8.3
佐賀	66.6	65.6	64	62.6	58.7
長崎	34	32.9	31.6	30.9	28.4
熊本	3.3	3.3	2.9	2.6	3
大分	1	0.5	0.5	0.6	0.7
宮崎	14.3	13.4	11.5	11.3	10.5
鹿児島	70.4	68.2	66.3	64.6	62.6
沖縄	6.3	5.8	4.3	5.6	2.1

札幌市	5.6	5.5	5.3	5.4	5.4
仙台市		2.6	2.3	2.4	2.6
横浜市	3.5	4.1	4	3	3.4
川崎市	10.8	7.4	9.2	6.3	2.9
名古屋市	23.7	21.8	21.2	20.2	19.8
京都市		0		0	0
大阪市	5.4	5.1	5	5	5.3
神戸市	4	3.8	4	3.7	3.2
広島市	9.7	8.9	9.1	7.9	7.6
北九州市	0.9	0.7	0.7	0.6	0.5
福岡市	7.7	8.4	8.7	8.8	8.5
京田辺市	2.2			0	0
松山市	5.8	18.5	18.2	16.8	18.3
平均	14.3	13.6	12.6	12.1	11.2

[1] 社団法人全国子ども会連合会「2008年度版子ども会白書」2009年，p.1.

[2] 「指定都市市長会事務局ホームページ」http://www.siteitosi.jp/

によると,「政令指定都市とは，大都市行政の合理的，効率的な運営と市民福祉の増進を図るために，都道府県の事務移譲を含めた一般の市とは異なる特例を定めて，昭和 31 年６月に制度化されている。「地方自治法第２５２条の１９第１項の指定都市の指定に関する政令」に基づき，人口 50 万人以上で，人口その他都市としての規模，行財政能力等において既存の指定都市と同等の実態を有するとみられる都市が対象となる。政令指定としが処理することとなる主な事務は以下のとおりである。

また，地方自治法第２５２条の１９に,「政令で指定する人口 50 万以上の市（以下「指定都市」という。）は，次に掲げる事務のうち都道府県が法律又はこれに基づく政令の定めるところにより処理することとされているものの全部又は一部で政令で定めるものを，政令で定めるところにより，処理することができる。」という記述がある。

[3]次世代育成支援地域行動計画　やまなし子育て支援プラン（2009）：

http://www.pref.yamanashi.jp/jidou/documents/39297043407.pdf

[4] 山梨県ホームページ（2009）：山梨県庁

http://www.pref.yamanashi.jp/index.html

[5]「指定都市市長会事務局ホームページ」http://www.siteitosi.jp/によると,「政令指定都市とは，大都市行政の合理的，効率的な運営と市民福祉の増進を図るために，都道府県の事務移譲を含めた一般の市とは異なる特例を定めて，昭和 31 年 6 月に制度化されている。「地方自治法第２５２条の１９第１項の指定都市の指定に関する政令」に基づき，人口 50 万人以上で，人口その他都市としての規模，行財政能力等において既存の指定都市と同等の実態を有するとみられる都市が対象となる。政令指定としが処理することとなる主な事務は以下のとおりである。

また，地方自治法第２５２条の１９に，「政令で指定する人口 50 万以上の市（以下「指定都市」という。）は，次に掲げる事務のうち都道府県が法律又はこれに基づく政令の定めるところにより処理することとされているものの全部又は一部で政令で定めるものを，政令で定めるところにより，処理することができる。」という記述がある。

[6]「どちらともいえない」を１にした理由は，活動は少しは行っているが，自治会や町内会の活動ともいえ，子ども会活動とはいえない曖昧な活動であるとして，この選択肢を選んでいる可能性が高いと考えられるからである。もう一つ考えられる理由は，通年で活動していない，各都道府県市の中でも場所によって活動にむらがあるなどの可能性が高いと考えられるからである。

[7] **上毛かるたホームページ**（2009）：財団法人群馬文化協会

http://www.jomokaruta.org/index.htm

第Ⅲ章　広島市子ども会の現状

第１節　調査地域広島市の概要

第Ⅱ章では，子ども会の設立過程，全国の子ども会の加入率や日常生活活動，特色ある活動内容を比較・分析し，近年の動向や特徴を明らかにした。第Ⅲ章ではミクロな視点で分析するために，広島市の子ども会活動を具体例として取り上げ，活動を検証する。広島市を事例として取り上げるのは，①全国でも加入率が平均に近いこと，②原爆や平和関係の行事が行われるなど地域に特徴があること，③育成指導員という珍しい制度があること④広域中心都市であり，市街地が発展していること，また，1980 年代にベッドタウンとして多くの新興団地がつくられていること，古くからの伝統的集落が残っており，各地域に特徴があるため，子ども会の活動内容を比較・分析する対象として最適であること，という四つの理由からである。

森川洋（1983）は，広島市の広域中心都市としての役割について言及している。広島市は，1959（昭和 44）年の「新全総」のなかで，中枢管理都市として位置付けられ，1970（昭和 55）年 4 月政令指定都市に移行して，名実ともに中国・四国地方最大の広域中心都市となった。広域中心都市というのは，県域中心都市（県庁所在地）よりも上位にある広域的な地方の政治・経済・文化の中心機能を有する都市である。中央の官庁，金融・商社をはじめ中央の大企業の出先機関が集積し，交通・通信の地方中心として資金・物資・情報が激しく集積し，活気があり発展性が高いといえる[1]。と述べている。

次に，広島市の人口分布についての地域的特性についてである。森川洋（1983）は，広島市は原爆によって爆心地から半径約 2km 以内の区域が全快し,段原と宇品地区が残存市街地としては主要であった。しかし，

昭和 30 年代には戦前を凌ぐまでに発展し,その後は旧市街地のデルタ上の農地や空閑地をほとんど埋め尽くし，周辺産地や丘陵地にまで住宅地開発が進展した。さらに北郊の太田川流域や西効・東効の海岸線や谷地に沿って市街地の拡張が続いていった[2]。と述べている。

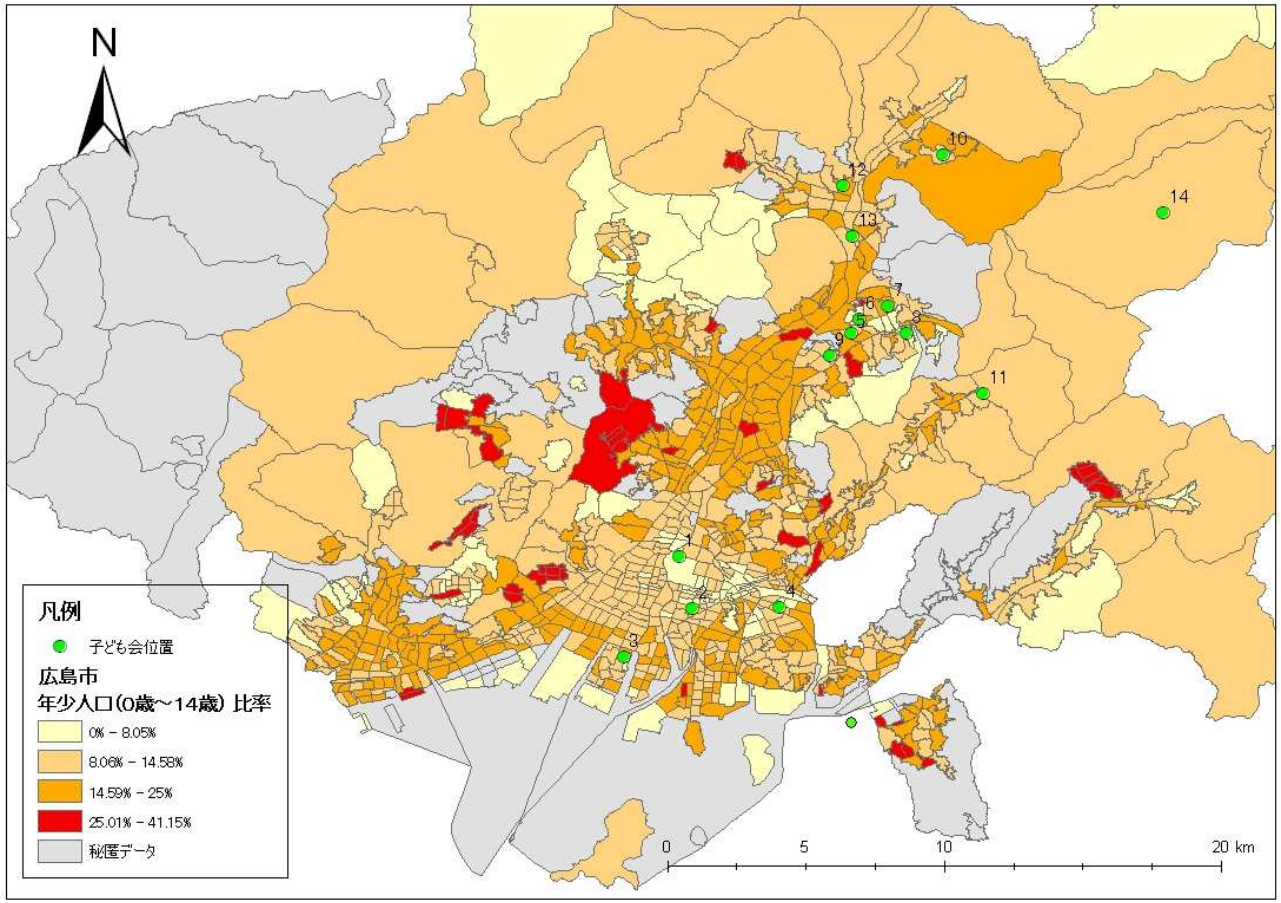
昭和 40 年代は，住宅事情の向上によって，狭いふるい市街地住宅から郊外の新しい広い住宅に移転する人が多かった。東雲・宇品・観音・牛田・庚午などは。1955（昭和 40）年代に住宅地域化された地域は，いったん開発が終了するとすぎに人口は減少方向に向かっていった。これは，西白島・白島北町の高層住宅地域でも同様であった。1965～70（昭和 50～55）年には，新地域の人口増加率が高かった。高陽ニュータウン造成を含めてほぼ 2 倍に増加した高陽町をはじめ，安古市町上安・高取・長楽寺地区（82.1％増），あさひが丘・くすのき台団地の開発を含む安佐町（78.9％増）などがある。しかし，一方では，すでに過飽和状態であった祇園町・可部町・矢野町・船越町の一部や，過疎化過程にある安佐町や白木町・沼田町の一部など，人口減少の地域もみられた。新市域では，住宅開発地と過疎地域とが隣り合わせの場合もあり，人口増減は複雑なモザイクをなすところもあった[3]。と述べている。

このことから，広島市には，地域類型として四つのパターンにわけられる。第一に旧市街地，第二に新興団地として，第三に住宅開発地と過疎地域とが隣り合わせの地域，第四に過疎地域である。

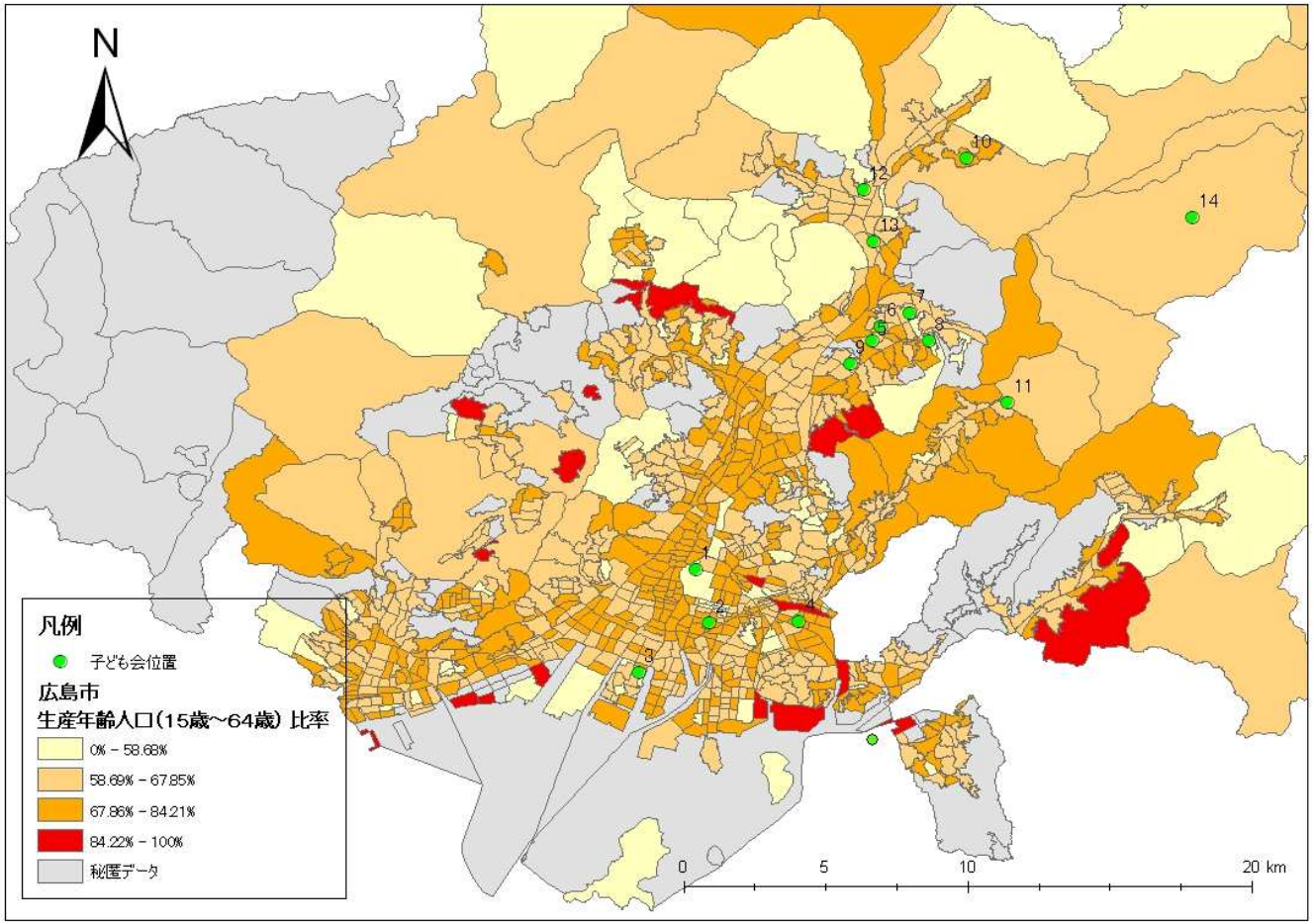
そこで，今回の調査地域は，第一の旧市街地は中区の基町，袋町，舟入，南区の大州地区を，第二の新興団地は，高陽ニュータウン（落合東，真亀，亀崎，倉掛）と，口田東，三入東，第三の住宅開発地と過疎地域とが隣合わせ地域というのは，今回は在来集落に以前から住んでいる人と新しく入ってきた住人が混在している地域と定義する。可部（可部学

区全体，城表，東原)，可部南を，第四の過疎地域として井原にて，子ども会会長，育成指導員など聞くことが可能な範囲で，アンケート・インタビューを行った。

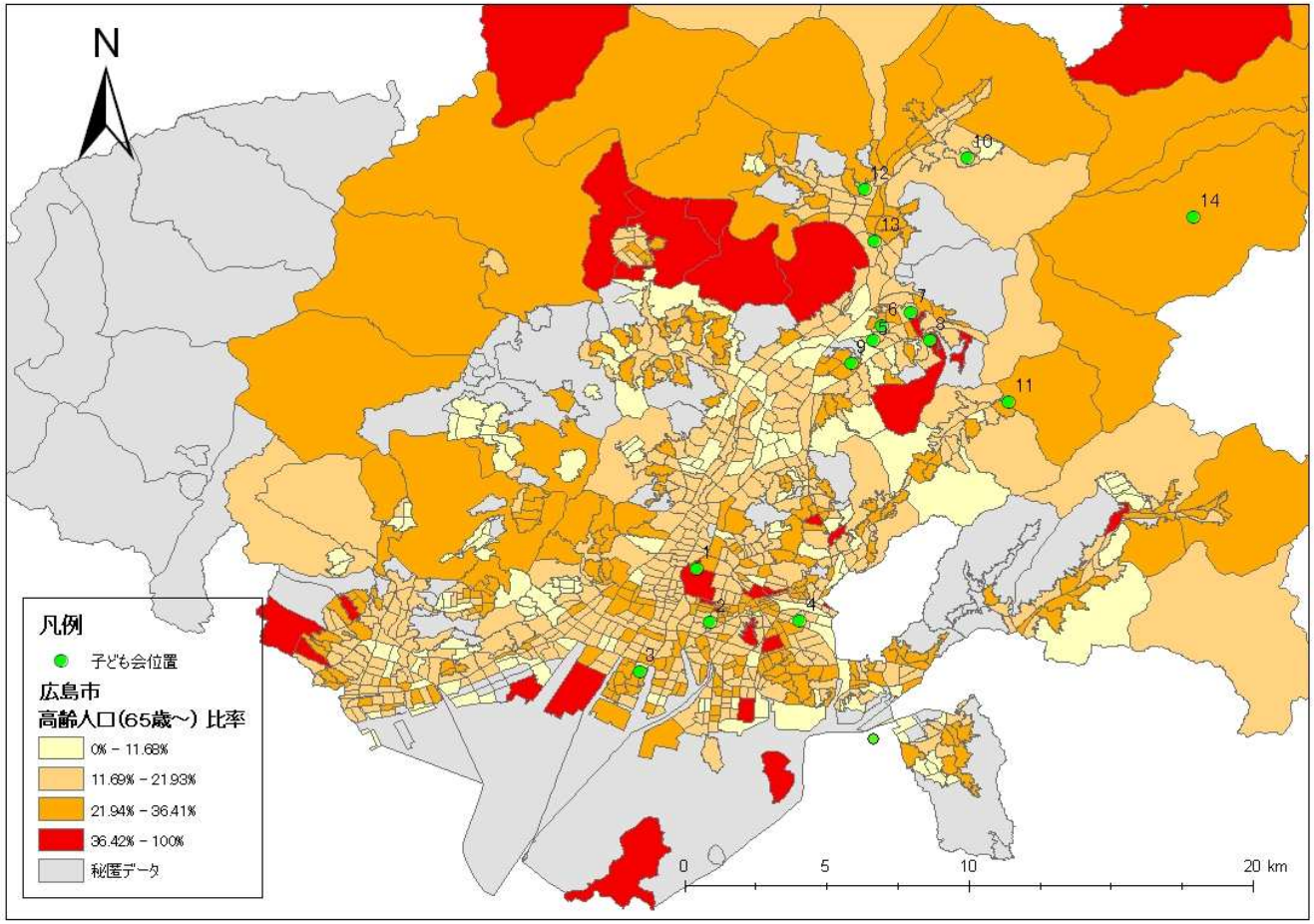
今回の調査地域がどこにあてはまるかを示したのが以下の図Ⅲ－1、図Ⅲ－2、図Ⅲ－3、である。これらの図は後に調査地域の詳細を述べる際に地域概観の分析に利用する。これらの図に書かれている番号は，表Ⅲ－1の番号・地名と対応している。



図Ⅲ－1　広島市年少人口比率（秋元作成）



図Ⅲ－2　広島市生産年齢人口比率（秋元作成）



図Ⅲ－3　広島市高齢人口比率（秋元作成）

番号	学区	住所
1	基町	広島県広島市中区基町
2	袋町	広島県広島市中区富士見町
3	舟入	広島県広島市中区江波東
4	大州	広島県広島市南区大州
5	落合東	広島県広島市安佐北区落合
6	真亀	広島県広島市安佐北区真亀
7	亀崎	広島県広島市安佐北区亀崎
8	倉掛	広島県広島市安佐北区倉掛
9	口田東	広島県広島市安佐北区口田
10	三入東	広島県広島市安佐北区三入東
11	狩小川	広島県広島市安佐北区小河原町
12	可部	広島県広島市安佐北区可部
13	可部南	広島県広島市安佐北区可部南
14	井原	広島県広島市安佐北区白木町井原

表Ⅲ－1　広島市子ども会の住所（秋元作成）

「平成 19 年度　広島市子ども会連合会事業報告」によると，広島市子ども会連合会の事業内容は，市子連指導者研修大会にて子ども会活動における安全対策についての研修，平和公園清掃，広島市子ども会夏季球技中央大会，指定都市子ども会育成研究協議会，安全会審議委員会，全国子ども会育成中央会議，合同専門員会など各専門委員会（総務，研修，

体育，公報，安全)，指定都市ジュニアリーダーの大会などがある。

広島市の子ども会加入率は，全国平均より若干上である。そして，特色として広島市にしかない特別な制度をもっている。それは、育成指導員という制度である。これは、全国でも先進的な制度である。第二節ではその育成指導員について詳しく分析する。

第２節　広島市子ども会育成指導員制度について

広島市教育委員会青少年育成部育成課（2009）によると，広島市子ども会育成指導員制度は，広島市子ども会連合会の強い要望を受け，地域における子ども会の充実・発展を図るため、昭和４９年からはじまったものである。子ども会育成指導員は，行政と地域子ども会のパイプ役として，また，地域子ども会の振興を図るための活動を行うためにつくられた。

子ども会育成指導員の選定方法は，広島市各学区子ども会育成協議会が２名（筒瀬学区は１名）推薦し，それを受けた広島市教育委員会が依頼する方法がとられている。

子ども会育成指導員の職務内容は,（１）子ども会活動の連絡調整に関すること、（２）子ども会に対する指導助言に関すること、（３）学区内関係団体との連絡調整に関すること、（４）学校体育施設開放時の指導助言に関すること、（５）その他、少年教育の振興に関すること，と規定されている。具体的にそれぞれの項目にて子ども会育成指導員に求められる活動内容を述べていく。

（１）子ども会活動の連絡調整に関することでは，各単位子ども会の

「子どもの会」や「育成会」と連絡を密に取りながら，子ども会活動（子どもの会の活動や育成会活動の両面）がスムーズに運ぶように指導助言を行うことが，子ども会育成指導員に求められる活動内容である。

（２)子ども会に対する指導助言に関する内容は以下のとおりである。①「こどもの会」や「育成会」の会議への出席や、指導者・育成者の方とのコミュニケーションを通して、「こどもの会」活動や「育成会」活動の現状や課題を把握すること。②「子どもの会」活動や「育成会」活動の課題の解決にむけて方策を考えること。③「育成会」役員会や部会への出席を通して，また指導者や育成者に対して，「子どもの会」事業や「育成会」事業の企画・運営について，指導助言を行うこと。④学区内の指導者，ジュニアリーダー，シニアリーダーなど，「子ども会」活動に必要な指導者を把握すること。⑤指導者の紹介，指導者に関する情報の提供を行うこと。⑥指導者養成研修やジュニアリーダー，シニアリーダー研修事業について指導助言を行うこと。⑦公民館が行う育成者や指導者研修に協力することが求められる活動内容である。

（３)学区内関係団体との連絡調整に関する内容は次のとおりである。①学区内の地域団体を把握すること。②子どもの健全育成や子どもを対象とした事業について，学校や公民，ＰＴＡ，スポーツ少年団，青少年育成協議会など学区内の関係団体と連絡調整を行うこと。③学校や公民館，地域諸団体に子ども会のＰＲを行うことが求められる活動内容である。

（４）学校体育施設開放時の指導助言に関することでは，施設利用のマナー指導、及び利用者の安全確保と指導を行うことが求められる活動内容である。

（５）その他、少年教育の振興に関することでは，「こどもの会」の運

営についての具体的な指導や活動の実技指導を行うこと。研修会、講習会へ参加し、指導員としての資質の向上に努めること。活動報告書により、活動状況を報告することが求められる活動内容である。

以上のことをまとめると，子ども会育成指導員は，他団体や「子どもの会」と「育成会」のパイプ役であり，よき助言者，指導者であることが求められているといえる。

子ども会育成指導員の任期は，4月1日から翌年3月31日までの1年となっている。再任も可能である。また、任期途中で交代したときの補欠指導員の任期は、前任者の残任期間となっている。

この子ども会育成指導員の一番の特色は，謝礼金を広島市が支払っているという点である。月額6000円（源泉徴収後、月額5400円）の謝礼金が支払われている。謝礼金は、各育成指導員の金融機関口座に、3ヶ月毎に振り込まるという仕組みである。この謝礼金を支払うかわりに義務としているのが，活動報告書の提出である。振込み月の支払手続きの際に、活動報告書がきちんと3ヶ月分出され，活動の内容が確認できる場合のみに謝礼金が支払われている。

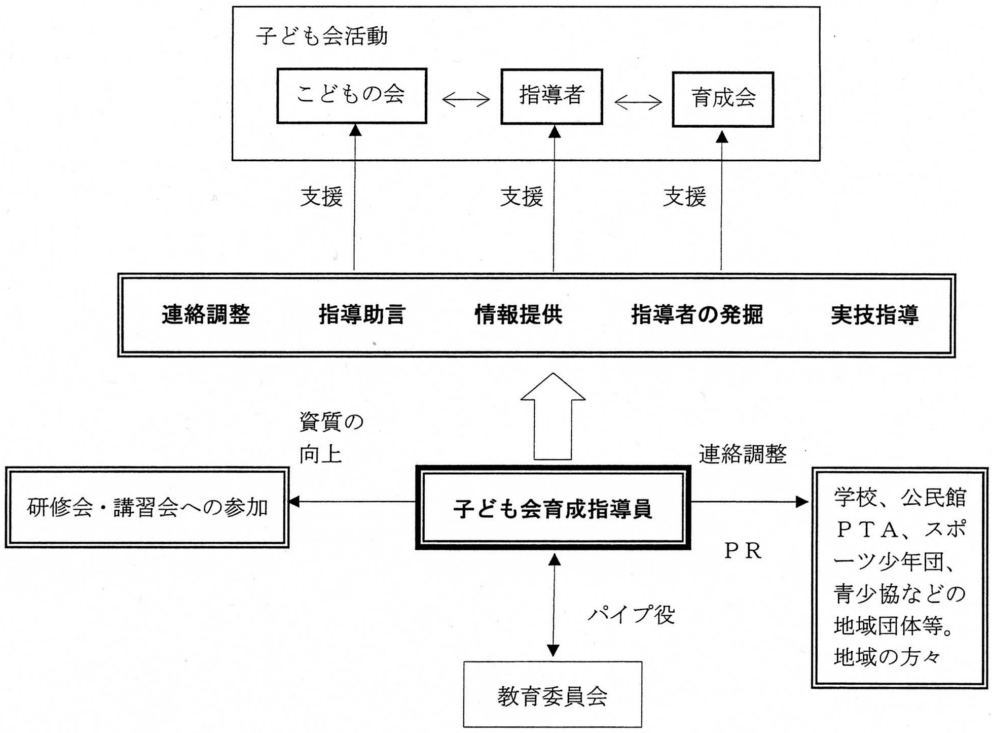
活動報告書は，広島市が各地域の活動状況や地域子ども会の状況の把握，及び子ども会活動の充実のための資料とするために、毎月提出を課しているものである。その月の報告書は翌月10日までに提出することとしている。

この報告書の提出方法は様々な方法が用意されている。公民館・小学校・各区区政振興課から広島市教育委員会青少年育成部育成課に転送してもらう。郵送する。持参する。ＦＡＸする。Ｅメールで送る。など，送付方法は充実している。

また，子ども会育成指導員に対して，研修会が設けられている。これ

は，子ども会育成指導員の職務内容は，多岐にわたっていることや，子ども会の本来のあり方，適正な運営など，高度な知識や技術が必要だからである。広島市教育委員会が主催する研修会に参加することで、他学区との情報交換を行い、育成指導員としての資質の向上に努めることが必要だという考えから，研修会が設けられている。この研修会は義務ではなく，任意となっている。

このような独自の特徴ある活動を広島市の各子ども会は活かしきれているのだろうか。次節では各子ども会への聞き取り調査で各子ども会の特徴を明らかにする。



図Ⅲ－4　子ども育成指導員職務のイメージ

（広島市教育委員会作成）

第３節　調査地域子ども会の地域分類

今回の調査地域は，第一の旧市街地は中区の基町，袋町，舟入，南区の大州地区を，第二の新興団地は，高陽ニュータウン（落合東，真亀，亀崎，倉掛）と，口田東，三入東，第三の住宅開発地と過疎地域とが隣合わせ地域は（ふるくからあるまちに以前から住んでいる人と新しく入ってきた住人が混在している地域と定義）は，可部（可部学区全体，城表，東原），可部南を，第四の過疎地域として井原地区にて，子ども会会長，育成指導員など聞くことが可能な範囲で，アンケート調査とインタビュー調査を行った。

第一の旧市街地地域では中区の基町，袋町，舟入と南区大州での聞き取り調査結果は以下のとおりである。分析の前に中区の児童数をみると，中区は全体の小学校児童数が，2007（平成 19）年 5 月 1 日現在 5382 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 3249 人で，加入率は 60.3%である。一方南区は，全体の小学校児童数が，2007（平成 19）年 5 月 1 日現在 6938 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 4754 人で，加入率は 68.5%である。

第４節　中区基町学区子ども会の現状

基町学区は，年少人口比率と生産年齢人口比率が低く，高齢人口比率が高い地域である[4]。単位子ども会は 8 個ある。

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在基町小学校児童数 176 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 178 人である。つ

まり，加入率が 101.1%[5]である。100%を超えているのは，私立の小学校に通っている児童や転入した児童がいたからである。

このように加入率が高いのは，小学校が加入している保険が 5 年前にきれることになり，その時に加入していた保険を更新するかどうかの話を小学校校長と子ども会会長がしていた時，子ども会会員が加入できる安全会に全生徒を加入させることにしようという話になったためである。そういった経緯から，元々加入率は 6 割程度であったのが，10 割となったのである。このことからわかるように，小学校と子ども会が密接な関係にあることがわかる。このような小学校と子ども会の関係は，10 年近く前まではある程度あったものの，現在は少なくなっている。

この学区は、平成 20 年度子ども会会長へのインタビュー・アンケートを元に記述する。子ども会活動の参加者は，地域の子ども 146 人中 50 人程度である。この学区の子どもは減少傾向にあるので，子ども会参加者も減少している。基町学区は小さく，県営住宅や市営住宅の住人が主だという特徴ある地域である。また，中国人や韓国人も多く，国際色豊かな地域である。小学校も 8，9 カ国の子どもがいる。外国人が子ども会に参加するのかというと，中でも中国人の参加率が良く，4 割程度は子ども会活動に参加している。

基町学区は子ども会会長を何十年も続けておられる方で，広島市子ども会連合会，全国子ども会連合会の活動，社会福祉協議会や学区体育協議会，地域交通安全促進委員会等もされており，子ども会活動や地域活動に熱心な方で，リーダーシップもとっている。会長になったきっかけは，学区の副会長から入り，そのまま現在まで継続して会長をされている。後継者がいれば変わるつもりらしいが，地域の人々から自分たちが指示された仕事はやるので，今年もなって上にたってほしいと要請され

続け，いまに至るようだ。このことからも，地域は引っ張ってくれるリーダー的存在を望んでいることがわかる。会長の活動内容は，地域の他団体との連携をとるために話をしたり，中区子ども会連合会，行事・運営・各部会においてのアドバイスをしたり，広島市子ども会連合会の運営と他都市との交流も行っている。

子ども会活動は，子ども会もちつき大会で，約 30 名以上の人と活動したり，校庭キャンプで約 20 名の方と活動したりしている。一緒に活動されている方とは，子ども会以外でも地域の色々な行事や講習，研修などで一緒に活動しており、地域活動と子ども会の関係は密接である。

公民館や児童館を利用した，また関係をとっている子ども会活動は，「グラウンドゴルフ大会」や「公民館フェスティバル」に参加の活動である。学校での子ども会の活動は,「竹林体験学習」,「ソーラン教室」である。このソーランは旧市街地中心部の子ども会で多く行われている活動で，外国から人が来る時に，市からの要請でソーランを披露したり，グリーンフェスティバルで披露することがある。学校との連携活動として年末学区内の清掃も行っている。他の施設での子ども会活動は,「みかん狩り」,「雪山体験」,「広島市総合防災センター研修参加」である。町内会と連携した子ども会の活動として,「盆踊り大会」や「町内体育祭」があげられる。このように，他の地域とは変わっている,「校庭キャンプ」や「ソーラン」,「みかん狩」,「雪山体験」,「もちつき大会」,「敬老会」,「ハゼ釣り大会」,「三世代交流スポーツ」,「ジュニアリーダー研修」,「映画鑑賞」,「クリスマス会」,「新入生歓迎会」,「6 年生を送る会」などの行事が他地域に比べてとても多い。しかし，集合団地のため伝統文化は特にない。

子ども会活動で大変なことは，育成者の育成である。育成者をどう育

てていけばいいのかということが難しい。

10年前と現在で子ども会が変わってきたことは，保護者との関わりが少なくなってきていることである。また，子どもは10年前に比べて，子ども会活動に参加する子どもは色々な行事（スポーツ大会，もちつき大会，体育大会，校庭キャンプなど）に参加するのだが，参加しない子どもはほとんど参加しないということである。

基町学区での子ども会の教育の場としての役割は，色々なことについて学校と共に情報の発信の中心になるということである。また，地域環境（県営住宅，市営住宅，旧市街中心）のため，子どもに関心が薄いために，子ども会が中心に子どもの育成に力をいれる必要がある。こういったことから，地域を巻き込む活動が必要である。子ども会は単体で活動するのではなく，地域の中の一つの駒であり，地域の中に入っていく必要があると考えられており，他の地域コミュニティとの連携が多くとられているように感じる。治安が良くない地域ということもあり，この連携をとることで，地域の子どもの顔がわかり，トラブルに巻き込まれるのを防ぐ役目もある。

第5節　中区袋町学区子ども会の現状

袋町学区は，年少人口比率・高齢人口比率はやや低く，生産年齢人口比率はやや高い地域である。単位子ども会は，11個ある。

2007（平成19）年5月1日現在袋町小学校児童数236人に対し，2008（平成20年）3月31日現在子ども会安全会加入数が233人である。加入率は，98.7％である。

平成 20 年度袋町子ども会会長に聞き取り調査を実施した。子ども会への参加者は 140 人程度で，学区内の子どもは増加しているが，参加者は減っている。会長という役職についたきっかけは，友人の誘いからである。会長の仕事として，とりまとめを行っている。一緒に子ども会活動を行っている人は 8 名いる。子ども会以外で共に活動することもあるようである。子ども会の仕事で大変なことは，保護者・子どもを含め参加者を集うことである。

施設を使った活動は，公民館や児童館を利用してダンス活動を行ったり，部会を行う会場として学校を使ったり，公園を使って活動したりしている。町内会と連携した子ども会の活動は「夏祭り」や「亥の子」である。他の地域と変わった行事は「亥の子」,「新一年生歓迎会」,「卒業おめでとう会」,「ジュニアリーダー研修」,「慰霊夏祭り」,「ディズニーオンアイス鑑賞」,「みかん狩」,「ピクニック」,「映画鑑賞」,「花火大会」,「地蔵祭り」,「献血運動協力」,「中区子ども会文化祭」,「育成者新春懇親会」,「クリスマス会」,「ボーリング大会」,「デイキャンプ」,「レクレーション」,「三世代スポーツフェスタ」,「各単位子ども会懇親会」,「町内パトロール」,「青少協街頭パレード」,「プール」,「敬老会への参加」である。様々な行事があることがわかる。

10 年前と現在では，父兄の参加が減少していたり，子どもが高学年になると受験のために塾に通う子どもが増えていることが変化している。

袋町学区では，子ども会は，身体を使った遊びへのきっかけとしての教育の場として活かされている。具体的な例をあげると，スポーツ教室でスポーツ活動を行っているからである。

第６節　中区舟入学区子ども会の現状

舟入学区は，年少人口比率と高齢人口比率がやや高く，生産年齢人口比率やや低い。単位子ども会は５個ある。

2007（平成 19）年５月１日現在舟入小学校児童数 627 人に対し，2008（平成 20 年）３月 31 日現在子ども会安全会加入数が 201 人である。加入率は，32.1％と低い。このことからわかるように，同じ中区でも，全員加入というきまりをつくるなど，加入率を高くする努力をしているところとしていないところでは加入率がかなり異なっていることがわかる。舟入学区の子どもの数は減っており，加えて参加者も激減状態である。

過去､舟入学区の単位子ども会の会長と平成 21 年度文化部長をしたことがある方にアンケートをとった。会長になったのは，フルタイムで仕事をしているため夜しか活動できなかったからである。文化部長は，仕事柄、劇や踊りの指導をすることができるためと，自分のライフスタイルや特技を活かしての役職となっている｡子ども会活動で大変なことは，忙しすぎることで，役員はほとんど有職者（主婦の方は子ども会に入会しない傾向にある）ため，仕事との両立が大変なようである。年休をとることもしばしばある上に，子どもがいるのに会議は平日の夜に行うことが大変である。これは，他の地域でも同じ傾向が見られ，有給休暇をとることで給料がその日の分もらえなかったり，平日の夜に会議を行うと，子どもを家で留守番をさせて会議に出なければならないので後ろめたい思いをするなどの経験をされている方がいる。子ども会の役職は，会長１名，会計１名，公報１名，育成（主にキャンプ運営）１名，体育６名，文化４目名，学区事務局２名，公報１名，安全１名とたくさんの役職があるようだ。一緒に活動をされている方とは図書ボランティア PTA

で共に活動することがある。子ども会以外の地域の活動は，町内会の活動を行っている。

地域の施設を活かした活動は，公民館祭りでの出店や舞台発表，学校の PTA 祭りでの舞台発表である。町内会と連携した子ども会の活動は，「盆踊り」,「秋祭り」,「町民運動会」,「スポーツ大会」,「グラウンドゴルフ大会」,以前は「農園」もあった。他の地域とは変わっている行事は，文化祭のコンクール形式で，以前は農園である。他には,「新入生歓送迎会」,「校庭・側溝大掃除」,「ジュニアリーダー研修」,「野外映画会」,「江波の火祭り（夏祭り)」,「市民スポレク大会」,「三世代交流フェスティバル」,「とんど祭り」,「囲碁・将棋大会」,「お楽しみ会」,「キャンプ」,「敬老会」,「カレー作り大会」,「新年互礼会」,「亥の子祭り」,「公園掃除」,「プール開放」,「ボーリング大会」,「バザー」,「青少年健全育成パレード」,「ふれあいの旅」などである。伝統文化を活かした活動として,「秋祭り」や「盆踊り」があげられる。

10 年前と現在で子ども会の活動内容で変わったことは，球技大会の縮小（チームが組めなくなった）ことや，単位子ども会の数が減ったことである。10 年前と現在の子どもで変わっていることは，子ども会に入会している児童の中に「ソフトボールだけ参加」のように子ども会活動を習い事感覚で行っている子どもが増えていることである。

舟入学区の子ども会は教育の場として，異年齢集団の形成や保護者の連携，町内会の活性化と連携（町内会が子どもの安全見守り活動をする）に役立っている。子ども会に入会している児童は，高齢者から乳幼児まで，多くの人と一緒に活動をする機会を得られる。また，文化祭や球技大会の練習を通し，教えあい，お互いに技能を修得し高めあうことでコミュニケーション能力の向上につながっていると実感できているようで

ある。

第7節 南区大州学区子ども会の現状

大州学区は，年少人口比率と高齢人口比率がやや低く，生産年齢人口比率がやや高い。単位子ども会は4個ある。

2007（平成19）年5月1日現在大州小学校児童数263人に対し，2008（平成20年）3月31日現在子ども会安全会加入数が252人である。加入率は，95.8%と高い。

単位子ども会の役員に2､3年前になったことがある方にアンケート調査とインタビュー調査を行った。この学区は昨年大規模なマンションができ,子どもが小学生や中学生の30代くらいの若い人が入ってきている地域である。それもあり，学区内の子どもは増えており，参加者も増えている。役員を受けたのは，マンション内で当番としてまわってきて，断れなかったからである。仕事などで集まりに参加できなくても大丈夫で，そういった面では寛大である。自分ができる仕事をやれば良いという雰囲気のようだ｡子どもが学区内の小学校に通っていないこともあり，子ども会で一緒に活動されている方と他の場での交流はない｡ちなみに，この学区で会長はくじ引きで決まる。副会長は経験者がなり，会長を支える役目を担う。

地域の施設を使った活動は，公民館や児童館では文化祭，学校での活動は体育館を借りて,「110番スタンプラリー」をしたり，小学校のグラウンドを借りてソフトボールをしたりする。他に,「海水浴」や「みかん狩り」などがある。特徴的な活動は,「大運動会」,「盆踊り大会」「美化

作業」,「学区での反省会」,「かっぱ祭り」,「秋祭り」,「文化祭」,「亥の子祭り」,「110 番スタンプラリー」,「6 年生お別れ会」,「ジュニアリーダー研修会」,「夏レクレーション」,「冬季スポーツフェスタ」,「おやこまつり」などがある。

10 年前と比べて，子どもはあまり外で遊ばなくなったり，ゲームをしたりする子どもが多い。

地域の教育の場として,子ども会は子どもを守る役割を果たしている。110 番ラリーといった安全教育や子ども会活動で学区の子どもや親の顔を知ることで，不審者対策ができるからである。

第二の新興団地は，高陽ニュータウン（落合東，真亀，亀崎，倉掛）と，口田東，三入東を取り上げる。ちなみに，安佐北区は全体の小学校児童数が，2007（平成 19）年 5 月 1 日現在 9086 人に対し，2008（平成 20 年)3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 6669 人で,加入率は 73.4%と他区よりも高い。安佐北区は，広島市でもむかしから子ども会活動に熱心な地域で，町子連の組織が強い地域であると広島市子ども会連合会の事務の方が述べていた。

第８節　安佐北区高陽ニュータウン学区子ども会の現状

ｉ．安佐北区落合東学区子ども会の現状

落合東学区は，年少人口比率・生産年齢人口比率・高齢人口比率どれもやや低い。単子子ども会は 6 個ある。

2007(平成 19)年 5 月 1 日現在落合東小学校児童数 565 人に対し,2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 346 人である。加

入率は，61.2%である。

落合東学区は,学区子ども会育成協議会の副会長 1 年と平成 21 年度育成指導員 1 年をやっておられた方にアンケート調査とインタビュー調査を行った。役職になったきっかけは，3 年前に PTA 役員をしたことである。それまでは子ども会も PTA 活動も全く活動せず奥さんに任せていた。PTA 役員をしたことで，子ども会（育成会）や自治会等の役員もすることになった。くじでなったものも頼まれてなったものもある。育成指導員として，9 単位子ども会の行事をとり行っている。子ども会以外は，自治会の会長や町内会・自治会連合会の書記，小学校おやじの会の活動をされており，地域の活動に熱心な方である。はじめは、おやじの会に名前だけ貸して欲しいと頼まれて、名前を貸したのがきっかけで、そこから色々な地域活動を任されるようになっていった。子ども会の仕事で大変なのは，仕事があるため時間的な面での苦労である。子ども会だけなら活動自体は楽しいようだが，他の役員もしているため，時間をとられてしまうことが大変である。また、活動のために仕事を休み、有給休暇をとることが年何回かあり、その分給料が減ったり、地域の方々と連絡をとるために携帯電話代もかかったり、金銭面での負担もある。

子ども会活動は，子ども会部長 1 名，会計 1 名，体育部 2 名，文化研修部 2 名，育成会会長 1 名，副会長 2 名，会計 1 名，書記 1 名，体育部長 1 名，文化研修部長 1 名，校庭開放委員 1 名，指導員 3 名と一緒に活動している。子ども会以外でもこの役員の方々と活動することもある。子ども会の話し合いは，どうしてもはずせない用事がある場合は，事前に連絡しておけばよい。

地域の施設を利用する子ども会活動は,公民館祭り,また学校では春・秋の球技大会や春・秋のおたのしみたい会（プチ運動会，映画会）等を

行っている。他には，学区をこえて高陽町子ども会としてキャンプを行っている。町内会と連携した子ども会の活動は，秋祭りである。むかしは子ども会主催だったが，今は町内会主催で子ども会は子ども神輿を出している。他に特徴ある活動としては，子ども会ではないが地域の方が希望する子どもに対して神楽を教えている。特徴的な子ども会の活動は，「けやき祭り」,「プール開放」,「サマーレクリエーション」,「サマースクール」,「年少リーダー研修」,「写生大会」,「ふれあい活動」,「秋のお楽しみ会」,「冬のお楽しみ会」,「高陽ニュータウン球技大会」,「子どもフェスタ」,「夏祭り」,「秋祭り」,「高陽花火祭り」,「ウォークラリー」,「公園清掃」,「グランドゴルフ」,「電話帳配布」,「とんど祭り」,「将棋大会」などがある。

10 年前と現在で子ども会の活動内容が変わってきたことは,10 年前は子どももたくさんいて，子ども会活動もスムーズに運んでいたが，現在は行事をするにも参加者を集めることが大変である。10 年前と現在では子どもは，ゲームをする子どもが増えた。しかし，今でも外で遊ぶ子どもは遊んでいるようである。

落合東学区の教育の場として子ども会は，学校と地域と子どもたち・保護者のパイプ役が出来るような組織になることが求められている。現在，子ども会活動は子どもたちが団体行動を学ぶことに役立っている。

ⅱ．安佐北区真亀学区子ども会の現状

真亀学区は，年少人口比率と高齢人口比率はやや高く，生産年齢人口比率がやや低い。単位子ども会は 9 個ある。そして，2007（平成 19）年 5 月 1 日現在真亀小学校児童数 519 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 306 人である。加入率は，59%である。

この学区の子どもは減少している。しかし，2008（平成 20）年度から，子ども会加入は任意だったものを，小学生はほぼ強制とした。これは，加入者数を増やさないと行事が出来なくなることもあり，自治会会長と話し合い決めた。

この地域は 35 年前に出来た団地で，一番多い時は 1000 人程子どもがいた。県営住宅と一戸建てが建ち並んでおり，県営は人の出入りがあるが，一戸建てはずっと定住している

平成 21 年度真亀学区の育成指導員の方にアンケート調査とインタビュー調査を行った。育成指導員は 15 年間行っている。育成指導員をした経緯は，フットベースボールの指導しているからである。15 年間育成指導員を続けている理由は次に継ぐ人がいなかったからである。毎年育成指導員は球技の指導者がなっており，ソフトボールとフットベースボールの指導者から一人ずつ育成指導員となるという慣例が真亀学区ではある。ソフトは毎年変わっているが，フットベースボールはインタビューした方がずっと指導している。他にも，安佐北区子ども会連合会の活動に参加している。育成指導員の仕事として，球技を教えたり，キャンプをしたり，助言をしている。育成指導員を 15 年間やり続けているので，育成指導員の研修には行ってない。特に指導員を長くやっているため、どこに力をいれ、どこに力をぬけばよいのかという要領がわかっているので、育成指導員の仕事が負担になっているとは思っていない。

公民館や児童館を利用する子ども会活動は特にない。学校のグラウンドを利用することはある。町内会と連携した子ども会活動としては,「夏祭り」,「秋祭り」,「とんど」,「町内運動会」がある。子ども会の役員の成り手がいないため，負担を減らすために行事を少なくしている。特徴ある行事は,「お楽しみ会」,「まがめ大運動会」,「年少リーダー研修」,

「スタンプラリー」,「子どもフェスタ」,「秋祭り」,「もちつき大会」,「とんどまるち」,「写生大会」,「各単位子ども会での総会」,「バーベキュー」,「ハロウィンお楽しみ会」,「クリスマス会」,「お楽しみ会」,「歓送迎会」,「遠足」,「団地内清掃」,「秋祭りみこし作成」などがある。

10 年前に比べて現在は，多くの子ども達を集めて行う行事がなくなってきているとのことであった。

ⅲ． 安佐北区亀崎学区子ども会の現状

亀崎学区は，年少人口率はやや高く，生産年齢人口率と高齢人効率がやや低い。単位子ども会は 8 個ある。

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在亀崎小学校児童数 360 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 357 人である。加入率は,99.2%と高い。学区内の子どもの数はあまり変わらないのだが,加入数は少しずつ減っており,子ども会未加入者が少しずつ増えている。

亀崎子ども会会長にアンケート調査とインタビュー調査，育成指導員の方にインタビュー調査を行った。会長という役職についたのは，所属子ども会から育成会としてあがり，くじであたったからである。会長という役職の内容は，子ども会の統括，育成会の会長，主に，地域内外の会議の参加，各役員・子ども会への連絡・伝達，主催行事の責任者，各行事（地域，学校）への参加がある。子ども会の活動で大変なことは，子ども会活動は大切であるが，家事・子育て・仕事で日々の生活がとても忙しい中，子ども会活動を生活の中に組み込むことが難しいことである。子ども会育成活動は，10 人で行っている。

子ども会は施設を使った活動は特にない。そのかわり，それぞれの施

設の行事にお手伝いに行くことはある。町内会と連携した活動は,「町内会行事」,「運動会」,「夏祭り」,「秋祭り」など各単位でそれぞれ役割がきまっている。お祭りは町内会が主催で，子ども神輿を行っていたが，なくなった。特徴ある活動は,「ふれあい広場作り」,「育成指導者研修会」,「自治連合会大運動会」,「交通安全キャンペーン」,「フレッシュふれあい祭り」,「自主防災避難訓練」,「ジュニアリーダー,年少リーダー研修」,「公民館祭り」,「夏祭り」,「敬老会」,「子どもフェスタ」,「クリスマス会」,「とんど祭り」,「歓送迎会」,「ふれあい清掃」,「秋祭り」,「納涼大会」,「自治連合会大運動会」,「児童館祭り」,「植樹祭り」などがある。

10 年前と現在の子ども会活動の違いは，子ども会の活動は子どもが主ではなく，大人が考え，活動を子どもにさせていることである。10 年前と現在との子どもの変化は，習い事をしている子どもが多く，放課後も忙しいことである。

子ども会は，自主性と自律，社会性を育てる役割があるという意味で教育の場として活かされている。

インタビューをした育成指導員の方は 5 年間役職に就いている。この学区の育成指導員の仕事は，育成の仕事を手伝うことである。他にも，町子ども会連合会の月一回の定例会，学区の定例会に月 1 回出ている。育成指導員については，育成指導員が出来た当初とは環境が随分変化しているため，育成指導員の役割も変化が必要であると子ども会会長は感じている。

ⅳ． 安佐北区倉掛学区子ども会の現状

倉掛学区は，年少人口比率と生産年齢人口比率が低く，高齢人口比率が高い。単位子ども会は 2 個ある。

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在倉掛小学校児童数 241 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 135 人である。加入率は，56％である。2009（平成 21）年度は，地域の子ども 230 人に対し，子ども会加入者は 100 人で，加入率は 40％強であった。そして，2010（平成 22）年度より，全員加入を目指して活動中で，2010（平成 22）年度は約 190 人になる予定で，一気に加入率が増えるようである。学区内の子どもは減っており，学校も 1 学年 1 学級という状態である。

倉掛学区の平成 21 年度育成指導員の方にアンケートをお願いした。加入率が良くなかった理由は，昔と違って塾や習い事，サッカー等体協団体に参加している等環境の変化が大きいからである。また，子ども会に参加しない理由の一番は，保護者が役員をしたくない，二番が他の団体に加入していて行事に参加できないということである。

育成指導員という役職に就いたのは，前任者に頼まれたからである。仕事内容は，学区役員の相談役をしている。他に，高陽町子ども会連合会での活動，安佐北区子ども会連合会での活動，フットボールの監督もしている。子ども会の仕事で大変なことは特にないようであるが，ほとんど毎週土・日にフットの練習等の活動があるので，家の用事が出来ないということがある。子ども会活動を共に行っている役員は大きな活動だと 20 人，小さな活動だと 2～3 名で行っている。子ども会以外では一緒に活動することはない。育成指導員以外にも高校の PTA 活動を行っている。

子ども会の活動は，公民館や児童館の施設を利用することは，高陽町子ども会連合会での活動の時である。他に，学校では，「ソフトボール」，「フットベースボール」，「クリスマス会」，「ミニ運動会」等，子ども会の行事は主に学校で行っている。それ以外の施設の利用は，夏休みのサ

マーキャンプ（1 泊 4～5 年生対象）や春～夏にバスを貸し切って日帰りツアー（みろくの里，映画と食事，島根のアクアス等）を行っている。町内会と連携した子ども会活動は，「秋祭り」での神楽，「夏祭り」での宝探しとお菓子配りと飲物販売である。活動は，役員の負担軽減のため，スリムな活動内容となっている。伝統文化を活かした活動として「神楽」がある。諸木郷土芸能保存会からの依頼で神楽を伝承している。他に特徴ある活動として，「公民館祭り」，「子どもフェスタ」，「フレッシュふれあい広場」，「ジュニアリーダー研修」などがある。

倉掛学区では子ども会は地域で，自主性・協調性を養う場で，異年齢で交流する唯一の場として活用されている。地域の様々な大人と関わることで，顔をしってもらえたり，挨拶がしやすくなったりする。

第 9 節　安佐北区口田東学区子ども会の現状

口田東学区は，年少人口比率と生産年齢人口比率はやや低く，高齢人口比率はやや高い。単位子ども会は 4 個ある。戸建てが多くふるい約 30～40 年前に設立した団地である。

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在口田東小学校児童数 639 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 422 人である。加入率は，66％である。学区内の子どもは減少傾向にある。

平成 20 年度子ども会会長だった方にアンケートを行った。各単位子ども会によって異なるが，会長が所属している単位子ども会では，子ども一人につき一回役員をすることになり，くじ引きで会長になった。活動内容は，色々な会議にでることだった。子ども会の仕事で大変なことは，

役員の負担が大きいことである。定例会など夜の会議がほとんどのため，子どもを留守番させて出かけるということが心苦しかったようだ。

子ども会活動での施設利用は，単位子ども会では公民館を新入生の歓迎会などで利用し，育成では公民館祭りや親子ふれあいのつどいなどにバザー部として参加する。学校では，グラウンドや体育館で夏季球技大会（グラウンドゴルフ），冬季球技大会（スーパードッジ），子ども会のソフトボール，フットボールは定期的に練習で利用している。他には，スポーツセンターで「安佐北区子ども会連合会球技大会（スーパードッジボール）」，町内会との活動は，「夏祭り」，「秋祭り」，「お年寄りとの交流会」などがあり，自治会と一緒にすすめている。

他の単位子ども会は，団地が古いところと新しいところがあり，団地が新しい地域では，「バスツアー」や「工作」などを行っている。育成指導員は，5 年間されている方がずっと続けている。

第１０節　安佐北区三入東学区子ども会の現状

三入東学区は，年少人口比率と高齢人口比率がやや低く，生産年齢人口比率がやや高い。単位子ども会は 4 個ある。約 30 年前につくられた戸建てが多い。ふるい約 30～40 年前に設立した団地である。

2007(平成 19)年 5 月 1 日現在三入東小学校児童数 276 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 109 人である。加入率は，39.5%と低い。子どもの数は減少している。

平成 20 年度育成会会長と育成指導員をされている方にアンケート調査を行った。役職についたきっかけは，フットベースボールの指導者を

6 年行っていて，その流れで役職になることになった。役職の活動内容は，他団体の調整が主で，研修にも行く。子ども会活動の仕事の中で，他団体の調整（日程・内容等）事前協議が大変なようだ。共に活動している人は，育成会 10 名，連合子ども会 10 名である。一緒に活動している人とは，地域の他団体（青少協，地域ボランティア等）で共に活動することがある。子ども会以外の地域の活動は，青少年育成協議会，社会福祉協議会，公民館運営委員会等，地域の団体のほとんどにからんでいる。

地域施設を利用した活動として,「公民館祭り」,「公民館フェスティバル」がある。他にも「児童館クリーン作戦と焼き芋パーティ」がある。学校での活動はない。それ以外に,「可部町子ども会連合会のスポーツ大会や研修会」,「安佐北区子ども会連合会のスポーツ大会や研修会」,「三入・大林・三入東 3 学区合同ジュニアリーダー研修」がある。町内会と連携した活動として,「ふれあい運動会」,「親子ふれあいグランドゴルフ大会」,「秋祭り」,「とんど」がある。他の地域と変わった行事として，4 年前に子ども会で廃品回収を実施し，その収益で，3 月にバスレクを実施（6 年生を送る会を含む)。サファリやアクアスに行っている。地域社会の伝統文化を活かした子ども会の活動は,「秋祭り」で神輿をかつぐことや「とんど」を 6 年生限定で竹取りから活動することである。

三入東学区の子ども会は，家庭，学校でできない異年齢の集団活動が出来る教育の場として活用されている。家庭で少子化が進み，学校では主に同級生と生活するため，異年齢の活動はなかなかないため大事である。また，地域の子どもたちの顔がわかるという点で子ども会活動は重要である。

第１１節　安佐北区狩小川学区子ども会の現状

狩小川学区は，年少人口比率と生産年齢人口比率がやや低く，高齢人口比率がやや高い。単位子ども会は 9 個ある。そして，2007（平成 19）年 5 月 1 日現在三入東小学校児童数 247 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 241 人である。加入率は，97.6％と高い。子どもの数は減少している。

本地域の子ども会に関しては活動報告書の分析によって特徴を把握する。当該子ども会の特徴ある活動として，「ジュニアリーダー研修会」，「一泊研修」，「狩小川子どもフェスタ」，「子どもフェスタ in 高陽」，「写生大会」，「オラフク工場見学をするレクリエーション」，「亥の子祭り」，「歓送迎会」，「盆踊り」，「秋祭り」，「亥の子」，「草抜き」，「納涼祭」，「敬老会（手紙）」，「門松づくり」，「太田川クリーンキャンペーン」，「クリスマス会」，「お楽しみ会」，「宮掃除」，「遠足」，「清掃活動」，「運動会」，「一日親子旅行」，「とんど」など熱心に活動していることがわかる。単位子ども会はたくさんあるが,それぞれの単位子ども会の人数は 30～50 人で小さな団体であるのがわかる。このことから活動しやすいため，加入率も高いと予測できる。

第１２節　安佐北区可部学区子ども会の現状

可部学区は，年少人口比率がやや高く，生産年齢人口比率がと高齢人

口比率はやや低い。21 単位子ども会と単位子ども会が多くある。

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在可部小学校児童数 683 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 587 人である。加入率は，85.9％と高い。子どもの人数は少しずつ減っているが，ほとんど変化がない。

可部学区は，平成 20 年度会長（綾ケ谷）と平成 20，21 年度育成指導員 2 名（城表，東原）にアンケート調査とインタビュー調査を行った。会長になったきっかけは，単位子ども会（学区）の育成会長になり，会長会（学区）にてクジで決まった。子ども会の仕事で大変なことは，少人数の話し合いは楽に出来るが，人数が多いのでまとまりがなく，いつも会議や行事で忙しく書類作成も大変だったことである。一緒に活動している人は町内会の活動も一緒にしている。子ども会は町内会と一緒に活動することが多い。他に地域の活動として学校のクラス役員も行っている。

平成 20 年度，21 年度の育成指導員の話によると、指導員は 2 年交代でちょうど入れ替わるようにしてある。つまり 1 年目の人と 2 年目の人が一人ずついるようにしている。仕事内容は、子ども会のお世話と年 3 回の研修である。内容は、携帯の使い方の講習などでとても役に立つものだった。お金がもらえることについては、お金をもらうと責任が伴うのでもらいたくない。他の人と活動は一緒なのに自分だけもらうのは後ろめたい，お金がもらえるからといって決してやりたい仕事とは思えない程大変。変わって下さる方がいればすぐ変わりたい。と述べていた。

公民館や児童館での子ども会活動は，夏休みや冬休みの「工作教室」，「スーパードッジ大会」，「公民館祭り」への参加がある。学校を利用しての子ども会活動は，グラウンドを使用して，「ソフトボール」，「フット

ボール」,「飯盒（カレー作り）」,「球技大会」などである。それ以外にも，学区全体で「夏季・冬季球技大会」など，単位子ども会で「ボーリング」、「映画」などへ行く地域もある。町内会と連携した活動は，「秋祭り」，「とんど」である。伝統文化は、「盆踊り大会」でその時使う唄が綾ヶ谷学区独自のもので、踊りも当日までに練習する。学校施設はグラウンド、体育館を使用させてもらうのみで、球技大会への参加を生徒に声かけしている。また、東原学区では、「お地蔵さん祭り」が行われている。

10 年前にはフットボールの学区代表をつくって対戦していたのが，現在では活動する子どもが少ないため,学区代表で集まって活動している。10 年前と現在では，親世代の変化と共に子どもも同様に変化している。外遊びが少なくなかった。これは遊ぶ場所がなくなったことも関係している。子ども同士や大人との付き合い方が下手な子どもが多い。また、塾などで忙しい子どもが多い。

子ども会は教育の場として，スポーツ大会の参加のきっかけになったり、町内会の方々と関わりをもつ良い機会となっている。また、年上，年下の子どもと上手に遊んだりすること，大人になっても上下関係など役立つ，人間関係の作り方が活動を通して学べる場所としてつくられるべきであるが，いまの子ども会は，つながりが浅く，望んで子ども会に入会している子どもは少ない。学区の強制的なことや，子ども会に入会していないと出来ないスポーツ（ソフト，フット）のために入会している家庭もある。行事にすすんで参加しない親の元で，友好的な子どもは育たない。全ての家がそうではないが，親が意識を変えていく必要がある。また、子ども会の教育の場としての活動は、子ども会だけでは難しい。

また、可部（城表学区）では興味深い問題について話を聞いた。三入

学区と可部学区の境界に住んでいる方の話である。三入学区に住んでいるが、小学校区の関係で可部小学校に通っている家庭が、友達が子ども会に入っているという理由で可部学区の中の子ども会に入りたいと申し出ても、町内会が違うから入れない。

牧（2005）は、山村地域では，ほとんどの小学校が昭和前半の比較的古い時期に創立され，町村単位がそのまま校区として設定されている学区も多いことから，地域と学校との結びつきが強いと考えられ，そのことが高い加入率と関係していると思われる。と述べている。

このことからも、道路事情や通学事情、小学校の人数配分の問題など難しい問題だということは承知しているが、やはりこれらの境界が同じでないとこういった問題はさけられないだろう。

第１３節　安佐北区可部南学区子ども会の現状

可部南学区は，年少人口比率・生産年齢人口比率・高齢人口比率どれもやや低い。単位子ども会は 5 個ある。

2007(平成 19)年 5 月 1 日現在可部南小学校児童数 445 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 359 人である。加入率は，80.7%と高い。学区の子どもの数は減っている。

平成 20 年度子ども会会長に話を聞いた。役職に就いたきっかけは、最初はお手伝いだったが、その後指導員として活動するようになった。子ども会の仕事で大変なのは、広島市の補助金をもらう為に書類の作成や安全会加入のための事務手続きを行うことである。一緒に子ども会を活動する人として、育成会の役員として 15 人、ソフト・フットの練習など

で5、6人と共同で参加・運営している。その人たちと地域の他の会議などで一緒に活動することはある。この会長さんは、青少協や補助協助員、小・中学校の協力者会員他など地域の様々な役割を担ってきたことが分かる。

公民館や児童館では、公民館祭りに参加（役員）したり、ジュニアリーダー研修を行ったりしている。学校での活動はない。他には、男子はソフトボール、女子はフットベースボール、男女ともでスーパードッジボールを行ったり、町内会と連携して「清掃活動」をしたり「学区体協の運動会」への参加、「とんど」などの行事を活動している。

「飯盒炊爨」,「サマースクール」,「平和公園清掃」,「広島・長崎児童生徒平和のつどい」,「ウィンタースクール」,「マラソン大会」,「レクリエーション」,「胡祭り」,「夜回り」,「文化祭出展」,「住民運動会」,「夏休み工作教室」,「プール開放」,「除夜の鐘をつく会」,

10年前と現在では、保護者の意識が異なっている。他人事の様であった一から十まで説明しないと理解できなかったりする。10年前と現在では、子どもを取り巻く環境が何でも便利になったり、物が豊富になっている。何でも物を与えられるすぎで、態度や言葉使いを気をつける必要がある。

子ども会は子どもへの教育を行う地域の場として、異年齢の子ども達が一つの行事などで関わり合うこと役割があるとは思うが、そのことに対して堅苦しく考えながら活動はしていない。

第１４節　安佐北区井原学区子ども会の現状

井原学区は，年少人口比率・生産年齢人口比率はやや低く，高齢人口比率はやや高い。子ども会は 4 個ある。

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在井原小学校児童数 38 人に対し，2008（平成 20 年）3 月 31 日現在子ども会安全会加入数が 39 人である。加入率は，102.6％と全員加入であることがわかる。

平成 21 年度子ども会会長をされている方にインタビューをした。会長になったのは、他にやる人がいなかったため、仕方なく引き受けたようである。子ども会での仕事は子ども会の統括で、活動で大変なのは時間をとられることである。一緒に活動しているのは、副会長 4 人、事務局 1 人、会計 1 人、安全 1 人、指導員 2 人、ソフトバレー監督 1 人、ソフトバレーコーチ 6 人、広報 2 人、顧問 1 人、監査 2 人、単位子ども会理事 4 人である。他地域に比べ役職が多いこと。ソフトバレーが強い地域でもあり、スポーツ活動に熱心な地域であることがわかる。

子ども会活動は学校で、「ソフトバレーの練習」、「ティーボール」、「グラウンドゴルフ」、「日食観察」などを行う。他にも、ソフトバレー大会出場のために遠出したり、サマーキャンプにいったりもする。町内会と連携した活動は「夏祭り」である。特徴ある活動は「カヌー体験」である。これは広島の他地域の子ども会でカヌー体験をあげた子ども会はないため、大変特徴的だといえる。他にも、「体験行事」や「さよなら会」、「写生大会」、「さくらまつり」などの行事も行っている。

この地域では、子ども会で教育的な活動は特にしていないが、他団体が行っている日食観察を行ったことがある。

第１５節　各調査地域の比較・分析

ｉ．　子ども会の加入率について

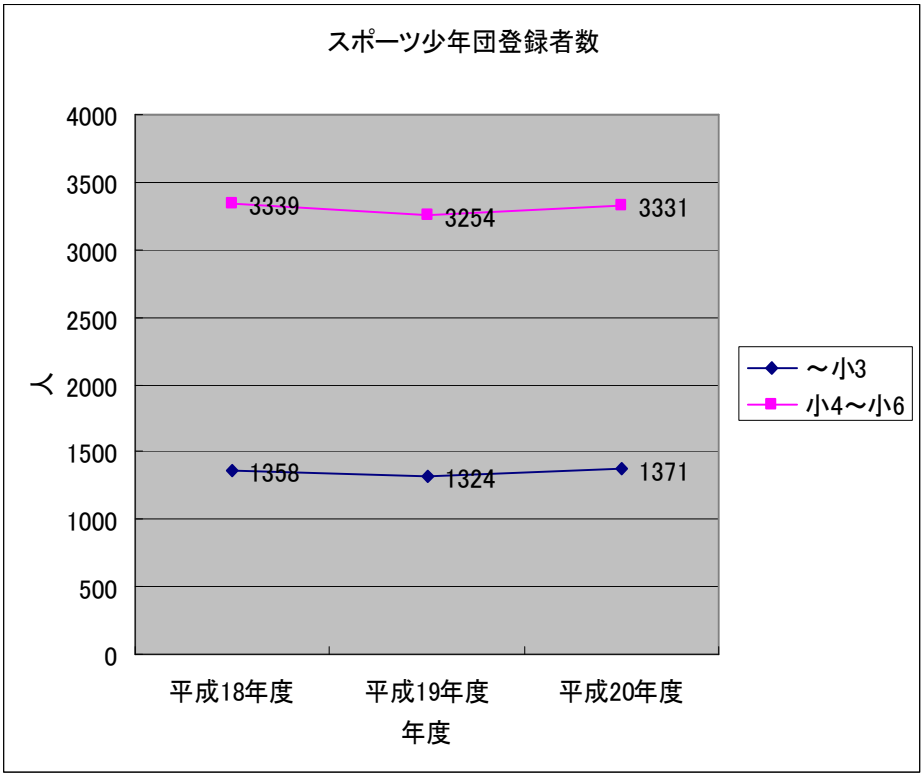
加入率だけを比較すると、区として加入率が高いからといって全ての学校区で加入率が高いわけではないことがわかる。特に中区は明確に違いが出ている。基町、袋町は独自の考え方から加入率が 100％であるのに比べて、同じ中区でも舟入学区は 32.1％とかなりの差がついている。このことから、多くの子ども会が子どもの数が減少傾向にある上に、加入率も低くなっている。その中で、この傾向に歯止めをかけようと行動をしている地域かそうでない地域かによって加入率は異なってくるのではないだろうか。他にも、新興団地である高陽学区の中でも加入率が100％近い地域は、子ども会加入率が減少してきたために、地域の活動に支障が出てくると判断し、自治会と子ども会が協力体制をとり、加入率をあげる活動をしている。このような活動を行わないと、現在の加入率減少の流れは食い止められない。

新旧の住民が混在している地域である可部学区は、10 年間ほど前から子ども会加入率は良い方で、今でもその傾向が続いている。10 年前は登校班に入るためには子ども会に入らなければならないという決まりがあったこともあり、加入率が高かった。しかし、最近はそういった決まりがないものの、お祭りの参加人数が集まる子ども会は加入率も保っているようである。子ども会加入率が悪い地域によっては、新しくアパートに入ってくる住民には必ず子ども会に加入するという決まりがある地域もある。

先程述べたような、加入率減少を食い止める活動を行っている地域にインタビュー調査に行くと、保護者世代だけではなく少し上の世代の自

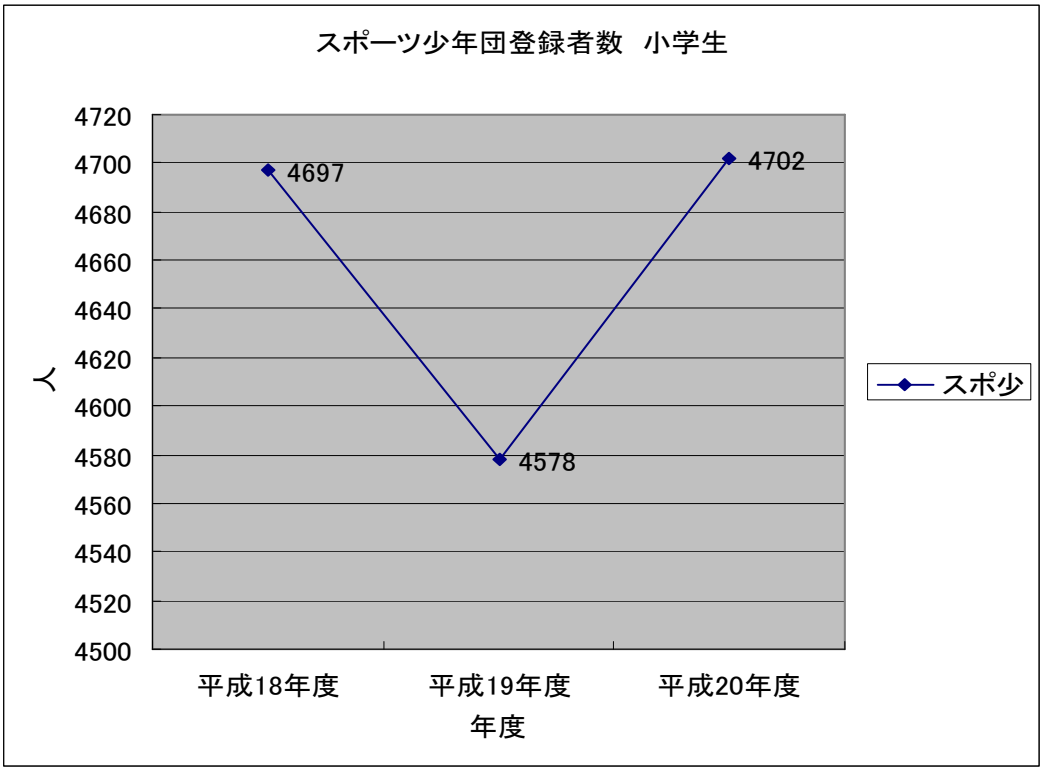
分の子どもは子ども会には入っていない世代も共に子ども会活動していたように感じる。このように、保護者世代だけで子ども会を運営していくというのは時間的にも精神的にも負担であり、働き盛りの年齢でもあることもあり、保護者世代だけの活動は難しい。そこで、リタイアして時間に比較的余裕がある高齢者の方々が活動に協力してくれると随分保護者の負担が減るのではないだろうか。

そして、どこの地域でも、高学年になると塾やスポーツ少年団、習い事などを中心に活動するようになり、子ども会活動に参加しなくなる。以下ではこの点について検討する。

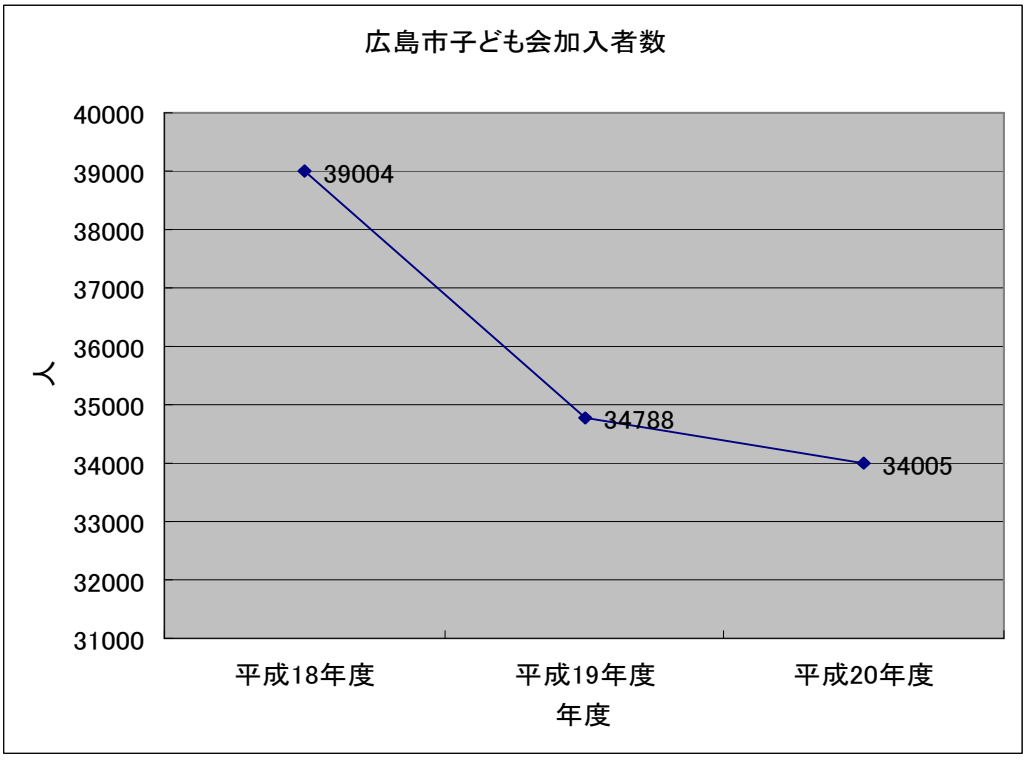


図Ⅳ－5　広島市スポーツ少年団登録者（秋元作成）

図Ⅳ－5をみると、ほぼ横ばいに推移していることがわかる。



図Ⅳ－6　広島市スポーツ少年団登録者数（秋元作成）

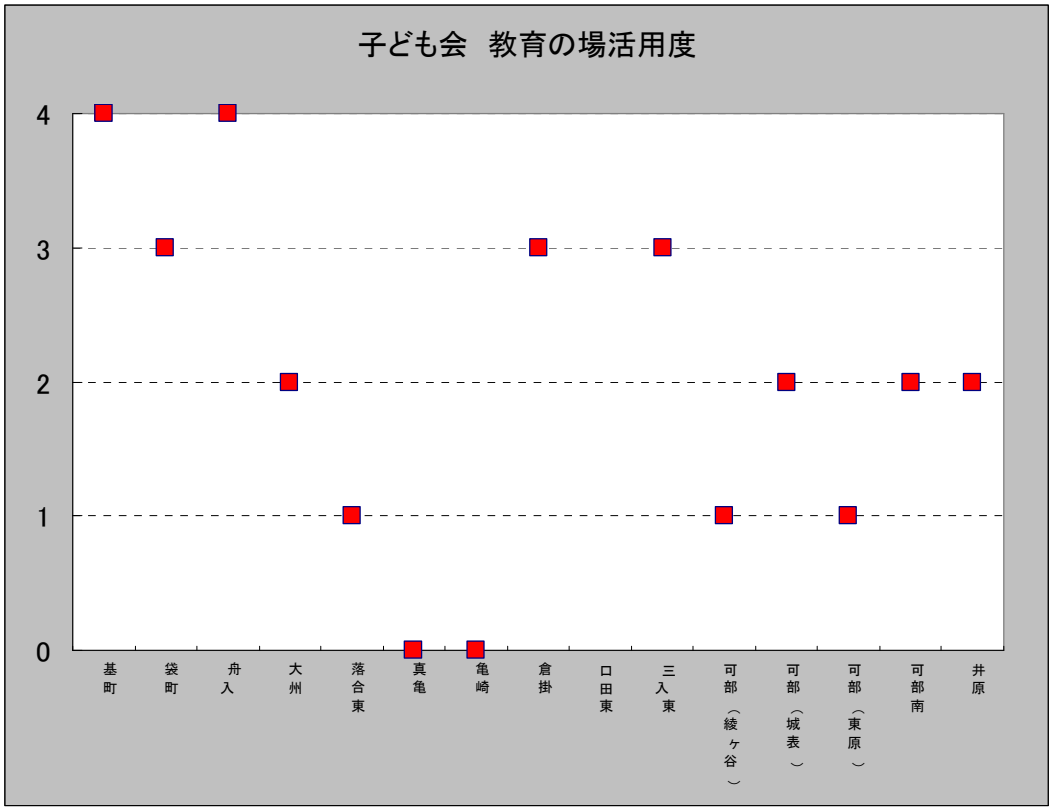


図Ⅳ－7　広島市子ども会加入者数（秋元作成）

図Ⅳ－6、図Ⅳ－7をみると、スポーツ少年団は登録者数が横ばいなのに対し，子ども会加入者数は年々減少していることがわかる。つまり、子ども会とスポーツ少年団は参加の減少率が違う。スポーツ少年団の活動を中心に行い、子ども会活動をおこなわなくなるというインタビュー調査の結果が統計からも読み取れる。

ⅱ．学区の教育活動の差について

広島市子ども会連合会（2006）は，子ども会の教育活動としてのあり方について，第一に，幼少時より人と人との交流を，上級生と下級生が一緒になって遊ぶことで体験し，家庭や学校では学ぶことのない社会性を習得する役割。第二に，子ども会活動は子どもを仲介とした育成者の活動，子どもを育てる活動の場であり，育成者も成長できる場としての役割。第三に子ども会活動を通してコミュニティを活性化する役割，また，若い保護者にとって子ども会活動は地域活動の入門であるという，三つの子ども会の役割があると述べている。第一の考え方は多くの子ども会役員の方々も共通の見解を述べている。次に多く述べられているのが，第三である。地域の人々と顔見知りになる良いきっかけと考えている人がいた。第二にあげられている、育成者も成長できる場所であるという考え方はあまりいなかった。



図Ⅲ－8　子ども会教育の場活用度（秋元作成）

図Ⅲ－8 は各学区子ども会にとったアンケートの回答を元に作成した。子ども会は子どもへの教育の場として活用されていると思うか？という質問に対しての回答を示している。4 がほとんど活用されている。3 がある程度活用されている。2 が少し活用されている。1 がどちらともいえない。0 が全く活用されていないである。この図をみると、旧市街地は子どもの教育の場として子ども会が活用されていると感じている地域が多い。一方で新興団地は活用されていると感じている地域と感じられていない地域が二分化している。新旧住民が混在しているまちは、少し活用されていると感じている地域が多い。このように、子どもへの教育は地域差があることがわかる。

活用されていないという地域のコメントをみると、活用されるべきだ

と思うが活用しきれていないという課題が書かれていることが多かった。

このことから、地域的条件もあてはまる部分もあるが、それ以外に強く関与しているのが、その地域に住む住人の熱心さや問題意識であることがインタビュー調査を通して明らかになった。

---

[1] 森川洋（1985）：広島市の地理的特性．広島市編：『広島新史　地理編』中本本店，p.8.

[2] 森川洋（1985）：広島市の地理的特性．広島市編：『広島新史　地理編』中本本店，p.23.

[3] 森川洋（1985）：広島市の地理的特性．広島市編：『広島新史　地理編』中本本店，pp.32－pp.35.
http://db1.pref.hiroshima.jp/Folder01/Frame01.htm

[4] 図Ⅲ－1，図Ⅲ－2，図Ⅲ－3を参考に分析。4分類しているものを上から，高い，やや高い，やや低い，低いと記述している。他地域も同様に分析している。

[5] 加入率については，幼児や保護者等の地域ごとの人数を把握することが困難なため，子ども会の主な活動者である小学生の児童数と加入数を便宜上分析に使うこととする。これは全ての地域にあてはまる。

第Ⅳ章　東広島市子ども会の現状

第１節　東広島市の概観

東広島市は，1974（昭和 49）年 4 月 20 日，賀茂郡内の西条町，八本松町，志和町，高屋町の 4 町が合併し，広島県内で 12 番目に誕生した市である。この間に，「人間と自然の調和のとれた学園都市」を目指して，賀茂学園都市建設，広島中央テクノポリス建設の 2 大プロジェクトにより，社会基盤や産業基盤の整備も進んだ。

そして，2005（平成 17）年 2 月 7 日に，黒瀬町，福富町，豊栄町，河内町及び安芸津町と合併し，新しい東広島市としてさらなる発展に向けてスタートした。平成合併後の東広島市は人口約 178,000 人，面積は約 635k ㎡と広島県の約 7.5％を占める広いエリアを有する広島県中央地域の中核都市となっている。東広島市のまちづくりの基本となる新東広島市建設計画では，東広島市の都市像を「未来にはばたく国際学術研究都市」と定め，東広島市の多彩な個性を活かしたまちづくりを推進するための基本目標として，「豊かな自然環境・文化・歴史を活かしたまちづくり」，「国際・学術・技術・研究機能を活かしたまちづくり」，「県央の交通拠点性を活かしたまちづくり」を掲げ，住民福祉の向上はもとより，新東広島市の一体性の速やかな確立と均衡ある発展を図ることを目的としている[1]。と述べている。

第２節　東広島市子ども会連合会の役割

東広島市には 21 単位子ども会ある。この 21 単位子ども会は旧東広島市で，東広島市子ども会連合会に加入している子ども会の数である。東

広島市子ども会には加入していないが，独自で活動している子ども会も存在している。

2005（平成 17）年 2 月 7 日，旧東広島市，黒瀬町，福富町，豊栄町，河内町，安芸津町が合併し，東広島市となった。しかし，旧東広島市以外で新しく東広島市子ども会連合会に加入したのは,黒瀬町だけである。その黒瀬町も，東広島市子ども会連合会に加入はしているものの，実際の活動は黒瀬町独自で行っており，子ども会活動に関しては東広島市子ども会連合会とは別に活動している。

東広島市の子ども会連合会は，単独組織である。広島市子ども会連合会は，全国子ども会連合会に所属し会員となっており，全国子ども会連合会の傘下に広島市子ども会が存在している。広島市子ども会連合会のように会員となるためには，上納金を納めなければならない。東広島市子ども会連合会は，過去に全国子ども会連合会に所属していたものの，上納金を納めるお金がかかるので，約 5～10 年前に脱退した。脱退すると，全国子ども会連合会が運営している安全会には入れない。そこで，東広島市子ども会連合会で独自に保険業務を行い，こども 1 人あたり年 200 円を徴収して貯めておき，その貯めたお金から怪我をした子どもに保険を払っていた。保険内容などは，民間の保険会社の基準を参考にした。しかし，3 年前に国からの指導が入った。これは，東広島市子ども会が保険業務を行っている専門機関ではないからである。独自に保険業務を行っている時，会員から集めたお金はかなりの額が貯まっていた。これは集めたお金に対して，怪我をした子どもに支払うお金がそれほど多くないからである。もし，東広島子ども会連合会がなくなってしまった場合，貯めておいた多額のお金をどうするのかという問題が出るために，東広島子ども会の独自の保険業務に国からの指導がはいったのであ

る。指導がはいった後は，子どもたちは民間の保険会社の保険に加入している。独自に保険業務をしていた時に貯まったお金はどう利用しているのだろうか。これは，旧東広島市の子ども会に加入している人の保険料に関しては，貯めていたお金から民間会社に保険料を払っている。よって，現在子ども会に加入している人は安全会への保険料は支払っていない。このように，貯まったお金を還元している。

東広島市子ども会の平成 21 年の活動は，表Ⅳ－1 に示す。

日にち	行事内容
2009（平成 21）年 3 月 1 日	総会
2009（平成 21）年 6 月 20 日	安全教育（9 団体参加）
2009（平成 21）年 8 月 26 日	広島大学児童文化研究会
2009（平成 21）年 9 月 27 日	生涯学習フェスティバル事前準備 安全教育（2 団体参加）
2009（平成 21）年 11 月 1 日	生涯学習フェスティバル
2009（平成 21）年 12 月 12，19 日	クリスマス会
2010（平成 22）年 2 月 13，20 日	お別れ会

表Ⅳ－1　東広島市子ども会連合会活動内容（平成 21 年～平成 22 年）

（秋元作成）

行事の内容について説明する。安全教育というのは,「みつけたキケンくん」という冊子を使って，KYT と呼ばれる危険予想トレーニングを行う活動を各子ども会で行うように，東広島市子ども会連合会が指導する活動である。この「みつけたキケンくん」という冊子は，全国子ども会連合会が作成販売しているものを購入している。河原で遊んでいる子ど

もたちの絵,二段ベッドで遊んでいる子どもの絵など様々な場面があり,その絵を見て，危ない行動をしている子，危ないものを持っている子などを見つけ，どうすれば良いか考えるという活動である。この活動は，子どもの興味も引くという点でも良くできた教材である。この教材の使い方などを安全会で単位子ども会の役員に教授し，各単位子ども会で使用するように指導している。

生涯フェスティバルでは，紙飛行機作り（参加人数 78 人），竹とんぼ作り（参加人数 30 人），フラパン作り（参加人数 132 人）などが行われた。広島大学の学生と連携し,東広島市子ども会連合会が運営を行った。このように，地域の力を活かしていることがわかる。

東広島市子ども会連合会には 675 世帯加入している。子ども会の加入人数については，東広島市子ども連合会では把握していない。これは，安全会加入は世帯で計算しているので，個別のデータをとっていないからである。広島市子ども会連合会は，各単位子ども会の人数データを集計していなかったものの，安全会加入者の人数把握はされている。安全会には子ども会会員のほぼ全員が加入しているため，各学校区の子ども会会員の人数をおおよそではあるが把握することができた。しかし，東広島市の各単位子ども会は,民間保険会社の安全会に加入しているため,東広島市子ども会連合会では人数を把握していないが，世帯数は把握できている。

次に，東広島市子ども会連合会の会計の運営面について述べる。会計は東広島市子ども会連合会へは東広島市から補助金が出ている。それと共に，子ども一人に対し年間 100 円を各家庭が東広島市子ども会連合会に負担している。しかし，東広島市の補助金だけで活動していけるだけの補助金をもらっているので，将来的には一人何円ではなく，各単位子

ども会で何円という制度にし，子ども会加入者の金銭的負担を減らしたいと現会長は聞き取り調査では答えていた。もし将来そうなると，保険加入と東広島市子ども会連合会への支払いは不要になり，各単位子ども会への会費のみだけで済むようになる。そうなると，金銭的負担が軽くなり，子ども会にも入会しやすくなるだろう。

第３節　東広島市各調査地域の概観

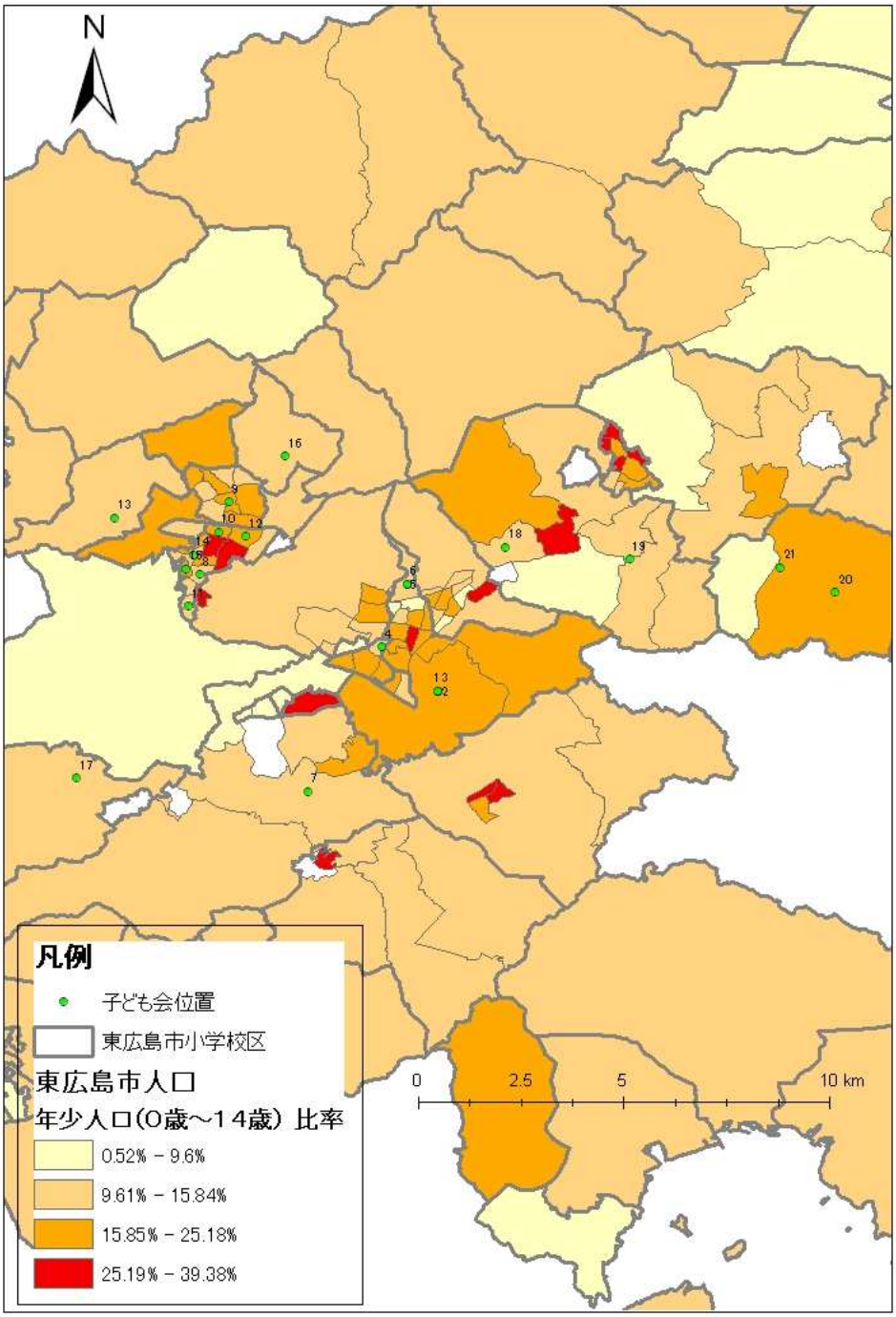
東広島市連合会に所属している 21 の子ども会が立地する地域について，概観する。21 子ども会の場所，住所は表Ⅳ－2 の通りである。

番号	子ども会名	学区	住所
1	上戸	西条	広島県東広島市西条町御薗宇
2	才ヶ迫	西条	広島県東広島市西条町御薗宇
3	円城寺北	西条	広島県東広島市西条町御薗宇
4	高台	西条	広島県東広島市西条中央1丁目
5	テクノタウン	板城	広島県東広島市西条町西大沢1丁目
6	西大沢	板城	広島県東広島市西条町西大沢1丁目
7	三升原若葉	板城	広島県東広島市西条町田口
8	七ツ池	八本松	広島県東広島市八本松南4丁目
9	松風	八本松	広島県東広島市八本松飯田
10	下西	八本松	広島県東広島市八本松東6丁目
11	日興苑	八本松	広島県東広島市八本松南7丁目
12	下東	八本松	広島県東広島市八本松東3丁目
13	宗吉	八本松	広島県東広島市八本松町宗吉
14	向東	八本松	広島県東広島市八本松南2丁目
15	向西	八本松	広島県東広島市八本松南5丁目
16	正力北	川上	広島県東広島市八本松町正力
17	吉川	吉川	広島県東広島市八本松町吉川
18	檜山	高屋西	広島県東広島市高屋町檜山
19	郷一本松	高屋西	広島県東広島市高屋町卿
20	おおぞら台	小谷	広島県東広島市高屋町小谷
21	パークタウン	小谷	広島県東広島市高屋町小谷

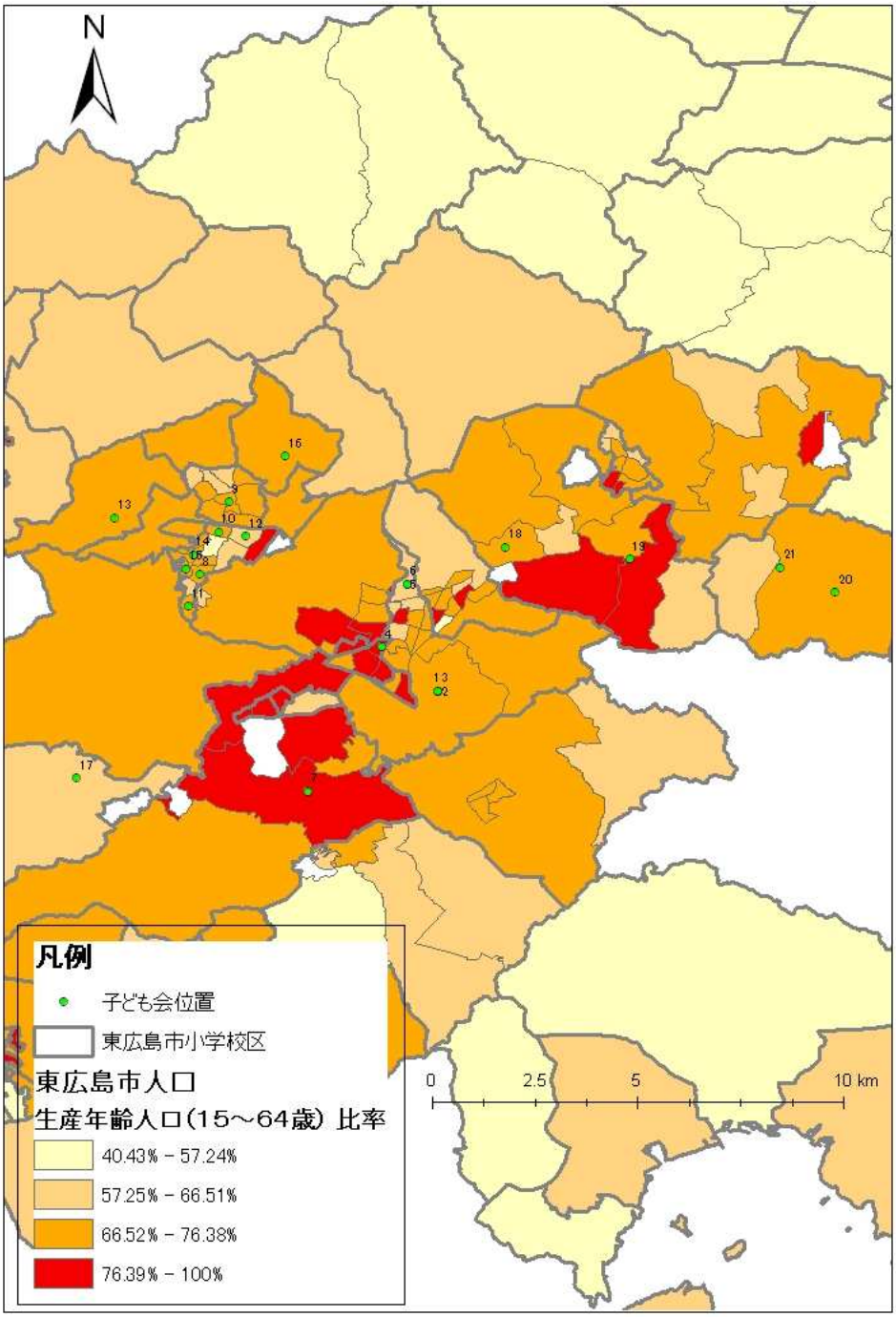
表Ⅳ－2　東広島市子ども会連合会所属子ども会（秋元作成）

21単位子ども会のうち,アンケートが返ってきた子ども会は,1上戸,2.才ヶ迫，3.円城寺北，5.テクノタウン，7.三升原若葉，8.七ツ池，9松風，10下西，11日興苑，12下東，18檜山の 11 単位子ども会である（番号は表Ⅳ－2 に対応している)。

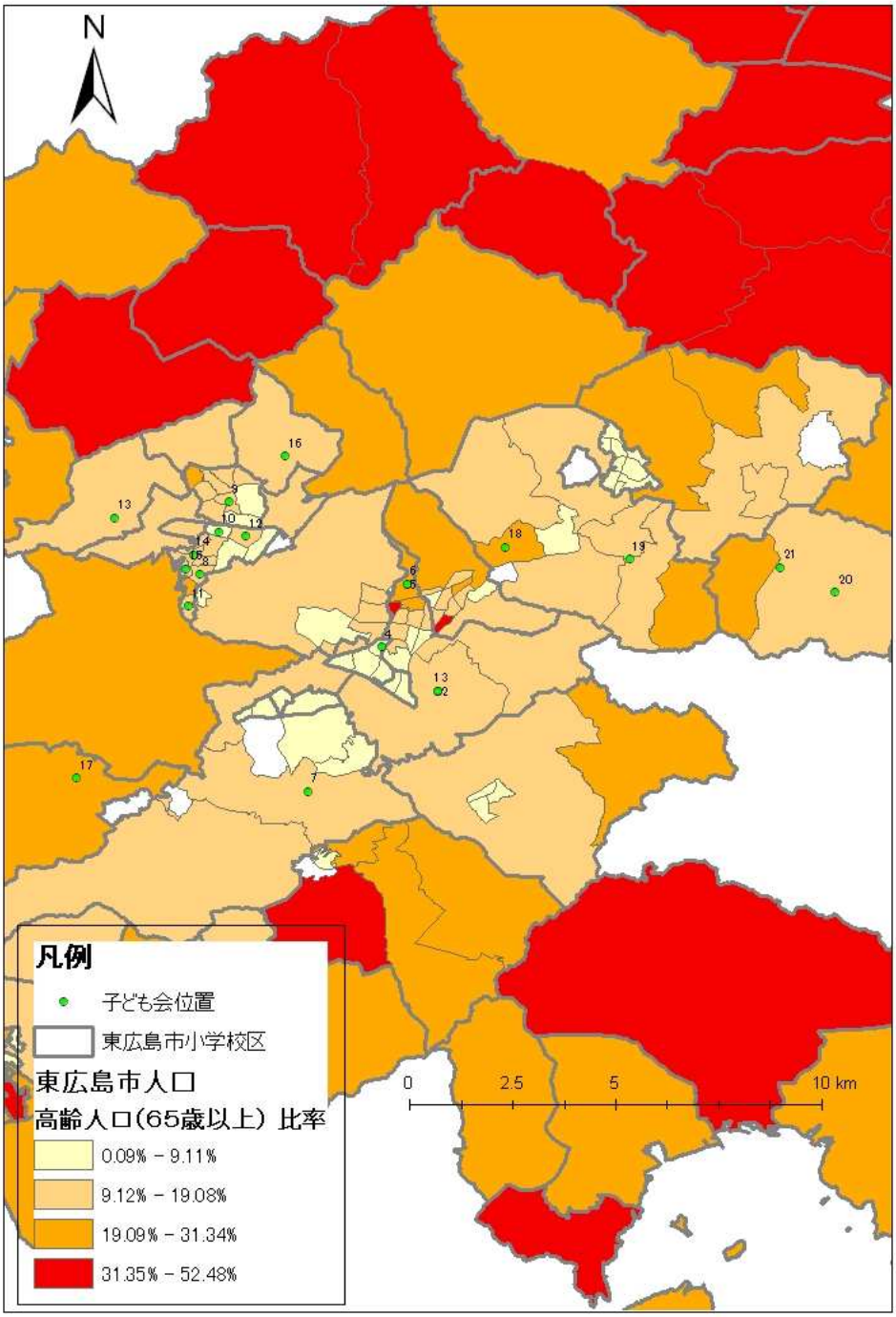
これらの子ども会を団地の大まかな設立年次で分類する。宅地開発が継続されている団地があるので，明確な設立年次を指定することは難しいのと，正確な設立年次のデータが手に入った地域と手に入らなかった地域があるため，大まかな設立年次と町丁大字ごとの東広島市の年少人口比率，生産年齢人口比率，高齢人口比率を表した GIS を利用し，アンケートが返ってきた 11 単位子ども会の地域概観を行うこととする。図Ⅳ－1　東広島市年少人口比率，図Ⅳ－2　東広島市生産年齢人口比率，図Ⅳ－3 東広島市高齢人口比率　にそれぞれ番号を付している。番号は，表Ⅳ－1の表に対応している。人口比率については4段階でわけており，「高い」,「やや高い」,「やや低い」,「低い」の評価で表すこととする。



図Ⅳ－1　東広島市年少人口比率（秋元作成）



図Ⅳ－2　東広島市生産年齢人口比率（秋元作成）



図Ⅳ－3　東広島市高齢人口比率（秋元作成）

5，6 年前につくられた団地には，三升原若葉がある。7 三升原若葉子ども会は，西条町田口にある子ども会である。年少人口比率と高齢人口比率は低く，生産年齢人口は高い。5～6 年前に出来た団地やマンションが一棟あり，住宅が増えているところである。

10 年前につくられた新しい職住一体型の団地は，1998 年に完成した団地であるテクノタウンである。今回調査した地域の中でも新しくできた団地で，テクノタウン団地の周りの地域では，30 年前に団地開発が行われており，その後 10 年前に再び開発が行われ，一気に住宅が増えた団地である。5 テクノタウン子ども会は，西大沢にある。1998 年に完成した団地である。20～30 代の親が多く，小さい子どものいる家庭が多い。年少人口比率と生産年齢人口比率はやや低いが，高齢人口比率はやや高い。これは，テクノタウンの地域だけではなく，西大沢全体の集計のため，30 年前に開発が行われた団地に住んでいる人々の影響が強いのだろう。

他にも，約 10 年前まで団地開発されていたのは，松風地域である。1994 年に設立したとされている。9 松風子ども会は，八本松飯田にある。古い団地と古い団地の間に新しくつくられた団地である。年少人口比率と生産年齢人口比率はやや高いが，高齢人口比率はやや低い。

約 20～30 年前に設立されたと思われる団地は，七ツ池，下東である。

8 七ツ池子ども会は，八本松南にある。約 20 年前にできた団地である。年少人口比率と高齢人口比率はやや低く，生産年齢人口がやや高い地域である。12 下東子ども会は，八本松東にある。一軒家とアパートが多く，年少人口比率がやや高く，生産年齢人口比率と高齢人口比率がやや低い地域である。

約 30～40 年前にできた団地は，円城寺と日興苑である。

円城寺子ども会は，西条町御薗宇にある。御薗宇地域はまだ行政区がわけられていないために面積が広い。0～9 歳と 20～40 歳の割合が多い地域である。年少人口比率と生産人口比率はやや高く，高齢人口比率はやや低い。11 日興苑子ども会は，八本松南にある。約 40 年前に設立された団地で，二世代目に入っており，二世帯の家もある。年少人口比率と高齢人口比率がやや低く，生産年齢人口比率がやや高い地域となっている。

むかしからの在来集落がある地域に新しい住人が入ってきている地域（団地でない),古くからあるまちに散発的に宅地化もされている地域は,上戸，才ヶ迫，下西，檜山である。

1.上戸子ども会，2.才ヶ迫子ども会は西条町御薗宇にある。御薗宇地域はまだ行政区がわけられていないために面積が広い。0～9 歳と 20～40 歳の割合が多い地域である。年少人口比率と生産年齢人口比率はやや高く，高齢人口比率はやや低い。上戸子ども会は，団地ではない。50 年くらい前から住んでいる人もいれば，二世帯の人もいる，最近アパートやマンションが増えている地域である。才ヶ迫子ども会は，団地ではない。町内会も子ども会も 5 年前に新しくつくられた地域である。むかしからずっと住んでいる人もいるが，7，8 年前，12，13 年前に一軒家を建てて入居してくる人が多かった。

下西若葉は，50 年前は水田が多かったが，駅が近いために家が増えていった地域である。10 下西若葉子ども会は，八本松南にある。50 年前は田んぼが多く家も 3，40 件しかなかったのが，八本松駅が近いということもあり，30～40 年前には 1000 件近くに家が増えた地域である。二世代目が多い。年少人口比率と生産人口比率はやや高いが，高齢人口比

率はやや低い。18 檜山子ども会は，高屋町檜山にある。一軒家が多く団地ではない地域であるが，アンケートによるとシングル家庭が多く，働いている人が多いようだ。年少人口比率と高齢人口比率がやや低いが，生産年齢人口比率はやや高い。

これらの地域を，①5～10 年前に（完成して 10 年前以内か開発が継続中）設立された団地，②20～30 年前に設立した団地，③30～40 年前に設立した団地，④むかしからの在来集落がある地域に新しい住人が入ってきている地域（団地でない）の四つに分類できる。

この四つの分類に子ども会をあてはめる。

地域分類	子ども会名
①5～10 年前に設立した団地	三升原若葉（70%） テクノタウン（100%） 松風（80%）
②20～30 年前に設立した団地	七ツ池（70%） 下東（35%）
③30～40 年前に設立した団地	円城寺（100%） 日興苑（100%）
④むかしからの在来集落がある地域に新しい住人が入ってきている地域（団地でない）	上戸（84%） 才ヶ迫（70%） 下西（30%） 檜山（100%）

表Ⅳ－3　東広島市調査地域子ども会の地域分類と加入率【()内】

（秋元作成）

この四分類で分析していく。地域ごとの加入率を比較するとほとんどの地域が加入率 70%以上であり，加入率が高いことがわかる。下東と下西だけは加入率が 30%であり，低い。この原因も探っていきたい。

第 4 節 東広島市各単位子ども会の分析

まず，各単位子ども会の現状を述べ，その後，先ほど行った四分類にて地域を順番に，分析する。

まず,「①5～10 年前に設立した団地」として三升原若葉子ども会，テクノタウン子ども会を取り上げる。

ｉ．三升原若葉子ども会

三升原若葉子ども会は，西条町田口にある。平成 21 年度子ども会会長にインタビューを行った。子ども会平成 21 年度加入数は，地域にいる子ども 58 人中 39 人が子ども会に加入している。加入率は 67%である。地域の住宅が増え，子どもは増加傾向にあり，加入者は増加しているが，途中で退会する高学年が増えている。途中で退会するのは，スポーツ少年団等に入っているため，子ども会の行事に参加できないからである。子ども会に加入しない一番の理由は，親が役員をしたくないからという理由が多いとのことである。

現会長が会長になった理由は，2 年毎に小学校の役員の何かをしなくてはならないので，子ども会の役員をすることにしたからである。そこで，じゃんけんをして負けたために，会長の役職をすることになった。

他の地域活動はしていない。子ども会の役職は，会長１人，副会長１人，会計１人，書記１人で，子ども会すべての行事を４人で行っている。子ども会以外で一緒に活動することはない。子ども会の話し合いは，会長は必ず参加しなければならないが，その他の役員は事情があれば参加しなくてもよい。会長の仕事として，行事内容の決定や運営，買出しを行っている。大変なことは，行事の内容を決めること，行事で子どもの前でしゃべりまとめること，地域の方とのやりとりである。これは他の地域でもあてはまることであるが，行事で子どもの前でしゃべったり，まとめたりすることが苦手で，役員になりたくないので子ども会に入らない親もいるようである。

子ども会の活動は，集会所を利用している。公民館，児童館，学校を利用することはない。他に，映画を観に行く時に映画館を利用する。この「映画鑑賞会」という活動は，他の地域では見られない珍しい活動である。少人数の子ども会だからこそ出来る活動といえる。町内会と連携した子ども会の活動は，「秋祭り（子ども相撲とお神輿）」や「とんど」である。この二つの活動は，地域の伝統文化を継承している活動といえる。他に，子ども会の活動として，「歓送迎会」，「クリスマス会」がある。

三升原若葉子ども会では，子ども会の活動を通して，幼稚園が違ったり，新しく家を建てて地域に入ってきたりした家庭の子ども達の交流の場所となっている。高学年が低学年の面倒を見たりすることで，上下関係を学ぶ良い機会となっている。

ⅱ．テクノタウン子ども会

テクノタウン子ども会は，東広島市西大沢にある子ども会である。こ

の地域は，広島大学や広島中央サイエンスパークに近接する，職住一体型研究団地である。1998 年完成した新しい団地で 205 戸ある。

図Ⅳ－4　テクノタウン地図[2]

図Ⅳ－5　テクノタウンアクセス圏[3]

テクノタウンの位置については図Ⅳ－4 と図Ⅳ－5 をみていただきた

い。

この地域の子ども会会員数は 137 名（99 世帯）である。ここ数年の会員数は 120～140 名で，毎年人数が確保できていることがわかる。テクノタウン子ども会では登校班編成の都合等により子ども会には全員加入している。子どもの数は増加傾向にある。約 12 年前に出来た団地のため，20～30 代の親が最も多く，団地の世帯数増加に比例して子どもの数も増えている。子どもが習い事をしていて，子ども会に参加が出来ないためやめたいといった保護者が過去 2 名いたが，いずれも子ども会の方向性を保つため却下されたようである。他の地域での実例を考えると，ここで例外を許してしまうと，一気に加入率が下がる可能性が高い。この判断は子ども会の活動を保つためには必要だったと考えられる。

テクノタウン子ども会では，役員はもちまわりで，現会長の役職は推薦で決まった。現会長は，学級のクラス役員，剣道教室の代表と，他にも地域活動を積極的にしているようである。会長の子ども会での活動内容は,「各イベントに関するもの」,「注意事項」「危険箇所」の回覧の作成や各イベントの企画，運営などを行っている。子ども会の役職は，会長 1 人，副会長 2 人，書記 3 人，会計 2 人，会計監査 2 人の計 10 人ある。子ども会の話し合いなどは，メールで都合の良い日を聞き，日程を決めるが，用事がある場合は欠席しても良いので融通がきくといってよい。また，子ども会以外での活動で役員の人たちとは，学校行事で一緒に活動することもある。これは，子ども会の役員が同学年の子どもをもつ母親が集まっているからである。それ以外でも，たまに食事に行くなど同世代の親が集まっているからこそ話しやすく，親密になっているようである。このように，新しく出来た団地でしかも保護者は同世代が多いという環境は,子ども会活動を活発にしやすくしていることがわかる。

この地域子ども会の仕事で大変なことは，役員や会員の足並みをそろえること，子ども達の楽しめる内容のイベントを考えることである。

子ども会の活動では，施設を積極的に利用しているようである。ここ数年は，公民館で行われる福祉大会へ合唱・合奏などで参加している。この合唱・合奏の練習は，学校の音楽室を借り，先生の指導のもとで練習している。他にも，学校の体育館を借りて「お楽しみ会（クリスマス会)」や「歓送迎会」を行っているなど学校と協力体制が整っている。他にも，団地の自治会と連携をとって，「夏祭り（盆踊り)」，「ハローウィン祭り」，「とんど」を行っている。団地が設立した年は最近であるものの，「夏祭り（盆踊り)」と「とんど」は，他の地域でもむかしから行われている活動であり，新しい団地とはいえ，伝統文化の継承としての役割を果たしている。

10 年前と現在で，子ども会の活動内容が変わってきたことは，10 年前よりも行事の規模が大きくなり，以前は公民館で行っていた行事も現在は小学校の体育館を借りて行っていることである。また，若い世代が増加したこともあり，「ハローウィン」など前まではなかった行事も 4 年前よりはじまった。このように，若い世代が集まった団地だからこそ，新しい行事を取り入れやすい環境にあることがわかる。また，10 年前と現在では，子どもの遊び方が変わっている。公園などで外遊びする子どもと，カードやゲームをして遊ぶ内遊びする子どもに二分化されている。外遊びする子どもの方が若干多い。

この地域では，子ども会は子ども同士，親同士の交流の場となり，お互いの顔を知る良い機会となっている。そのことで，団地内に見かけたことのない人がいればそれは不審者だとわかるので，団地内の治安維持にも役立っている。また，子ども会で子どもが交流することで，遊びの

ルールを教えたり，上級生が下級生の面倒を見たり，上下関係を学んだりできる機会となっている。

ⅲ．松風ハイツ子ども会

松風ハイツ子ども会は，八本松飯田にある子ども会である。団地がある地域で，元からあった団地と団地の間に新しく出来た団地である。

松風ハイツ子ども会への子どもの加入数は 51 世帯で 66 名。加入率は 80％と高い。この地域では，子どもが徐々に減少しており，子ども会への参加者も徐々に減少している。子ども会に参加しない理由は，子どもの学年が大きくなると役員にならなければならないからである。

松風ハイツ子ども会の，現会長が会長になったのは，会長本人からの聞き取りによると，自身は騙された感じでなったように思っているようだ。役職は，会長 1 名，副会長 2 名，会計 1 名である。子ども会の話し合いは，会長が他の人の都合に合わせている。役員の活動内容は，前年通りに行事を進めていくことで，違うことをしようとすると他の人から意見される。そういうこともあり，子ども会は全ての仕事が大変だと現会長は感じている。現会長は，子ども会以外にも PTA 役員もしている。これは，子ども会のお世話をしていると自動的に活動人員として扱われているからである。

子ども会の活動は主に集会所を使っている。他の施設はあまり利用しない。子ども会の役員は学校の行事の手伝いをしたり，社協と一緒に伝統文化を活かした活動したり，地域団体と活動することはある。町内会とは，「秋祭り」や「そうめん流し」の活動で協力している。

松風ハイツ子ども会に良い印象を持っていない方もいるようで，子ど

も会の活動が子どものためではなく，地域としての面子を保つための活動に感じたり，役員は使い走りされているように感じたりしているようである。このように感じている人は，他地域にもいるだろう。役員になりたがらない人はこういったことを思い，近所の人にどう思われるかということよりも，面倒なことに巻き込まれたくないと思いが強く，子ども会脱退につながるのだと予想できる。

次に，「②20～30 年前に設立した団地」として，七ツ池子ども会，下組東子ども会をとりあげる。

ⅳ．七つ池レインボー子ども会

七つ池レインボー子ども会は，八本松南にある。日興宛よりも新しい団地で，約 20 年前に設立した団地である。地域の子ども 37 名に対し，子ども会に加入しているのは 25 名で，加入率は約 70%である。地域の子どもの数は減っており，子ども会への参加者も減っている。これは，若い年代の親が子ども会に加入しないことが原因である。子ども会に参加しない理由は，親同士の関わりが面倒，家族だけでの行動（レジャー等）を大事にするからである。

現会長が，会長という役職に就いたのは，立候補して選出されたことによる。現会長からの聞き取りによると，現会長は子ども達と遊ぶのが楽しく，親同士で話す機会にもなっており，集まりなどは自分の時間にあわせて活動ができるので，役職に就いた。役職は，会長 1 名，副会長 1 名，会計 1 名，あとは時間に都合がつく人が手伝っている。子ども会の話し合いは，役員のみだけで行い，手伝ってくれる人には個別に話を

している。一緒に活動している人とは，他の地域活動で一緒になることはスポーツ少年団だけで他には特にない。

子ども会の活動は，年 4 回の「資源回収」，年 4～5 回の「お楽しみ会」，「秋祭り」，「KYT（危険予知トレーニング）学習」を行っている。特徴的なイベントは，昨年度近所の公園で 1 泊 2 日の「キャンプ」を行ったことである。他地域で過去に行っていた地域はあったが，現在「キャンプ」を行っている地域は調査した中ではなかったので，特徴ある活動といえる。

子ども会活動をする時には，主に集会所や公園を使っている。公民館や学校を利用することはない。集会所では，ゲームをしたり，カレーを作って食べたり，綿菓子を作ったりしている。地域の公園ではゲームをしている。他に，町内会と連携した活動は，「長寿を祝う会」を行っている。それと，この地域の伝統的な行事として「秋祭り」があげられる。

10 年前と現在の子どもの違いは，子どもが外で遊ぶ時間が無くなり，習い事をする子どもが多くなった。また，集団でのゲームをしない傾向にある。

子ども会活動は地域で，子ども達が集まる機会，そして親同士も日ごろできない近所付き合いができる機会の場として必要とされている。

ｖ．下組東子ども会

下組東子ども会は，八本松東にある。一戸建てとアパートが多い団地である。近くにシャープ工場がある。20 年前にこの工場が出来たこともあり，一戸建てたアパートで地域に入ってくる人が増えた。この地域は年少人口比率が多い地域で，子どもの数が多く，222 人いる。そのうち，

79 人が子ども会に加入している。加入率は 35%と低い。大所帯なので，分割する話も出たが，分割すると友だちと一緒に活動できなくなるのは嫌だという子どもの意見を尊重し，そのままになっている。加入率が低いのは，大所帯で活動がしにくい，子どもがスポーツ少年団等の活動をすることや，一戸建てで家を建てたばかりで共働きをする必要があるため役員ができないので高学年になると子ども会をやめるからである。学年の比率はピラミッド型になっており，低学年の子どもは多いが，高学年になってくるとどんどん少なくなってくる。

行事それぞれの参加人数（保護者・幼児を含めた）は,「ボーリング大会」が 91 名,「クリスマス会」が 105 名,「秋祭り」が 164 名,「廃品回収」が 30～40 名だった。このように，100 人近い人数で活動していることがわかる。地域の子どもの数は増えている。2～3 年前までは，団地の増加などで会員・参加者も増えていたが，高学年になるにつれ，習い事・スポーツ少年団への参加者が増え，最近子ども会活動への参加が減ってきたようである。子ども会に参加しない理由は，親が役員をしたくない，子どもが習い事をしているからである。

現会長が,会長になったのは,前年度会長からの依頼を受けてである。会長は 1 年交替で行っている。仕事内容は行事の企画やお祭りのお世話である。役員は, 会長 1 人, 副会長兼会計 1 人, 各班の班長 6 人である。この各班の班長があるというのは，子ども会が大所帯なので，班にわけまとめていることがわかる。子ども会の活動を一緒にしている人たちとは，子ども会以外でも一緒に活動することがある。会長は子ども会以外にも「コミュニティ協議会」や「パトロール隊」の活動をしている。積極的に地域の活動を行っていることがわかる。子ども会の話し合いは，仕事，子どもの習い事等に用事がある場合は無理に出席しなくても良く

融通がきく。子ども会の仕事で大変だと感じるものは，行事の企画・準備・運営のようだ。

子ども会の活動は，集会所で「クリスマス会」，公民館で「6年生を送る会」をしており，地域の施設を行事にあわせて活用している。学校との連携は特にない。町内会とは,「秋祭り」や「廃品回収」,「もちつき体験学習」を一緒に活動している。

この地域では，子ども会は地域の方と連携をつくる場所としての役割を担っている。

次に,「③30～40年前に設立した団地」として，円城寺北子ども会，日興苑子ども会をとりあげる。

vi．円城寺北子ども会

円城寺北子ども会は西条町御薗宇にある。円城寺団地がある地域で，古い一戸建てが多い。現在は子供が増えている状態で，34人子どもがいる（ここ2～3年は子どもが30～40人いる）中で全員子ども会へ加入している。▪全員加入しているものの，習い事がある子どもは子ども会活動に参加していない。現在会長が会長になったきっかけは，上の子どもが子ども会にいる時に役員をしなかったので，役がまわってきたようである。子ども会の話し合いには，用事があれば参加しなくても良いが，役員決めの時は必ず参加しなければならない。会長の仕事は，自治会との連携の打ち合わせや行事の進行があるとのことである。

10年前よりも現在の子どもは,外遊びが少なくなり,習い事が増えて,友達と遊べる時間が少なくなっている。公民館や児童館，学校，学校以

外での子ども会の活動は特にないようである。町内会と連携した子ども会の活動は,「盆踊り祭り」,「とんど」,「ちょうちん祭り」,「秋祭り」とお祭りやとんどなど伝統的なものが受け継がれており,10 年前と現在では子ども会の活動内容は特に変わっていない。

ⅶ．日興苑子ども会

日興苑子ども会は八本松南にある。約 30 年前（1970～1980 年代）につくられた団地の子ども会である。団地の居住者は，二世代目に入り，家を建て替え二世帯住宅にする家も多いようである。高齢者と小さい子どもがいる世代が入り混じっている地域といえる。

地域の子どもは 75 名おり，子ども会へは全員加入している。八本松では，10 年～20 年前くらいから登校班に入るためには子ども会に入らなければならないという制度をやめ,登校班は PTA が管理することになっている。それにも関わらず全員子ども会に加入するようにしているのは地域の方針であると考えられる。加入率は 100%であるが，行事があるごとに全員に声をかけ，実際に参加する子どもの割合は，40%～50%というのが実情のようである。そして，育成会以外の親はいっさい行事に参加しない。親が育成会に入っていなくても，子ども会行事に参加する子どもはたくさんいる。また，親が面倒だと思い，子どもを子ども会行事に参加させない家庭もある。このように，子どもの意思ではなく，親の都合で子ども会に参加しない子どももいる。

この地域は，一世代目の子どもが多かった時期が子ども会加入者数のピークで，その頃加入者数は 100 人以上いた。その後，減少傾向にあったが，ここ 5 年間は子どもの数が増えている。しかし，これからまた減

少傾向になることが予測される。ここ5年間の参加者の増減はあまりない。他の地域とは違い，塾やスポーツ少年団に参加していても，行事に参加する子どもは何人もいるようである。しかし，高学年になってくると出席率は悪くなり，友達が行かないから出席しないという理由で行事に参加しない子どもも出てくる。

現在の会長さんが，会長の役職に就いたきっかけは，昨年度副会長をしていた流れと，小学校最後の学年なので，恩返しとして地域に貢献しようという思いからである。会長の活動内容は，地域の方との親和，打ち合わせ，協力や東広島市子ども会連合会への参加である。打ち合わせは，参加できない場合は副会長に任せることもある。一緒に子ども会の活動をしているのは副会長1人と会計1人。それと，子ども会育成会の行事の世話をする保護者20人である。一緒に活動している人たちとは，仲良くなる良い機会にはなっているが，子ども会以外で一緒に活動することはないようである。

特徴ある活動は，竹を使って流すそうめん流しで，これは人気の行事である。それと，クリーン活動をしている。クリーン活動は，小学校全体に呼びかけ，参加をうながしている。活動内容は，池の周りの清掃活動と昼食（カレーなどを出す），その後，リース作り（木の枝，実を使ったドライフラワーなど）を楽しむことになっている。しかし，年々参加者は減ってきている。

子ども会の活動で積極的に施設を利用している。公民館はないようだが，団地内にコミュニティ会館があり，毎回そこで活動を行っている。毎月1～2回は行事を行っており，積極的に活動していることがわかる。夏休みには，児童館として子どもたちに宿題をさせたあと，遊びをしたりするなど積極的に活動している。他にも，学校を使って，広島大学の

学生が遊びを教えたり,「クリスマス会」をしたりすることもある。その他の施設では,「ボーリング」に行ったり，団地内の「自然公園」で自然に触れあい，遊んだり,「神社へ初詣」に行ったり,「神社のお祭り」で子ども神輿をかついで何 km も歩いて回ったり,「とんど」に参加したり,「ハローウィン」でお菓子をもらいに 4～5 件お願いした家庭をまわったりと，活発的に活動している。町内会とは,「夏祭り」,「秋祭り」,「敬老会」,「クリーン活動」,「とんど（もちつき)」などで連携している。

具体的な通年の，2008（平成 20）年度の活動内容については表Ⅳ－4 で示す。このような活動を行い，一緒にお世話してくれる保護者は全体の世帯の 3 分の 1 程度で，人手不足のため活動を運営するのは大変である。

月	行事	内容
6	一年生歓迎会	自己紹介。ゲームまたはスイミーさんによる読み聞かせ。ケーキを作ったり工作をしたりする。
7	そうめん流し	日興苑孫子老会（まごころ会）の指導と協力でおはぎ作り，七夕の飾りつけ，竹で作ったそうめん流しでそうめんを食べる。
8	児童館	夏休みの週に 2 日，コミュニティー会館に集まり，夏休みの宿題の後，夏祭りの準備をしたり，ゲームなどして楽しむ。
9	敬老会	団地の敬老会にて，歌を歌ったり，楽器を弾いたりするのを見てもらう。
9	前期誕生日会	4月から9月生まれの子どもに誕生日会をまとめて

		する。
10	里山で遊ぼう	日興苑会遊歩会（ゆうほ会）の指導と協力で自然の中でネイチャーゲーム，木や虫の観察，植樹などをする。
10	秋祭り	新宮神社のお祭りに参加し，かなり長い距離を神輿をかついでまわる。
11	七ツ池クリーン活動	八本松小学校の学習の一環で，水の浄化について学習するため，八本松小学校にも呼びかけ，ごみ拾いをする。活動の後はカレーライスを食べ，午後はリースづくりの指導を行う。
12	クリスマス会	盛大に料理をつくって食べる。毎年企画は違うが，工作などをしてお土産を持って帰る。
1	とんど	とんどのぜんざい用のお餅を前日に杵でつき，まるめる作業をする。たくさんのおもちを持って帰る。
3	後期誕生日会	10 月から 3 月生まれの誕生日会をする。
3	ボーリング大会	6 年生を送る会も兼ねてボーリングをする。

表Ⅳ－4　2008（平成 20）年度　八本松日興苑子ども会活動内容

（秋元作成）

この地域では，10 年前と現在で，子ども会の活動内容は変わってきている。例えば，10 年前は大きな行事（宿泊を伴う遠くへの旅行やキャンプなど）を毎年行っていたが，今は 3～4 年に一度くらいの頻度となっ

ている。働く母親が多くなり，遠出は大変になっているというのが理由としてあげられる。また，子ども会会長からの聞き取りによると，10 年前と現在を比べると，子ども自身も積極性や好奇心，意欲があまりなくなっていると感じられるようである。

子ども会で大変なことは，地域の方からの要望に答えられない時である。地域の方との話し合いが，何回もあるので大変な思いをする。この地域の方々の要望・意見を取り入れるというのは大事なことでもあるのだが，新しいことに挑戦したり，必要でないので行事をやめるという判断を現役の役員の方だけで決定できないので自由に活動しにくいという問題点もある。

この地域では，住宅環境を活かして自然の浄化装置を学習したり，高齢者の方と，楽器の演奏や歌などを行う敬老会や昔遊びやおもちゃを作る活動に参加するなど，地域の特徴を活かした活動をしている。

学校と子ども会は関係を持たないようになったようで，以前はクリーン活動を学校と連携して行っていたが，いまは子ども会だけで活動している。

この地域は，加入率も良く様々な活動を積極的に行っている。地域の方との調整は苦労することもあるようだが，役員の方が積極的に活動しようという意思を持っていることが感じられる。

次に,「④むかしからの在来集落がある地域に新しい住人が入ってきている地域（団地でない)」として，上戸子ども会，才ヶ迫子ども会，下西わかば子ども会，檜山子ども会を取り上げる。

ⅷ．上戸子ども会

上戸子ども会は，西条町御園宇にある。この地域は，元々長い間住んでいる人がいるのだが，最近アパートやマンションが建設され，転入者が多い地域である。子ども会に加入しているのは，最近転入してきた人である。上戸子ども会加入数は，平成 20 年度は，地域の子ども 32 人に対して 30 人加入。平成 21 年度は，地域の子ども 51 人に対して 43 人加入。加入率は，平成 20 年度 93%，平成 21 年度 84%と高い。平成 21 年度に加入者が減ったのは，子どもの習い事で忙しいといった理由からである。他にも，親が役員をしたくない，親の都合，子どもも特に希望していないので入らないといった理由があげられる。地域の子どもの数は増えているとも減っているともいえないので，加入者数が減っているのは，それぞれの子ども・家庭の事情だと考えられる。

上戸子ども会では,会長は六年生の親がなってきたという慣例がある。六年生の親の人数も少なく，何かしなければならないという思いから，現会長は立候補した。現会長は仕事もしており，他にも子どもの習い事等もあるため，子ども会の準備をする，まとめるということは簡単ではないようである。現会長は，他にも小学校役員，中学校役員，子どもの習い事の役員など多くの地域の活動に貢献されている。

上戸子ども会の役員構成は，会長 1 人，副会長（五年生の保護者），会計 1 人，広報 1 人である。副会長は補助の仕事なので，普段は会長，会計，広報の 3 人で企画をしている。役員の同士は，子ども会だけではなく地域の自治会活動で一緒に活動することがある。子ども会の話し合いは，それぞれ用事があるときは，次への引継ぎのためにも他の人に依頼し欠席している。子ども会会長の仕事内容は，子ども会会費集計，地域の自治会役員会への参加，会計（会計係），行事の企画・準備（クリス

マス会，歓送迎会)，引継ぎ作成，子ども会加入者への情報伝達となっている。

上戸子ども会では，公民館，児童館，学校を利用する行事は特にないようである。地域の集会所で，クリスマス会や歓送迎会などを行っている。他には，町内会と連携して，とんど，秋祭り，神社の祭り，亥の子，盆踊りを行っている。この中でも他の地域と比べて変わっている行事として，亥の子，クリスマス会があげられる。

10 年前と現在を比較すると，子ども会の活動内容が変化している。昔は親の参加も多く，約 30 年前は海へ行ったりすることもあったが，親子で遊びに子ども会へ参加するという人が少なくなり，車を使用するなど危険を伴うことはさけるようになってきた。10 年前と現在との子どもの変化は，ゲームをする子どもが多い，遊びを知らない，考えることができない子どももいることである。

子ども会の教育の場としての役割は，地域の子どもとの遊び場の提供である。地域の仲間を知る良いきっかけとなっている。子どもは毎日遊ぶことの積み重ねによって学ぶことがたくさんある。帰宅し，地域の子どもと遊ぶことはとても大切なことである。子ども会の活動自体で教育として役立っているのは，登校班の班長決めなどで，5・6 年生が地域の子どもの中でもリーダー的な責任を感じさせる場として役立っている。

ix．才ヶ迫子ども会

才ヶ迫子ども会は，西条町御薗宇にある。5 年前に子ども会ができた地域で，同じ時期に町内会も出来た。この地域は，元々ずっと住んでいる人もいるが，12 年前くらいに一軒家をたて，新しく入ってきた人が多

く，その家庭の子どもが子ども会に加入している。地域の子どもは 11 人でそのうち子ども会の加入者数は 7 人である。地域の子どもの人数が少ないため，未就園児 2 名も子ども会活動に参加している。加入率は 70％である。地域の子どもの数は増えているが，男女比率が偏っており，男の子が多い。子ども会に加入していない人の理由は，仕事をしているので役員ができない，子どもが子ども会に入りたくないからである。

現会長が会長になった理由は，仕事をしていなくて家にいるので会長職を引き受けたとのことである。子ども会での会長の仕事は，クリスマス会などのプレゼントを用意することである。

子ども会の役職は，会長 1 名，副会長 1 名，会計 1 名となっているが，子どもの人数が少ないために，ほとんどの親に参加してもらっている。現会長は子ども会以外の活動には，学校の係りをしており，子ども会以外の地域活動もしている。また，子ども会の話し合いは，用事がある時は事前に連絡しておけば大丈夫で，仕事で大変に感じることは特にないようである。これは，人数が少なく気が知れた人たちで集まって運営していくからだろう。

子ども会活動は，公民館の施設を利用したり，ちょうちん祭り，秋祭りに参加するなど地域の施設を利用している。学校との連携は特にない。町内会とは，食事会，とんど祭り，バーベキューなどで一緒に活動をしている。地域の伝統文化を活かした子ども会活動は，ちょうちん行列や秋祭りがあげられる。

6～7 年前と現在で子ども会の活動内容が変わってきたことは，以前は子どもの手が離れていて余裕がある人が役員だったのが，今はみんな仕事や子どもが小さい人が多いため，行事が少し減ってきた。このことから，才ヶ迫子ども会は，子ども会を OB・OG が役員をして支えてきてい

たのが，活動の維持が困難になってきたということがわかる。

才ヶ迫子ども会の活動は，子どものふれあいという教育の場として活かされている。

x．下西わかば子ども会

下西子ども会は，八本松南にある。50 年前は水田が広がっており，30～40 軒だったのが，30～40 年程前から家が増え現在では 1000 軒近く家がある。これは，八本松駅が近いので，八本松駅から広島駅まで約 30 分という利便性から住人が増えてきた地域である。子ども数のピークは過ぎ，住人も二世代目に入っている地域である。ここ 3 年間の子ども会の加入者数は，2007（平成 19）年度は地域の子ども 73 人中 19 人で加入率 26%，2008（平成 20）年度は地域の子ども 76 人中 21 人で加入率 28%，2009（平成 21）年度は 79 人中 24 人で加入率 30%である。子どもは少しずつ増加傾向にあるものの，子ども会加入者数は約 30%と低い。加入率が低い理由は，高学年の子どもはスポーツ少年団に参加するようになっていくので，やめていくことや，役員をしたくないという親の都合で加入しない家庭があること，地域のつながりが無くなってきているからである。

現会長は，会長職の推薦を受けたため引き受けた。役員は，会長 1 人，副会長 1 人，監査 1 人，会計 1 人，アドバイザー2 人がある。他の子ども会にはない，アドバイザーという役職があることが興味深い。役員の方たちは子ども会以外でも一緒に活動することがある。現会長は，「八本松おやじの会」の活動もしている。子ども会の話し合いは，基本的に参加だが，用事があれば事前に不参加の連絡をすることになっており，比

較的融通がきく。子ども会の仕事で大変なのは,案内資料の作成である。

子ども会の活動は，以前この地域は移動公民館だったが，公民館がつくられ，そこで子ども会の活動をするようになった。学校での子ども会活動はない。町内会と連携した子ども会活動には「もちつき」や「秋祭り」がある。

この地域では，子ども会は親のつながりの場として役立っている。

ｘｉ．檜山子ども会

檜山子ども会は高屋町にあり，近くには西条インターがある。高齢人口比率と生産年齢人口比率が高い地域である。地域の子どもは減っており，現在は 25 人いる。全員子ども会へ加入している。小さな集団といってよいだろう。現会長が会長になった理由は，子ども会の会長の役職は六年生の子どもがいる家庭にまわってくるからである。仕事内容は，行事の準備，子どものトラブル（登校時に起きたトラブル）への対応などである。一緒に活動している人は２人で幼稚園の仲間という見知った仲のようだ。会長さんは子ども会以外にも幼稚園のクラス役員，陸上クラブの六年生代表をするなど，積極的に地域活動を行っている。子ども会の話し合いは，どうしてもはずせない用事がある場合は事前に連絡すればよいということになっており融通がきく。

子ども会で大変なことは,親の参加が減っていることで,その理由が,シングル家庭が多く，仕事があるために子ども会の活動に参加する余裕がないからである。このことから，仕事などで忙しい親が増えており，子ども会活動に参加する余裕がないことがわかる。

活動内容は 10 年前に比べると減った行事もある。減らした行事の例

を挙げると，交流会をいままで行っていたが，仕事をする母親が増え，参加者の人数が集まらないために中止となった。檜山子ども会では，公民館や児童館を「亥の子」,「秋祭り」,「歓送迎会」,「ボーリング大会後の食事」等で使ったり，学校で「市民スポーツ大会」を行ったり,「綱引き大会」に参加するなど地域の施設をよく利用している。他にも，町内会と「とんど」や「秋祭り」,「きれいな町づくり」などで連携しており，地域との施設やコミュニティとの関係が深いと考えられる。「とんど」,「秋祭り」,「亥の子」がこの地域で特徴的な行事である。亥の子は広島市では行っている地域が安佐北区可部の地域で多かったが，東広島では他の地域（本調査で調査した地域）で行っていないので，特に特徴的だと考えられる。

第５節 東広島市子ども会比較・分析

東広島市子ども会連合会に所属している，各単位子ども会の特徴は，加入率が 100%, 70%, 30%の地域に大きく分かれることである。今回，①最近出来た（10 年前）団地，②20～40 年前に出来た団地，③団地でない昔から住宅がある地域の三つに分類して，活動内容を比較した。①最近出来た（10 年前）団地の特徴は，20～30 代の保護者が集まっているために，同世代の保護者同士活動しやすいこと。ほぼ同時期にこの団地に入ってきているため，まとまりやすいこと，である。加入率が 100%と 70%の地域がある。これらの違いは，子ども会加入を義務とするか任意にするかから生じるのと，70%の地域は，昔から住んでいる人もいるが，100%の地域はほぼ同時に家が建設されたという違いがある。②20

～40 年前に出来た団地の特徴は，その中でも約 40 年前に設立した団地は，はじめに家を建てた人の子どもが親となり，二世帯住宅となって，二世代目が子ども会に加入している場合が多い。②の地域では，100%が 2 単位子ども会, 90%が 1 単位子ども会, 80%が 1 単位子ども会, 70%が 2 単位子ども会，40%が 1 単位子ども会である。多くの地域が 70%以上で加入率が良いといえる。唯一加入率が低い，40%の子ども会は，222 人と大所帯でまとまりにくいというのと，子ども会の加入か脱退するのは自由なので，子どもや親の都合で簡単にやめることができるのが理由だろう。③団地でない昔から住宅がある地域は, 30%, 90%, 70%, 100%と加入率が高い地域と低い地域にわかれる。100%の子ども会は，シングル家庭が多い, 親が仕事をしている人が多いという状況であるが，25 人と小規模で活動しているため，加入率も良いと考えられる。90%, 70%の子ども会も，活動人数が少ない。

このことから，①最近出来た（10 年前）団地では，同時期にその地域に入ったということで，ルールをつくりやすい，まとまりやすいという特徴がある。一方で，②の 20～40 年前に団地が地域は，ある程度は同時期に団地に入ってきたが，その後散発的に宅地が出来ている地域が多く，その後から入ってくる人たちを子ども会に加入の勧誘行動の有無によって，地域の子ども会加入率が変わると予測される。これは，一旦前例が出来てしまうと，入らなくて済むならば入らないと考える人が出てくるからである。③団地でない昔から住宅がある地域も②と一緒で，入らない前例が出来てしまうと入会しない傾向があることがわかる。そういう意味でも，小さい集団の方が子ども会加入率が高く，たくさん子どもがいる広い地域では，子ども会加入率が低く，まとまりがつきにくいことがわかる。また，子ども会へ入っている人は，古くから住んでいる

人がいる地域に新しく家を建てたり，マンションに住んだりして入ってくる人たちが多い。二世帯になり，二世代目の子どもが加入している場合もある。新しい住人と古い住人の交流するための機会に，子ども会や町内会の活動はなっていると考えられる。

ここで，子ども会の活動以外にも，地域で子どもへの教育につながる活動があるのかを検討してみた。加入率が低い地域として，八本松地域があげられる。八本松地域について調査した。八本松地域では，子ども会の活動としてではないが，青少年育成会議[4]や PTA が協力して，学校週五日制対応行事を行っている。

文部科学省（2010）は，学校週五日制は，子ども達の生活全体を見直し，ゆとりある生活の中で，子どもたちが個性を生かしながら豊かな自己実現を図ることができるよう，平成 4 年 9 月から月 1 回，平成 7 年 4 月からは月 2 回という形で段階的に実施してきた。平成 8 年の中央教育審議会東進において，子ども達の「ゆとり」を確保する中で，学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ，子ども達に生活体験，社会体験や自然体験など様々な活動を経験させ，自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育むため，完全学校週五日制の実施が提言された。この提言を受け，平成 14 年度から完全学校週五日制を実施することになった。学校週五日制は，学校，家庭，地域社会の役割を明確にし，それぞれが協力して豊かな社会体験や自然体験などの様々な活動の機会を子どもたちに提供し，自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」をはぐくむことをねらいとしている。

しかし，子ども達の半数以上が毎週土曜日が休みになってよかったと思っているものの，三人に一人が休日にすることがなくてつまらないと考えているようである。二人に一人が学校や家ではできない体験をもっ

としてみたいと感じている。このようなニーズに応えるために，地域や家庭では遊び場づくりが必要となってくる。放課後や週末等に小学校の余裕教室を活用して，子どもたちの安全・安心な活動拠点（居場所）を設ける取組みを，厚生労働省と連携した総合的な放課後対策（放課後子どもプラン）として全国の小学校区で実施するとしている。また，子どもは地域で育てよう。指導者やボランティアとして，積極的に子どもたちと関わりながら，地域ぐるみで子どもを育てていく意識を高めていこう[5]。と述べている。

このことから，学校から依頼された八本松小学校区青少年育成会議や東広島市立八本松小学校 PTA が週五日制対応行事の活動をしているわけである。これらの活動は，八本松小学校からの依頼ではじめた。具体的な活動内容は，牛乳パックや紙コップなどを使って作り遊ぶ「作って遊ぼう体験教室」や，けん玉でいろいろな技に挑戦してみましょう「集中力アップ,けん玉教室」,野菜など身近なものを習字用の小筆で描く「大切な人におくる手紙」,初級・中級・上級コースにわかれて将棋をする「将棋教室」,手をつなぎ身体を使ってわらべ歌の心地よさに身を任せて遊ぶ「わらべ歌で遊びましょう！」，いろいろなゲームで楽しく遊ぶ「レク・ゲーム大会」を行っている。

この活動内容をみると，週五日制対応行事独自の活動というよりも，子ども会の活動としてされてきた内容に近いものも多数あるこれは他の地域の活動にもあてはまる。

「八本松おやじの会」は約 30 名の会員がおり，行事への出席率は半分程である。このおやじの会の活動内容は表Ⅳ－5 をみていただきたい。

月	日	行事内容（支援内容）	場　所	主催者
4	5（土）	花見	七つ池公園	
	20（日）	おやじの会総会	下組集会所	
5	17（土）	草刈り	八本松小学校	PTA
	25（日）	運動会	八本松小学校	小学校
6	1（日）	市民スポーツ大会（陸上の部）	運動公園	体育振興会
	7（土）	作って遊ぼう，体験教室	松翠苑	青少年育成
	21（土）	夢を形に　バルーンアート	松翠苑	青少年育成
7	5（土）	集中力アップ！けん玉教室①	松翠苑	青少年育成
	13（日）	ゆーすふるサンデー	曽場ヶ城	青少年育成
	19（日）	親善ソフトボール（小学校先生）	教育センターグランド	青少年育成
	20（日）	家族親睦BBQ	下組集会所	
8	2（土）	親子で作るアイデアカード	松翠苑	青少年育成
	9（土）	地域安全マップ作り	小学校	PTA
	23（土）	親子クリーン活動	八本松小学校	小学校
	23（土）	夜の巡回指導	八本松小学校	青少年育成
	30（土）	集中力アップ！けん玉教室②	松翠苑	青少年育成
9	13（土）	将棋教室①	八本松小学校	青少年育成
10	4（土）	将棋教室②	八本松小学校	青少年育成
	19（日）	草刈り	八本松小学校	PTA
	26（日）	市民スポーツ大会（ソフトバレー）	アクアパーク	体育振興会
11	1（土）	清水川神社大祭前夜祭	下組集会所	清水川神社
	2（日）	清水川神社大祭（準備10月26日）	清水川神社	

11	9（目）	学習発表会(交通整理･野菜提供)	八本松小学校	小学校
	15（土）	将棋教室③	八本松小学校	青少年育成
	16（目）	グランドゴルフ	教育センターグランド	体育振興会
	21（金）	子ども安全の目防犯パトロール	八本松小学校	防犯パトロール隊
	29（土）	防犯パトロール隊総会	松翠苑	防犯パトロール隊
12	6（土）	忘年会	てしお（下見）	
1	18（目）	とんど（準備11日及び17日）	八本松小学校	まちづくり推進協議会
	24（土）	レク・ゲーム大会	松翠苑	青少年育成
2	15（目）	親子ふれあい体験学習（交通整理）	八本松小学校	小学校

非定期行事：①おやじ農園”DADDYS FARM”運営

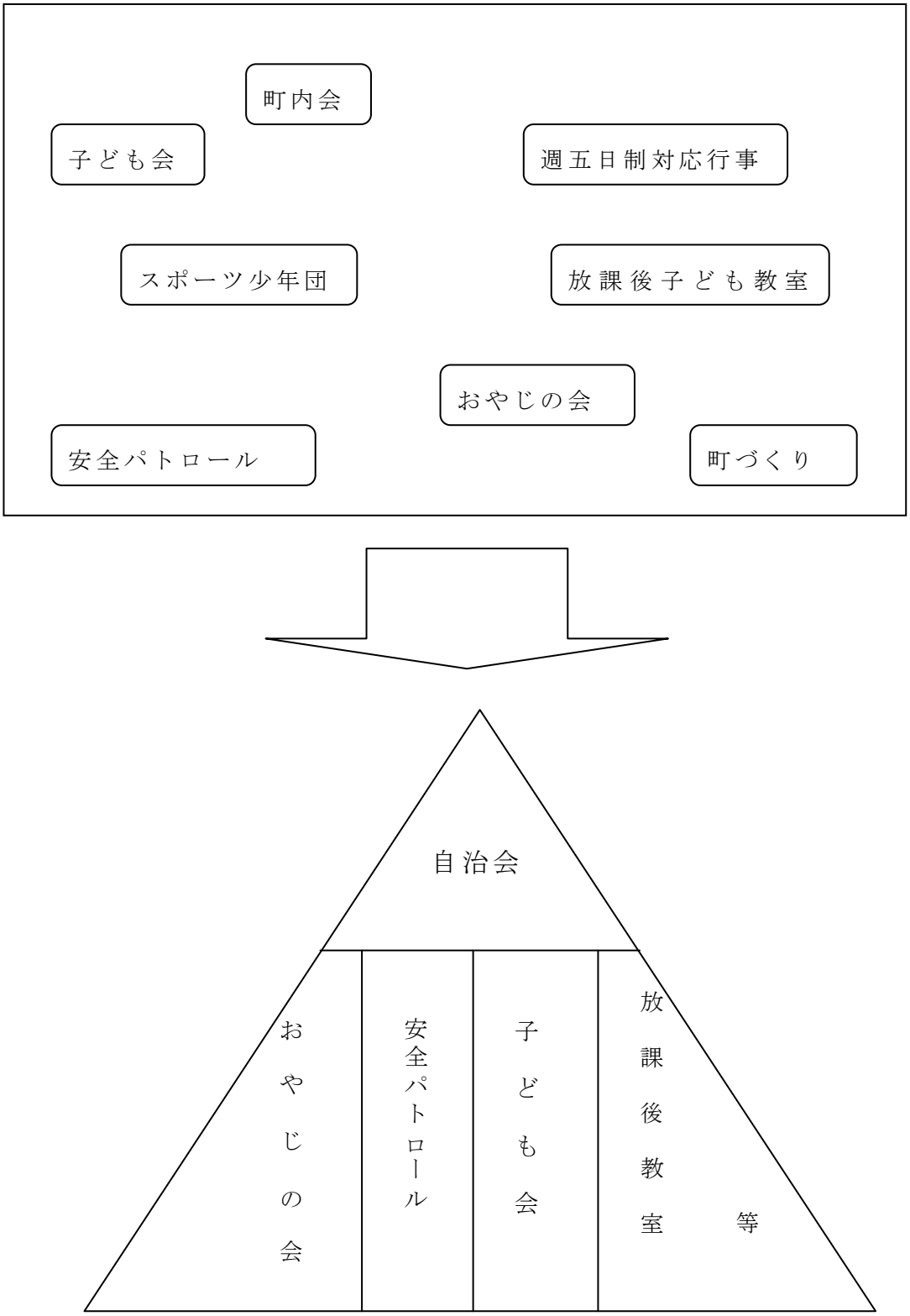
②小学校周辺道路整備

表Ⅳ－5　平成 20 年度「八本松おやじの会」活動報告[6]

（八本松おやじの会作成）

例えば，小学校で行われている「週五日制対応行事」，公民館中心に木曜の 15：00～17：00 にスナッグゴルフをしたり，宿題を見てもらったりする「放課後子ども教室」，地域では，子ども会，町内会活動，神社主催のお祭り，安全パトロール，地域コミュニティ活動，おやじの会，スポーツ少年団（ソフトボール，バレーボール，柔道，空手，ダンス，水泳）などが地域で行われている。このように，地域の活動はたくさんあるのだが，各団体それぞれが行っており，まとまりはとられていない。これらの活動を行っている人たちは，様々な団体・活動をまたがって行

っている人もいれば，自分が所属している団体の活動のみに限っている人もいる。このように，子どもへの教育の場は，たくさん用意されているものの，活動にはまとまりがなく，それを統合する機関がないことがわかる。そこで，広島市高陽地区のように，自治会が一番上に立ち，その下に町内会，子ども会，安全会，スポーツなどが入ることにより，もっと効率よく行事に人が集まり，保護者や世話役も集まりやすい環境になると考えられる。よって，図Ⅳ－6 に示したように，現在は参加者も少なく，活動が組織化されずに各コミュニティは活動しており，お世話をする大人を集めるにも，知り合いに声をかけて人を集め，活動を行っているのが現状である。そうではなく，自治体が一番上に立ち，人員を配分する役割を担うと，より多くの人に声をかけ，人員を集めることができ，現在よりも活動がしやすくなるのではないだろうか。しかし，注意点として，人員配置やアドバイスは自治会が行うべきだとは思うが，各々の活動内容については各団体が決めたことを尊重するべきである。現に，子ども会の役員の方たちが新しい活動を行いたいと提案しても，地域の人々が苦情を出して新しい活動ができないという地域もあった。

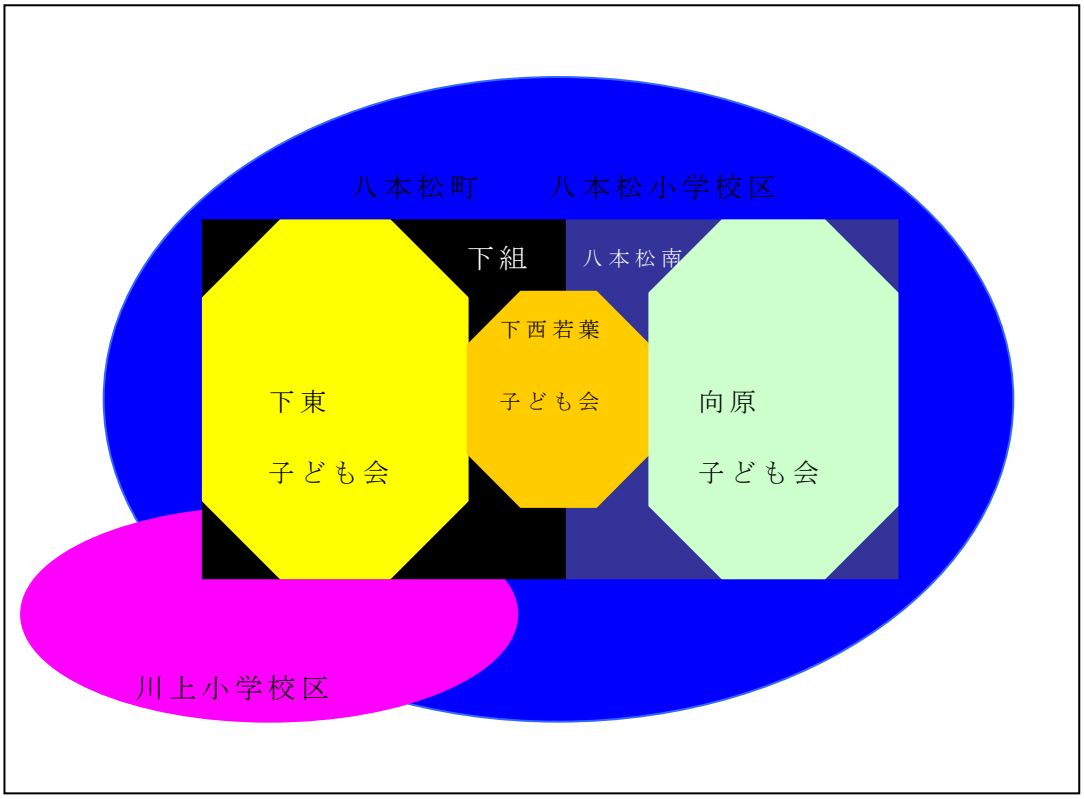


図Ⅳ－6　現地域コミュニティの発展イメージ図

（秋元作成）

図Ⅳ－6 のような自治会の下に各地域団体があるようなピラミッド型にするためには，大きな問題がある。それは，行政区，町内会，子ども会，学校区の分け方が統一されていないということである。

具体例として，八本松地域をみると，図Ⅳ－7 のように，八本松町の中に，行政区は下組と八本松南があるのだが，その中に子ども会は，下東子ども会，下西わかば子ども会，向原子ども会と三つある。しかも，八本松町の一部は線路を境に八本松小学校ではなく川上小学校となるなど，学区も複雑である。



図Ⅳ－7　八本松町の学区，行政区，子ども会の境界

（秋元作成）

八本松地域で行政区と子ども会の境界が違うことが原因で実際に起きた問題を取り上げる。八本松地域にある神社でお祭りがある時，神社は

行政区にお祭りの参加者の取りまとめをお願いする。行政区でお祭りの参加をうながす回覧板をまわしたり，子ども神輿に参加する子どもを募集したり,相撲大会に参加する子どもを募集する。その時に下組町内会，八本松南町内会のどちらの行政区にも属していない，境界に位置している子ども会は，お祭りの話がまわってこない。そのため，下西若葉子ども会の子どもは，参加したくても参加できない状況にあった。結局，有志で下西若葉子ども会の子どもにもお祭を参加することができるように立ち上がった人のおかげで，下西若葉子ども会独自で回覧をまわし，神輿をたちあげたおかげで，子どももお祭や相撲大会に参加することできた。こういった境界問題があるせいか，下西若葉地区は加入率 30%，下東子ども会も加入率 35%と低い。牧（2005）は，山間部の校区と町内会・子ども会の境界が一致している地区の方が，子ども会への加入率が高いと述べている。このことからもわかるように，境界というのは子ども会活動や町内会活動において重要なものとなっている。

広島市にも，境界問題が起きている地域がある。その地域はちょうど小学校区の境界付近にある地域である。ある住人の例をあげると，町内会と子ども会が一緒の子どもたちは，通う小学校が別なので，その子ども会には学校の友達がいない。学校が違うと仲間に入りにくい。そこで，同じ小学校に通っている隣の子ども会（町内会）に入りたいと申し出ると,「町内会の境界が基準」という町内会の慣習により受け入れられなかった。

このように，行政区とコミュニティ（町内会・子ども会・学校区）の境界がバラバラであるとコミュニティの連携がとりにくいことがわかる。これは，他地域でも問題として取り上げられている。一般的には，小学校区の境界については，学校が新設される場合などは，地元の人や町内

会，PTA，学校関係者等で通学区域をどう設定するか話し合う。児童・生徒の通学距離や交通事情等の安全性，将来的な人口動向等を踏まえて検討される。

通学区域，町内会・子ども会の区域を整合するべきだと考えるが，問題点もある。それは，児童・生徒数の増減に伴い学校の適正配置や教室等の施設面の問題。通学の安全性の問題等が出てくるのではないだろうか[7]。 確かにそういった問題点はあるだろうが，子どもへの教育環境を整えるためには，小学校区は難しいとしても，町内会・子ども会の境界を統一させることは必須である。

[1] 東広島市（2009）：東広島市.
http://www.city.higashihiroshima.hiroshima.jp/www/toppage/0000000000000/APM03000.html

[2] 東広島市（2009）：テクノタウン東広島.
http://www.pref.hiroshima.lg.jp/page/1172474062355/index.html

[3]東広島市（2009）：テクノタウン東広島.
http://www.pref.hiroshima.lg.jp/page/1172474062355/index.html

[4] 社団法人　青少年育成広島県民会議（2010）：社団法人　青少年育成広島県民会議
http://www.hiro-payd.or.jp/index.html

[5]文部科学省（2010）：完全学校週五日制
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/week/index_a.htm

[6] 八本松おやじの会（2010）：八本松おやじの会
http://oyaji.ciao.jp/

[7] 議会報告（2010）：旭川市議会議員　中村のりゆき
http://www.komei.or.jp/giin/asahikawa/nakamura_noriyuki/
の議会の質問・答申を参考に筆者が問題を検討

第Ⅴ章　結論

第一節　子ども会の課題と展望

第Ⅰ章にて，子ども会についての先行研究の成果から、子ども会の研究に関する課題を検討し，第Ⅱ章にて全国子ども会の現状を把握し，第Ⅲ章にて広島市子ども会について，第Ⅳ章にて東広島市子ども会について考察した。

子ども会は地域によって活動内容も違い、活発さも違う。調査してみると子どもの減少と共に衰退しつつある地域もあるが、広島市旧市街地の一部や新興団地の高陽地区などでは、加入率低下を防止するために、全員加入にする活動を行い、地域のつながりを無くさないための活動をしている地域もあった。これは子ども会だけの活動ではなく、自治会などの協力により行っていた。加入率をあげる活動を行わない地域は、加入率はますます低下していくことがわかる。

このように、子ども会はいま活動が停滞し、組織数が減少するか、維持するかという分岐点にたっていることがうかがえる。時代が変わっていくと、人々の求めることも変わってくる。それに対し、子ども会は、適合していく必要がある。

現状として、子ども会活動は活動内容を理解できていない人がもちまわりで役員になる地域が多い。そのため、活動内容を熟知していないうちに前年度と同じ活動を行っていたら任期が終わっていたという人も少なくない。こういった状況を避けるためには、活動をフォローしてくれる年配者やリーダー的存在が必要である。そのための育成指導員の制度なのであるが、広島市の現状をみると活かされている地域と活かされてない地域の差が激しいように感じた。これは、1974（昭和 49）年、約 36 年前に出来た制度である。35 年前からこのような制度をつくろうと

した広島市は確かに先進的だが、時代にあわせて変化してきたかというと、子ども会役員の方々はそうとは感じていない。この制度も見直しが必要となっている。広島市からおりている補助金の半分を育成指導員に利用しているため、見直しは必ずしなければならない。

また、地区内の育成指導員同士のつながりはあるようだが、子ども会同士の役員のつながり、横のつながりは薄いように感じた。各地域がそれぞれの活動をそれぞれで行っている。広島市が育成指導員にお金をかけるのも必要とは思うが、その経費だけではなく、役員の人たちを集めて座談会を行う、ランチを一緒に食べて話をする機会をつくる（昼食代と交通費は補助を出す。）というような、気軽に参加できる子ども会活動相談を行うのも良いのではないだろうか。インタビューをしていて感じたのが、横とのつながりを持っている方と持っていない方では熱心さが違うように感じた。横とのつながりを持つことでお互いの愚痴をいったり、改善点をみつけたり、向上心がわくのではないかと感じる。

子ども会の活発さは、地域環境の影響を受けている（住宅環境や治安、子ども会の規模など）が、それ以外に大きい影響は、リーダー的な存在、子ども会活動を支えるまわりに人々である。しかし，リーダーがいてもそれをまわりで支える人，相談にのる人といった協力者が必要である。こういった協力者は，子どもの親世代だけでは難しい。そこで、自治会の力や敬老会といった地域コミュニティの力が必要である。子ども会での活動に人手が足りない時に手をさしのべる必要がある。

これは東広島市の子ども会の事例を見ると、切に感じることである。東広島市は、子ども会活動、週五日制対応行事、放課後子ども教室、町内会活動，神社主催のお祭り，安全パトロール，地域コミュニティ活動，おやじの会，スポーツ少年団（ソフトボール，バレーボール，柔道，空

手，ダンス，水泳）など様々な活動があるものの、活動全体を統率するような組織としてのまとまりがない。そこで、自治会が一番上にたつなどして、これらの地域コミュニティをまとめれば、人手不足も今よりは解決できるだろう。いまの東広島市は、知人を捜して活動をするしかない状況である。

基町地区の子ども会活動を熱心にされている方が持論を唱えていた。それは，子ども会で活動した子どもが，ジュニアリーダーを経験し，子ども会を支えていく，ジュニアリーダーを経験した子どもが将来親世代になった時に，子ども会活動に参加するという連鎖をつくりたい。という内容である。これは大変素晴らしい持論で理想的な在り方だと感じるが、いまの子ども会の現状では、難しい。それは、どこの子ども会も低学年の行事への参加率は高いのだが、高学年になるにつれ、参加率は低下し、スポーツ少年団や塾や習い事をするようになってしまうからである。これでは上につながる連鎖はうまれない。ここで考えられるのは、連鎖を生むような活動を行うか、思いきって低学年向けの活動を主にするかである。高学年の子どもには、対応した行事を少し行う、または低学年の面倒をみるという役割を担っても良いのではないだろうか。これが、時代に適応するということだと考える。

また、広島市・東広島市の両方で問題になっているのが、町内会・子ども会・学校区が異なっていることである。広島市で調査した地域は町内会と子ども会の境界は一致していたようだが，学校区は異なっているところもある。広島市で学校区の検討委員会も開かれているようだが、この境界が子ども会や町内会の活動の活発さに影響することは間違いない。実際に東広島市で起こった境界問題の事例を第Ⅳ章では取り上げた。ちょうど町内会（行政区）の境界に位置している子ども会が，地域の行

事（お祭）に参加できないという状態に陥ってしまった（地域の方々のおかげで子どもたちはお祭に参加することはできた)という事例である。境界問題を抱えている地域は，子ども会加入率も低くなっていた。他地域は 70%以上子ども会への加入率があるのだが，この地域だけは 30%程度しか加入していない。このことからも，町内会・子ども会・学校区の境界，特に町内会と子ども会の境界を等しくすることは，子ども会活動・地域活動の活発さに影響を与えている。東広島市は、GIS で学校区をつくった際に感じたのだが、町丁大字がまたがり、番地でわけられている地域が多かった。境界がとても複雑である。学校区は子どもの人数や道路など境界をつくるために考える要素が多く、なかなか簡単ではないことは、全国に同じような問題を抱えている地域があることからわかる。しかし、町内会に関しては、元々子ども会があった地域に行政区をつくる場合は、一致させるべきである。東広島市の八本松地域では、そのせいで板挟みの地域に住む子どもが行事に参加したくてもできないような状況になっている。これは早急に改善すべき点である。

	良い面	改善すべき点	改善案
広島市	・育成指導員という独自の制度がある ・町内会、子ども会の連携がある ・広島市子ども会連合会、区子ども会連合会、町子ども会連合会とピラミッド型に組織化されている ・加入率をあげる活動をしている地域がある	・地域のコミュニティ全体との協力体制はみられない地域が多い ・くじやじゃんけんで子ども会役員になる保護者が多く、「やらされている」という気持ちで役員をやりがち ・学校区と町内会・子ども会の境界が異なる ・連合会が組織化されているのはいいが、実際には市子連から区子連を経由せず、学区子ども会に直接指示している場合もある。 ・加入率がどんどん減少している地域がある	・育成指導員の活動をより活用できるように見直す ・育成指導員の横のつながりも必要であるが、役員の横のつながりをつくるきっかけとなる場所を提供する ・ニーズにあわせた子ども会活動に変更する ・リタイア世代が保護者世代を助ける
東広島市	・地域の中で様々な子どもに対する活動があり、積極的に活動されている ・子ども会会長は推薦を受けたり、自主的になったりする方が多い。広島市に比べてくじやじゃんけんという回答が少なかった。	・町内会と子ども会または、地域コミュニティ等との連携がとられていない。 ・学校区・町内会・子ども会全ての境界が異なる地域がある ・加入率が良い地域と悪い地域がはっきりわかれている ・子ども会活動に対してアドバイスをしたり相談する場所がない	・町内会が上にたち、その傘下に地域にコミュニティが入るというように組織化する ・町内会と子ども会の境界を統一する

表Ｖ－1　広島市と東広島市子ども会まとめ（秋元作成）

第二節　本研究の成果と課題

約五年前に子ども会学会が設立されたことからもわかるように､｢子ども会｣という研究分野はいままであまり活発でなかった分野で、いま注目されつつある分野である。そのため、先行研究も少なかった。私が取り上げた広島市についての先行研究には、牧（2006）が校区の変遷と子ども会活動について述べている研究があるが、具体的な地域事例は少なかった。そこで、具体的な地域事例を取り上げ、研究されていない東広島市と比べることで、ある程度組織が整っている広島市と発展段階の東広島市の子ども会を比較することができた。ふるくから地方都市として発展し、政令指定都市として人口が集まり、市街地に新興住宅が出来ていき､古いまちと新しいまちが混在した地域がうまれていった広島市と、広島市のベッドタウンとして，そして工場誘致、大学誘致などで発展していった東広島市を比較することは、地域ごとに子ども会活動が違うのかを検討する上で成果であった。

課題は、データ（特に広島市）は揃っていることが多かったが、それを分析する手法がもっと最適なものがあったかもしれない。また、インタビューをメインにしたため、人々の主観が入ってしまっている可能性がある。ということである。住民属性についても、戸建て地区や職業など詳細にもっと詳細に分析すれば何か新たなことがわかったかもしれない。

あとがき

今回，子ども会のことについて調査する際に，ありがたいことに，多くの子ども会役員の方や子ども会の関係者に協力していただきました。

個人情報保護法があるために，なかなか個人情報を手に入れることは難しく，知り合いの知り合いを紹介してもらうという地道な形で調査を進めていきました。これも,「この人の話を聞くと面白いと思うよ」,「この人に連絡をとってみてあげる」と親切に対応してくださった子ども会関係者の方々のお陰です。

調査方法は電話をして連絡をとった後，アンケートをお願いしてインタビューをするという形をとっていました。しかし，お忙しい方も多かったので，なかなか連絡がつきませんでした。その時は，約束もせず直接家に行き，突然アンケートをお願いすることもありました。急な訪問にも，アンケートを快く受け取って下さる方が多く，地域のつながりが薄くなっているといわれている世の中ですが，こんなに親切な方がたくさんいるのかと感動しました。

子ども会の役員をしている方は，志が高い方も多く，子ども会の現状や問題点をどうにかしたいと胸に秘めている方が多かったように感じます。その気持ちを誰かに伝える機会が現状ではない地域が多いと感じます。子ども会活動は，同じ世代の子どもを持っている親同士とのつながりとなってしまいます。そこに，地域の子ども会経験者，人生の先輩である方々がフォローして下さったり相談にのったり，助けてもらっている地域の方々は，とても活動しやすいといっていました。そういった方が上に立ち，指示して下さると，子ども会に入ったばかりで何をすればいいのかわからない保護者にとっては良いでしょう。

一方で，地域の方々との調整が難しいという方々もおられました。このことから，アドバイスをする方にも，アドバイスはするが，子どもたちの考え，親世代の自主的な活動も尊重するという態度が大事であるということがわかりました。

そういった指導者を育てる広島市の活動は，育成指導員という形で見られます。確かに，うまくいっている地域もありますが，子ども会の役員と活動内容はあまり変わらないという地域もあります。いまのところ，育成指導員は会長の推薦と決まっています。推薦を受ける人は役員の一つの役職として引き受ける人もいます。成り手がいないとはいえ，条件をある程度定めることをしなければ，折角の指導員の役割を活かしきれていないと感じます。例えば,子ども会を何年か経験したことがある人，地域の各コミュニティと連携がとれる人，そして出来ればリタイアして時間に余裕がある人，そしてなにより，保護者の意見をうまく取り入れられる人などの条件が必要なのではないでしょうか。

将来，自分が親世代になった時，今ある子ども会がどのような形になっているのか楽しみでもあり，こわくもあります。世界にはない日本独自の子ども会という活動は，よりよく生きるためにもとても良い仕組みで，地域にとっても必要だと思います。しかし，現実では，必要な活動だとは思われていても，現実には仕事もあり子どもの習い事もあり，親世代はとても忙しく，子ども会の活動を熱心にする時間もないというのが現状です。

この問題を解決するためには，子ども会・地域の問題だけではなく，社会福祉や国の仕組みを変えなければいけません。仕事の環境を整える，残業を失くす，社会福祉を充実させ高齢者になっても働かなくても生活ができる環境をつくるなど，結局はそういった社会の仕組みも地域の活

動や子ども会の活動に大きく関係してくるのだと感じました。

そして，広島市役所青年課の方や広島市子ども会連合会の方，東広島市子ども会連合会会長さん，東広島市企画課の方にはお忙しい中，たくさんの資料をご提示いただきました。他にも書ききれませんが，各単位子ども会の会長，育成指導員の方々，アンケート・インタビューに答えてくださった方々など，この調査は多くの方々の協力がなければ決してできませんでした。この場をかりて，お礼を申し上げます。

そして，大学院でお世話になった先生方には感謝の言葉をどう言い表せば良いのかわからないほど，感謝しています。他の大学から大学院に入ってきたということで，私の研究内容に例えると，知らない土地に引越し，知り合いもいない中，子ども会の役員活動をしなさいといわれるのと一緒です。右も左もわからない中，授業などで丁寧にアドバイスして下さった先生方には感謝しています。

ゼミ生として受け入れて下さった由井義通先生にはとても感謝しております。不勉強のためにご迷惑をおかけすることもたくさんありました。その中で適切なアドバイスをしていただき，何度も助けていただいたと思います。授業等でお世話になった，前杢英明先生，池野範男先生，小原友行先生，棚橋健治先生，三宅紹宣先生，草原和博先生，畠中和生先生，森田英樹先生，修士論文について声をかけてくださった，三宅紹宣先生，草原和博先生，子ども会のことについてアドバイスを下さった下向井 龍彦先生，畑浩人先生，大変お世話になりました。ありがとうございました。大学院の授業をふりかえると，自分の力不足でうまく発表がいかなかったこともあり，同級生にも先生にも迷惑をかけたことと思います。アドバイスをくれた同級生や先輩方，先生方の言葉はいまでも覚えています。力が足りない自分に悔しいと思い，陰で涙を流したことも

いまでは良い思い出です。

論文を書いていると，行き詰まり，何を書いているのかわからなくなることが何度もありました。そんな時にアドバイスをくれた先輩，同級生，後輩，非常勤先で「がんばってください」といってくれた生徒や子ども会アンケートに一筆書いてくださった方の言葉や前の大学の先生方の励ましの言葉に背中を押され何度も助けられました。両親や兄弟もわたしの身体を心配してくれて,普段は恥ずかしくてお礼はいえないので,この場をかりてお礼をいいたいと思います。

将来,自分が親になった時,子ども会に関わることになると思います。その時も子ども会がなお活発に活動されていることを願い，今度は自分が当事者になり，地域の子どもへの教育に貢献したいと思います。そして，　本研究が，子ども会活動に何かしらの示唆を与えることを心から願います。

2010 年 1 月

秋元　美輝

参考文献

・結城　恵「メンバーのサークルの関わり方とサークル活動への評価―子育てサークル活性化のために―」　国立女性教育会館研究紀要第５号，2001 年．　pp.109-118

・ ひろしまこども夢財団ホームページ（2008）：
http://www.yumezaidan.or.jp/

・i-子育てネット　全国子育てネットワーク（2008）：
http://www.i-kosodate.net/index.html

・子育て支援対策等特別委員会説明資料「子育て支援に関する国の動向等について」2008 年．

・子育て支援対策等特別委員会説明資料「広島市男女共同参画基本法計画（第１期)の推進状況（平成 19 年度）について」2008 年．

・(財）ひろしまこども夢財団「2008 年度版子育てガイドブック」

・西区民だより（2008 年）

・広島市「すくすく」

・広島市「すこやかファミリー」

・広島市「わくわく」

・広島市「のびのび」

・財団法人　母子衛生研究会　「赤ちゃん＆子育てインフォ」

・全国子ども会連合会ＨＰ：http://www.kodomo-kai.or.jp/

・広島市子ども連合会「平成 18 年度第 51 回総会資料」2007 年．

・広島市子ども連合会「平成 19 年度第 52 回総会資料」2008 年．

・広島市子ども連合会「平成 20 年度第 53 回総会資料」2009 年．

・社団法人全国子ども会連合会「第 42 回（平成 20 年度）全国子ども会育成中央会議・研究大会　開催要項」

・社団法人　全国子ども会連合会「2008 年度版子ども会白書」2009 年．

・野垣義行『中学生の生活環境と生活意識―広島県における地域類型別比較―』横浜国立大学，1968 年.
・屋敷和佳『人口属性よりみた社会教育施設の利用者率とその地域差について－「社会生活基本調査　昭和 51 年」の第 2 次分析―』日本建築学会大会学術講演梗概集，1985 年.
・門田幸太郎他『教育力の地域差に関する研究―地域行事への参加度―』2000 年.
・畠山豊吉『教育社会学部会Ⅱ』
・全国子ども連合会ニュース（広報誌　バックナンバー）
・全国子ども連合会（2009）　http://www.kodomo-kai.or.jp/
・社団法人　広島県子ども会連合会ホームページ（2009）：
http://www15.ocn.ne.jp/~kenko34/
・広島市子ども会連合会ホームページ（2009）
http://www.kodomokai.xii.jp/hiroshima/
・山梨県ホームページ（2009）：山梨県庁
http://www.pref.yamanashi.jp/index.html
・上毛かるたホームページ（2009）：財団法人群馬文化協会
http://www.jomokaruta.org/
・森川洋（1985）：広島市の地理的特性．広島市編：『広島新史　地理編』中本本店
・広島県民会議（2009）
http://www.hiro-payd.or.jp/index.html
・文部科学省（2010）：完全学校週五日制
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/week/index_a.htm
・八本松おやじの会（2010）：八本松おやじの会
http://oyaji.ciao.jp/
・議会報告（2010）：旭川市議会議員　中村のりゆき
http://www.komei.or.jp/giin/asahikawa/nakamura_noriyuki/

・小林文人、佐藤一子　『世界の社会教育施設と公民館　草の根の参加と学び』　エイデル研究所　2001 年
・松原治郎　『コミュニティと教育　運動と参加の時代の教育を考える』学陽書房　1977 年
・福留強『生涯学習まちづくりの方法　～市民が主役のまちづくりへのアプローチ～』日常出版株式会社　2003 年
・こどもとまちづくり研究会　『まちづくり読本②　こどもとまちづくり　面白さの冒険』　風土社　2000 年
・NPO とまちづくり研究会　『まちづくり読本③　ＮＰＯとまちづくり　明日へジャンプ！まちをささえる市民事業体』　風土社　1997 年
・環境とまちづくり研究会　『まちづくり読本④　環境とまちづくり　地球にやさしいまちと暮らし』　風土社　1999 年
・ロバート・D・パットナム「哲学する民主主義」NTT 出版，2001 年.
・ロバート・D・パットナム「孤独なボウリング」柏書房，2006 年.
・白井愼、小木美代子、姥貝荘一編著『-21 世紀への展望-　子どもの地域生活と社会教育』学文社，1996 年.
・井口貢『地域に学ぶ文化政策　まちづくりと共感、協育としての観光』水曜社，2007 年.
・平成 15 年度公民館事業報告データ
・ひろしまの公民館 50 周年記念事業実行委員会『ひろしまの公民館 50 年の軌跡』ひろしまの公民館 50 周年記念事業実行委員会発行，1999 年.
・福留強『生涯学習まちづくりの方法～市民が主役のまちづくりへのアプローチ～』日常出版，2003 年.
・広島市可部公民館ＨＰ：
http://www.hitomachi.city.hiroshima.jp/kabe-k/index.html

・広島市中央公民館ＨＰ：

http://www.hitomachi.city.hiroshima.jp/chuo-k/

・広島市高陽公民館ＨＰ：

http://www.hitomachi.city.hiroshima.jp/koyo-k/